千葉県文化財センター調査報告第206集

# 千葉市地蔵山遺跡（1）

## ―住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―

1992

住宅・都市整備公団

財団法人　千葉県文化財センター

# 千葉市地蔵山遺跡（1）

じぞうやま

―住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―

1992

住宅・都市整備公団

財団法人　千葉県文化財センター

# 序　　文

千葉市は千葉県のほぼ中央に位置し、県都として千葉県の政治・経済・文化の中心であるばかりでなく、近年は首都機能の一翼を担う中核都市として目覚ましい発展を遂げております。また政令指定都市への移行を控え、幕張新都心の開発、各種公共施設の拡充や大規模な宅地造成事業が盛んに実施されております。こういった状況に対応すべく、千葉市の中心部にほど近い千葉寺地区においても、住宅・都市整備公団により土地区画整理事業が計画されました。

一方、千葉市は貝塚や古墳をはじめとする埋蔵文化財の宝庫としても知られており、千葉寺地区周辺においても、青葉の森公園内に保存された荒久古墳や公園造成等に伴って調査された荒久遺跡、そして事業地の南側を通る千葉急行電鉄建設に伴って調査された鷲谷津遺跡及び観音塚遺跡など多くの遺跡が密集することが知られておりました。とくに鷲谷津遺跡、観音塚遺跡は事業地内に連続するものであります。千葉県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関との慎重な協議を重ねてまいりました結果、一部についてやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、昭和60年度から当文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。

千葉寺地区所在の遺跡群のうち最も北側に位置する地蔵山遺跡は、主要地方道千葉・大網線を挟んだ北半部について昭和63年度から平成元年度にかけて確認、本調査を行い、南半部については昭和61年度から調査を開始しましたが、縄文時代～平安時代の集落跡、墳墓群などの重要な成果が得られました。

このたび、これらの成果のうち地蔵山遺跡北半部の整理作業が終了し、千葉寺地区遺跡群の発掘調査報告書の第１冊として刊行するはこびとなりました。本書が学術資料として寄与することはもとより、地域の歴史を知る資料として、また文化財の保護と普及のために広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、発掘調査から整理作業、報告書の刊行まで終始御指導と御協力をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、住宅・都市整備公団、地元関係諸機関各位に深くお礼申し上げるとともに、酷暑、厳寒にも耐えて発掘調査、整理作業に協力された調査補助員の皆様に心から深謝の意を表したいと思います。

平成４年３月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　岩　瀬　良　三

# 凡　　例

1．本書は千葉県千葉市千葉寺町603他に所在する地蔵山遺跡の発掘調査報告書である。遺跡コードは201－060である。

　本書の刊行にあたって、主要地方道千葉・大網線を挟んで遺跡南側に所在した、委託契約時には鷲谷津遺跡Ｂ区として調査された部分（遺跡コード201-058B）を改称して地蔵山遺跡に含めた。そのため便宜上本書で報告する北半部を地蔵山遺跡Ａ区、鷲谷津遺跡Ｂ区とされていた南半部を地蔵山遺跡Ｂ区と呼称する。

2．この調査は、住宅・都市整備公団千葉寺地区土地区画整理事業に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、住宅・都市整備公団との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3．調査は、昭和63年８月１日から平成元年３月31日に上層確認・本調査を行い、続いて平成元年４月１日から平成元年６月30日までに下層確認・本調査を実施した。

　現地の調査は、昭和63年度については主任調査研究員伊藤智樹、調査研究員福田誠、福田依子が、平成元年度については主任技師伊藤智樹、技師井上哲朗、四柳隆が担当した。

4．整理作業は平成２年４月１日から着手し、平成３年10月31日に終了した。作業は平成２年度については主任技師藤岡孝司が、平成３年度については主任技師渡辺修一が担当した。

5．本書は、調査部長天野努、調査部長補佐阪田正一、班長谷　旬の助言のもとに、渡辺修一が執筆、編集を行った。

6．本書図版１の航空写真は、京葉測量株式会社撮影によるものを使用した。

7．本書の作成にあたっては、千葉県教育庁文化課、住宅・都市整備公団の関係各位をはじめ多くの方々のご指導、ご協力を得た。記して深謝の意を表する。

# 用　　例

1．本書で使用した地形図の出典は次のとおりである。

第１図：国土地理院発行1/25,000地形図『千葉東部』（ＮＩ－54－19－15－１）

同　上　『蘇我』（ＮＩ－54－19－15－２）

第４図：明治15年参謀本部陸軍部測量局作成1/20,000『千葉町』

上記以外：住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部作成千葉寺地区現況図

2．本書では、一部で一般的に使用される用語とは異なる遺構の名称を使用している。それらについては次のとおりである。

**竪穴建物跡**　一般に「竪穴住居跡」あるいは「竪穴住居址」と呼ばれるもの。

**古墳・方墳**　８世紀以降に築かれた周溝により区画される墳墓を古墳の範疇に含める。一般に「方形周溝遺構」「方形周溝状遺構」「方形区画墓」「方形墳墓」等と呼ばれるもの。

3．本書に掲載した遺構の縮尺は、竪穴建物跡、古墳が1/80、土坑が例外を除いて1/50、溝状遺構が1/400で統一している。

4．遺物の縮尺は、小型の石器が2/3、大型の石器が1/2、土器（縄文土器拓影を含む）が1/4、弥生土器拓影が1/3を基本とするが、他の遺物については任意に縮尺を設定しているので留意されたい。

5．遺構実測図に使用しているスクリーントーンは次のとおりである。

カマド構造　炉・火床　焼土塊

カマド内断面　構築材崩落層　焼土層　灰層

6．土器の断面については、縄文土器～土師器を白抜きとし、須恵器を黒とした。繊維が胎土中に含まれるものについてはスクリーントーンを入れた。

7．土器の中で赤色塗彩されたものに関しては器面にスクリーントーンを入れた。

# 本文目次


Ⅰ 序 章

1 千葉寺地区遺跡群とその調査……1

2 周辺の遺跡について……3

3 調査の方法……6

Ⅱ 素 描……7

Ⅲ 先土器時代

1 N21－23区・N22－03区・他……9

2 N22－03区・N22－08区……15

Ⅳ 縄文時代

1 梗概……17

2～4 （遺構・遺物各説）……17

5 小結……29

Ⅴ 弥生時代

1 梗概……30

2～5 （遺構・遺物各説）……30

6 小結……36

Ⅵ 古墳時代

1 梗概……37

2～13 （遺構・遺物各説）……37

14 小結……64

Ⅶ 古 代

1 梗概……67

2～7 （遺構・遺物各説）……67

8 小結……73

Ⅷ 時期・性格不明の遺構

1 梗概……74

2 土坑……74

3 溝状遺構……79

Ⅸ 補 論

古墳時代における竪穴建物の構造的変遷再論……81

Ⅹ 跋 語……87

# 挿図目次


第１図　遺跡の位置……1
第２図　遺跡の範囲と名称（１）……2
第３図　遺跡の範囲と名称（２）……3
第４図　遺跡周辺図……5
第５図　N22－23・N23－03区他遺物出土状況……8
第６図　N22－23・N23－03区他母岩別分布……9
第７図　N22－23・N23－03区他出土石器……10
第８図　N22－03・08区遺物出土状況……15
第９図　N22－03・08区出土石器……15
第10図　炉穴跡……18
第11図　縄文時代遺物分布（土器）……19
第12図　縄文時代遺物分布（石器）……21
第13図　縄文土器（１）……25
第14図　縄文土器（２）……26
第15図　縄文時代の石器（１）……27
第16図　縄文時代の石器（２）……28
第17図　ＳＩ－001……30
第18図　ＳＩ－001出土遺物……31
第19図　ＳＩ－005……32
第20図　ＳＩ－005出土遺物……33
第21図　ＳＩ－007……34
第22図　ＳＩ－007出土遺物……34
第23図　ＳＩ－010……35
第24図　ＳＩ－010出土遺物……36
第25図　ＳＩ－002……37
第26図　ＳＩ－002出土遺物……38
第27図　ＳＩ－003……40
第28図　ＳＩ－003出土遺物……40
第29図　ＳＩ－004……41
第30図　ＳＩ－004出土遺物……42
第31図　ＳＩ－006……43

第32図　ＳＩ－006出土遺物 ……44
第33図　ＳＩ－008 ……46
第34図　ＳＩ－008出土遺物 ……47
第35図　ＳＩ－009 ……48
第36図　ＳＩ－009出土遺物 ……48
第37図　ＳＩ－011 ……49
第38図　ＳＩ－011出土遺物 ……50
第39図　ＳＩ－012 ……51
第40図　ＳＩ－012出土遺物 ……52
第41図　ＳＩ－013 ……53
第42図　ＳＩ－013出土遺物１ ……54
第43図　ＳＩ－013出土遺物２ ……55
第44図　ＳＩ－014 ……57
第45図　ＳＩ－014炭化材・焼土ブロック検出状況 ……58
第46図　ＳＩ－014出土遺物 ……59
第47図　ＳＩ－015Ｂ ……60
第48図　ＳＩ－015Ｂ出土遺物１ ……61
第49図　ＳＩ－015Ｂ出土遺物２ ……62
第50図　ＳＩ－015Ｂ出土遺物３ ……63
第51図　ＳＩ－016 ……63
第52図　ＳＩ－016出土遺物 ……64
第53図　ＳＩ－015Ａ ……68
第54図　ＳＩ－015Ａ出土遺物 ……69
第55図　ＳＸ－001・ＳＸ－002……70
第56図　ＳＸ－003・ＳＸ－004……71
第57図　ＳＫ－015・出土遺物 ……73
第58図　土坑１……75
第59図　土坑２……76
第60図　ＳＤ－001・002・003・004……77
第61図　ＳＤ－001東区・ＳＤ－005……79
第62図　ＳＤ－001出土遺物 ……80
第63図　カマド出現前後の竪穴建物跡……81

# 図版目次

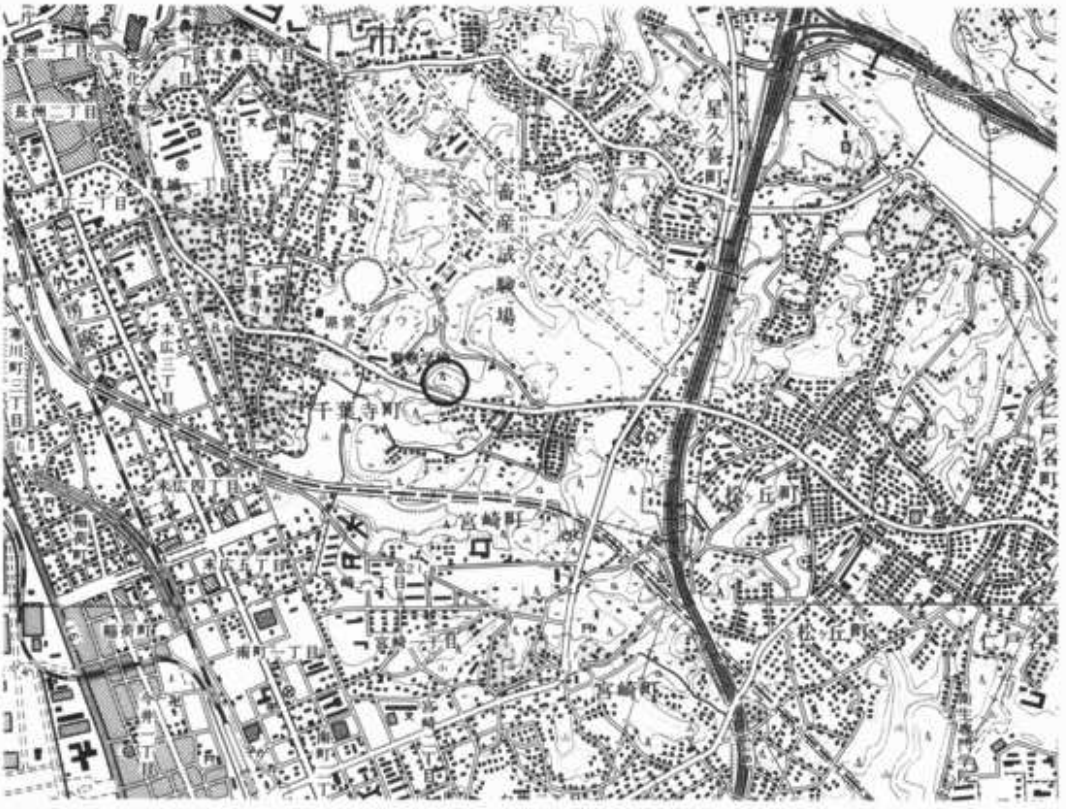

図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　1．調査区全景（上空より）
　　2．調査区全景（北より）
図版3　1．先土器時代遺物出土状況
　　2．先土器時代石器（1）
図版4　先土器時代石器（2）
図版5　1．縄文時代遺物出土状況（1）
　　2．縄文時代遺物出土状況（2）
　　3．SK－005
図版6　1．SK－006
　　2．SK－007
　　3．SK－008
図版7　1．SK－009
　　2．SK－010
　　3．SK－019
図版8　縄文土器（1）
図版9　縄文土器（2）
図版10　縄文時代石器
図版11　1．SI－001
　　2．SI－005
　　3．SI－007
図版12　1．SI－010
　　2．弥生時代出土遺物（1）
図版13　1．弥生時代出土遺物（2）
　　2．SI－002
図版14　1．SI－003
　　2．SI－004
　　3．SI－006
図版15　1．SI－008
　　2．SI－009
　　3．SI－011
図版16　1．SI－012
　　2．SI－013
　　3．SI－014
図版17　1．SI－015B
　　2．SI－016
　　3．SI－015A
図版18　古墳時代出土遺物（1）
図版19　古墳時代出土遺物（2）
図版20　古墳時代出土遺物（3）
図版21　古墳時代出土遺物（4）
図版22　古墳時代出土遺物（5）
図版23　古墳時代出土遺物（6）
図版24　古墳時代出土遺物（7）
図版25　古墳時代出土遺物（8）
図版26　古墳時代出土遺物（9）
図版27　古墳時代出土遺物（10）
図版28　古墳時代出土遺物（11）
図版29　古墳時代出土遺物（12）
図版30　1．SI－015A出土遺物
　　2．SX－001
　　3．SX－002
図版31　1．SX－003
　　2．SX－004
　　3．SK－015
図版32　1．SK－001
　　2．SK－003
　　3．SK－004
　　4．SK－011
　　5．SK－013
　　6．SK－017
　　7．SK－018

# Ⅰ 序　　章

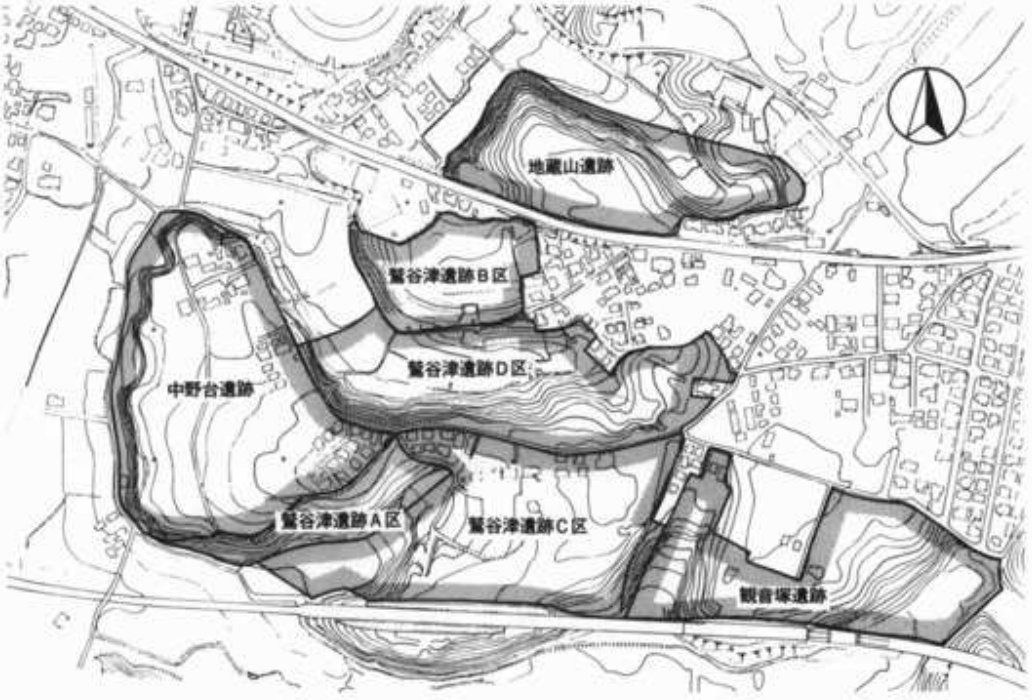
## 1　千葉寺地区遺跡群とその調査

**調査に至る経緯**　住宅・都市整備公団による土地区画整理事業が計画された千葉寺地区は、行政区画では千葉県千葉市千葉寺町に所在する。平成２年度の国勢調査の時点でおよそ83万人の人口を擁する千葉市であるが、近い将来百万都市となることが予想され、平成４年４月の政令指定都市への移行も決定している。千葉寺町は、そのように急速に発展しつつある千葉市の中心部に近く、またＪＲ京葉線開通などにより再開発の進む蘇我駅前地区に隣接するという都市化の著しい地域に位置する。かつて北側の青葉町には農林水産省畜産試験場があったが、畜産試験場移転に伴う県立青葉の森公園の整備、そして県営千葉寺球場及び陸上競技場の青葉の森公園への移転や千葉急行電鉄の建設などの周囲の環境の変化に対応し、千葉寺球場跡地から千葉急行電鉄に沿った地区に至る千葉寺町一帯に、区画整理事業が計画されたのである。

区画整理事業の施行にあたり、区域内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、千葉県教育庁文化課と住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部との間で度重なる協議が行われ、事業地内に緑地として現状保存する部分と記録保存を行う部分を定め、記録保存を行う部分について



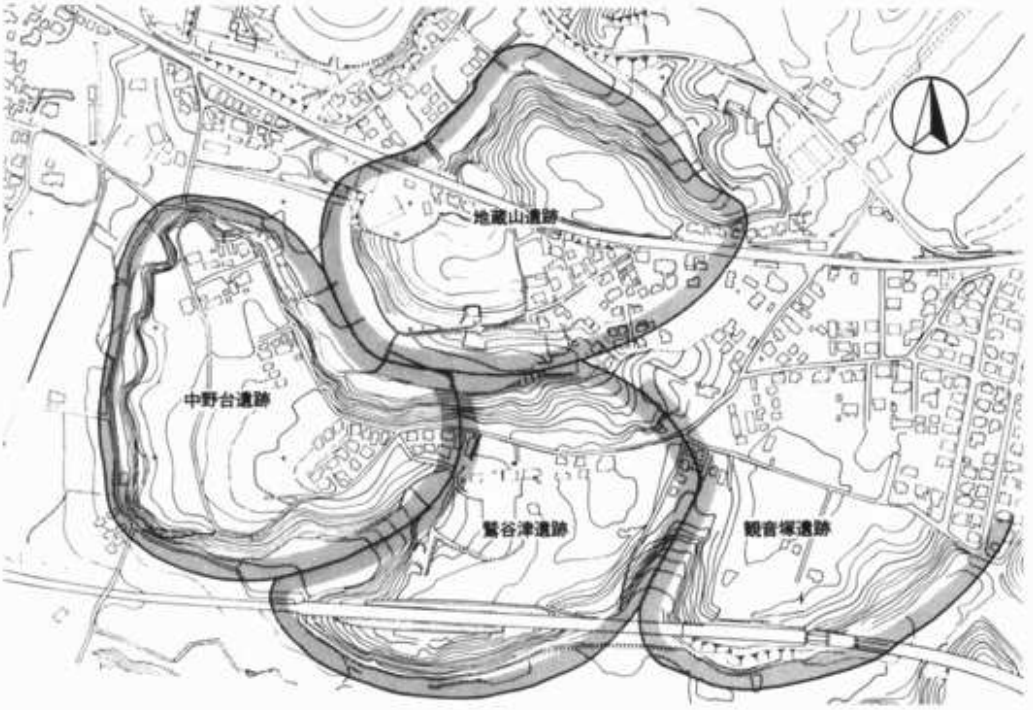

第１図　遺跡の位置（国土地理院発行1/25,000千葉東部・蘇我）




第2図　遺跡の範囲と名称（1）（1/6,000）

は事業計画との整合を図りつつ、調査計画を策定して実施することになった。対象となった遺跡は、中野台遺跡（201－057）、鷲谷津遺跡（201－058）、観音塚遺跡（201－059）、地蔵山遺跡（201－060）の4遺跡である。

**調査の経過**　上記4遺跡の範囲は、字名を参照のうえ、当初第2図のように決定された。最も広い範囲を占める鷲谷津遺跡については、地形的条件等を考慮してA区からD区の4区に分割された（201－058A～D）。そして現地の調査は昭和60年度より着手された。昭和60年度は中野台遺跡の一部の確認調査（ごく一部本調査）、観音塚遺跡の一部の確認調査を行った。昭和61年度には中野台遺跡、観音塚遺跡の本調査、鷲谷津遺跡A区、B区の確認調査を実施、翌昭和62年度には観音塚遺跡の確認、本調査、鷲谷津遺跡A区、B区の本調査を行った他、鷲谷津遺跡C区の一部の確認、本調査も開始された。昭和63年度には地蔵山遺跡主要部分の確認、本調査が行われ、また観音塚遺跡及び鷲谷津遺跡C区の確認、本調査の継続、鷲谷津遺跡D区の確認調査が実施されている。平成元年度は地蔵山遺跡の下層確認、本調査、鷲谷津遺跡D区の確認、本調査、中野台遺跡の残りの一部の確認、本調査を行った。この年度を境にして以後、大規模な調査はなくなり、用地問題解決地点の小規模な調査と整理作業の比重が増加する。平成2年度には鷲谷津遺跡C区2,280㎡の本調査、そして平成3年度には観音塚遺跡1,120㎡と地蔵山遺跡の残り660㎡の本調査を行っている。これにより地蔵山遺跡の発掘調査はすべて終了したが、平成3年度の調査では遺構、遺物とも全く検出されなかった。




第3図　遺跡の範囲と名称（2）(1/6,000)

**遺跡の範囲と名称について**　先述のように、調査が開始された段階で各遺跡の名称と範囲は既に決している。しかしその決定があまりに字名に忠実でありすぎたため、遺跡の把握に混乱が生じ易いものとなっていた。千葉寺地区の遺跡群は、台地上の遺構、遺物の調査が主体であるが、そのような場合、遺構、遺物の分布は台地の形状によって大きく左右されることは言うまでもあるまい。今回報告する地蔵山遺跡を見れば、その南側に所在する鷲谷津遺跡B区は、現在こそ道路によって隔てられているものの、本来は連続した台地にあり、明らかに同一遺跡として把握されるべきものであろう。同様に鷲谷津遺跡A区と鷲谷津遺跡D区の西側約1／3は中野台遺跡の斜面部であり、鷲谷津遺跡D区北半は鷲谷津遺跡B区、したがって地蔵山遺跡の斜面部である。本来鷲谷津遺跡とすべきなのは、鷲谷津遺跡C区と鷲谷津遺跡D区の一部のみであるのは地形図を見ても明らかであり、また実際の遺構群の分布もここで述べた区分を首肯させるものである。よって本書の刊行を機に、遺跡群の把握がより明解になるよう、調査委託契約時点の各遺跡の範囲と名称を変更し、第3図に示したように理解したいと考える。勿論各種記録類及び遺物に記された遺跡コードは当初のままであり、報告書との対照において煩わしいものとなることについては御寛恕願いたい。

## 2　周辺の遺跡について（第4図）

千葉寺地区の遺跡群は、千葉市中心街のある都川沖積地の南側に広がる台地上にある。台地

のすぐ西側には狭隘な海岸平野を挟んで東京湾が控えており、本来台地と東京湾との距離は僅か1kmにも満たない。台地には都川側と東京湾側に向かって開く開析谷が樹枝状に入り組んでいる。千葉寺地区遺跡群は開析谷によって分断された一つの台地の先端付近に位置し、北東の奥には県立青葉の森公園の整備に伴って調査された荒久遺跡があり、遺跡群の北西側の、通称「千葉寺谷」及び「引越し谷」を隔てて8世紀初頭の創建と言われる千葉寺がある。付近に広がる台地上には、早くから市街地化されたところを除いて、多くの遺跡が確認されている。

先土器時代の遺跡は、その性格上大規模調査に伴って初めて確認されることが多いため、殆ど知られた遺跡はない。しかし県立中央博物館・青葉の森公園（荒久遺跡）の調査でややまとまった石器群が得られている他、千葉寺地区でも随所で小規模なブロックの調査例がある。

縄文時代の遺跡には、早期の炉穴群を伴う遺跡が多い。千葉寺地区内では中野台遺跡、地蔵山遺跡があり、千葉寺地区から谷を隔てた山ノ神遺跡などでも同様の炉穴群の調査がなされている。縄文時代の著名な遺跡としては当遺跡群の北方、都川に面する矢作貝塚がある。遺跡は後期から晩期を中心に形成されている。しかし縄文時代についても、さほど周辺遺跡の実態は明らかになっていないと言えよう。

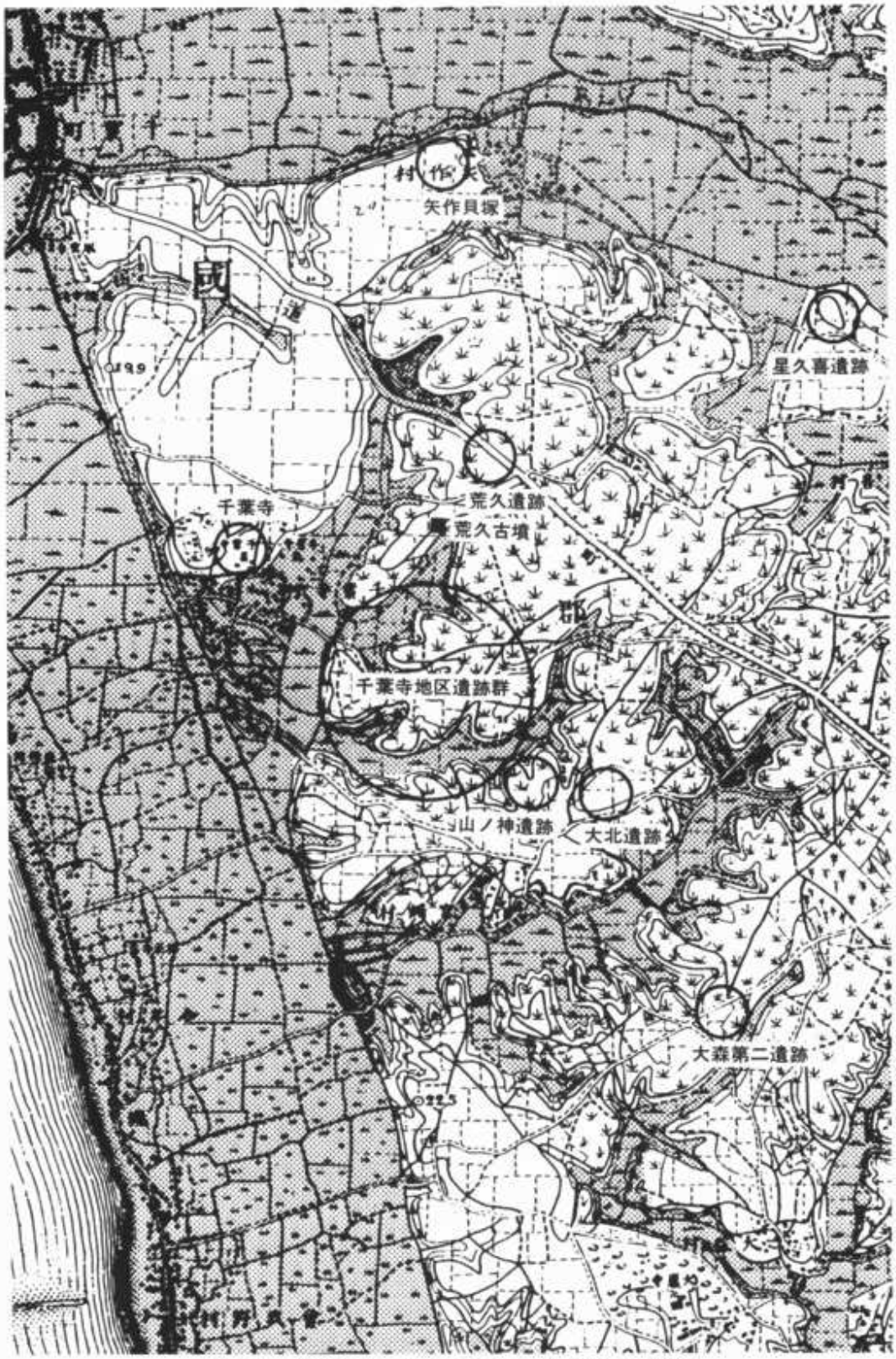
弥生時代の遺跡としては、京葉道路の建設に伴って調査された星久喜遺跡や大森第二遺跡がよく知られている。ともに弥生時代中期後半の代表的な集落跡である。千葉寺地区では中野台遺跡で同時期の方形周溝墓群が調査された他、地蔵山遺跡では集落跡が検出されている。弥生時代後期には中野台遺跡と荒久遺跡で集落跡が調査されている。

古墳時代の遺構、遺物が検出された遺跡は多い。先述の荒久遺跡では古墳時代各期の遺構が検出されているし、矢作貝塚は古墳時代後期の集落跡でもある。京葉道路建設によって調査された星久喜遺跡、大北遺跡(当初は宮崎第一遺跡)、大森第一遺跡、大森第二遺跡などの各遺跡で、古墳時代前期から後期の集落跡の調査がなされている。千葉寺地区の各遺跡でも古墳時代の遺構、遺物は多く、今回報告する地蔵山遺跡の場合は、古墳時代の竪穴建物群が中核的な存在となっている。

奈良時代～平安時代についても、古墳時代に続いて多くの遺跡で遺構、遺物が検出されている。千葉寺地区ではとくに鷲谷津遺跡、観音塚遺跡に該期のまとまった集落跡があるが、谷を挟んだ対岸の山ノ神遺跡や大北遺跡でも同様に多くの遺構が調査されている。とりわけ大北遺跡の掘立柱建物群及び多量の畿内産土師器、緑釉陶器の存在は、一般的な集落跡を超えたものを想定させる。この時期は千葉寺が既に創建され、また荒久古墳や荒久遺跡、地蔵山遺跡の墳墓群と各集落跡の関係についても興味深いものがある。

**周辺遺跡の参考文献**

柿沼修平・他『京葉』(財) 千葉県都市公社　1973
相京邦彦『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』(財) 千葉県文化財センター　1983




第4図　遺跡周辺図（明治15年参謀本部陸軍部測量局作成）

池田大助・他『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書II』（財）千葉県文化財センター　1986
清藤一順・他『千葉市矢作貝塚』（財）千葉県文化財センター　1981
菊池健一・他『千葉市山ノ神遺跡』（財）千葉市文化財調査協会　1989
山口典子・他『千葉市荒久遺跡（1）』（財）千葉県文化財センター　1989
小林信一・他『千葉市荒久遺跡（2）』（財）千葉県文化財センター　1989
渡辺修一・他『千葉市荒久遺跡（3）』（財）千葉県文化財センター　1991

## 3　調査の方法

**調査区の設定**　調査対象域全域を、公共座標に合わせて覆う50m×50mの方眼網を設定し、大グリッドとした。呼称は北西に起点を置き、西から東へA、B、C…とし、北から南へ1、2、3…として、これを組み合わせて使用する。大グリッド内は10m×10mのグリッドに25分割し、北西隅を起点に01、02、03…として南東隅を25とする。小グリッドをさらに分割する必要があるときは、5m×5mに4分割し、北西、北東、南西、南東の順にa～dを付す。このため最小グリッドの表示方法は、例えばA15－24bのようになる。

**確認調査**　上層確認調査については、調査区全域に2m×2m～2m×5mの調査坑を10%設定して遺構、遺物の分布を確認し、本調査に移行している。下層（ローム層）については、調査区全域に2m×2mの確認坑を4%設定し、石器等の遺物が出土した地点について周囲に拡張し、石器集中の存否と広がりを追及するという方法をとっている。

**遺構番号**　基本的に遺構種別毎にＳＩ-001、ＳＩ-002…、ＳＫ-001、ＳＫ-002…等の番号を付している。ただし地蔵山遺跡の一部（鷲谷津遺跡Ｂ区として調査されたもの）や観音塚遺跡はすべての遺構を通し番号で処理しているため、本書の刊行を機に遺構番号を改めることにする。今後刊行される報告書で、調査時と報告時で遺構番号が改められたものについては、必ず巻頭に対照表を掲げる。

# II 素　　描

地蔵山遺跡は、主要地方道千葉・大網線（通称大網街道）によって開削されて南北に二分されており、今回報告するのはその北半部であるが、ここで遺跡全体の遺構・遺物分布を時期毎に概観しておきたい。北半部をA区、南半部をB区とする。

先土器時代の遺物集中は3ケ所で検出された。いずれも比較的小規模なブロックである。A区ではその南縁、N22区～N23区にかけてⅣ層に帰属するブロックが検出されている。2種のナイフ形石器と角錐状石器を指標的器種として持っている。B区では中央北寄りでブロックが2ケ所検出されている。一方はⅢ層、他方はⅥ層からの出土と記録されている。地蔵山遺跡の北方に広がる広大な荒久遺跡では、確認調査によってⅥ層からの遺物が目立って出土しており、その段階には広範囲に亙って頻繁な居住の反復があった可能性がある。

縄文時代の遺構・遺物はA区、B区ともに西寄りに濃密な分布を示す。時期は早期条痕文期で、多数の炉穴と遺物包含層の展開を見る。特にB区は遺構数、遺物量とも豊富で、竪穴状遺構2基も調査され、遺構の重複も見られることからある程度の期間に亙って存続したものと思われる。また炉穴群の分布範囲には焼礫が目立ち、黒曜石を素材とした剝片石器の製作も行われていたようである。

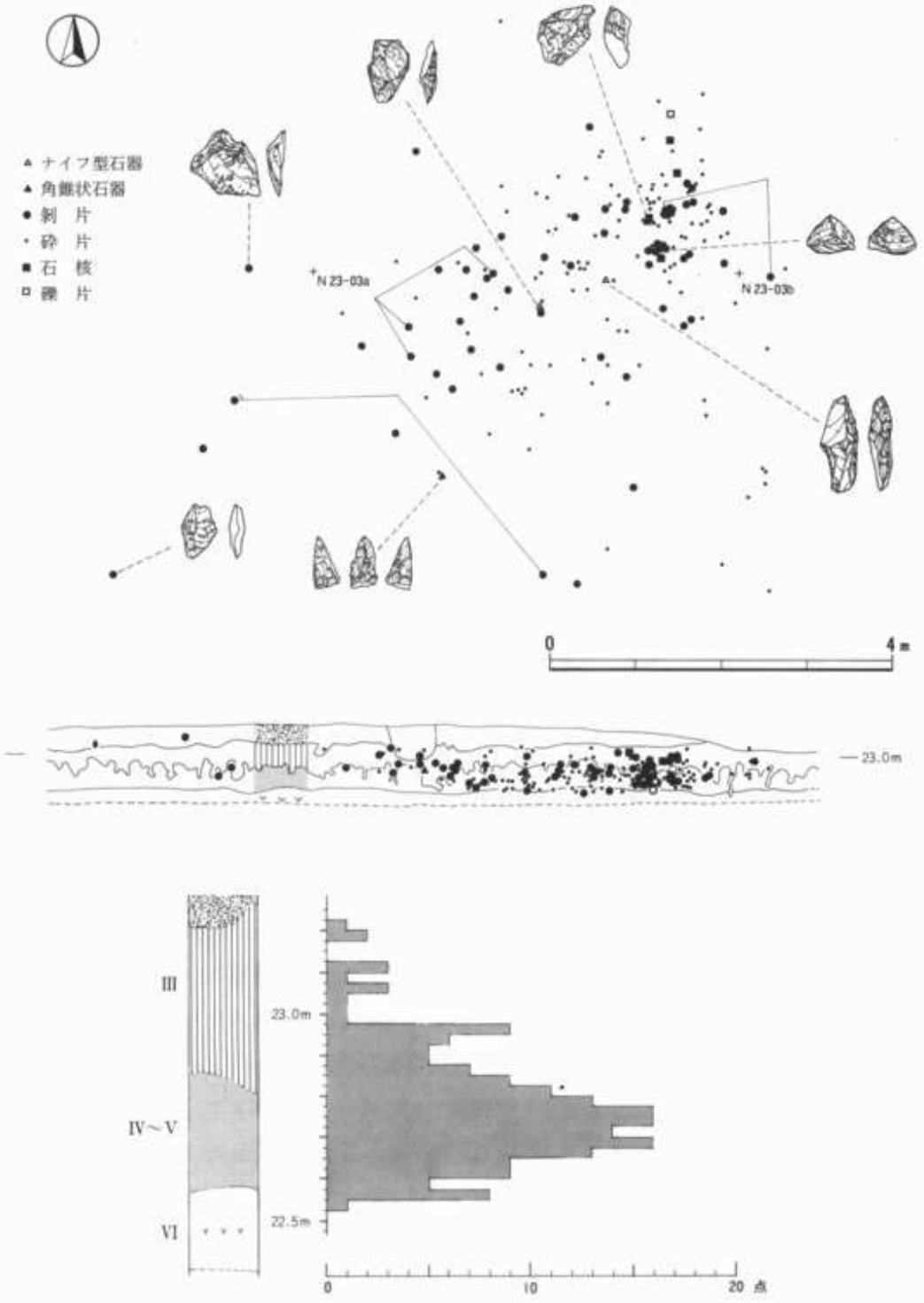
弥生時代の遺構・遺物はA区にのみ存在する。竪穴建物4棟がそれで、いずれも弥生時代中期後半に属する。中野台遺跡の墳墓群との関係が注目される。

古墳時代に入るとA区、B区合わせて25棟の竪穴建物が営まれている。5世紀後半から6世紀前半と7世紀の二度のピークがある。5世紀代の竪穴建物には主軸方位をほぼ同じくする特徴的な長方形プランの竪穴建物が、A区、B区双方に2棟ずつあり、特殊な性格を有するものであるのかどうか興味深い。

古代にはA区からB区にかけて小規模方墳・土壙墓・火葬墓によって構成される墳墓群と、A区1棟、B区4棟の竪穴建物の二重の性格の占地がなされている。墳墓群、特に方墳からは遺物がほとんど出土していないため時期比定は困難であるが、火葬墓や土壙墓からは8世紀から9世紀の遺物が出土しており、おそらく方墳もほぼ並行して営まれたものであろう。竪穴建物の方もやや年代幅があるが、墳墓群と竪穴建物群相互の関係は判然としない。なお、墳墓群については北側の荒久遺跡の墳墓群や荒久古墳との関係が注目されよう。

遺跡の概観は以上の通りである。A区とB区の間にある道路及び家屋によって遺跡が分断されているのは非常に惜しまれるところであるが、いずれにしても上記のように本来は同一の遺跡であったことは明らかであろう。以下、遺跡北半部（A区）の遺構・遺物の詳細について時期毎に記述する。

# Ⅲ　先土器時代



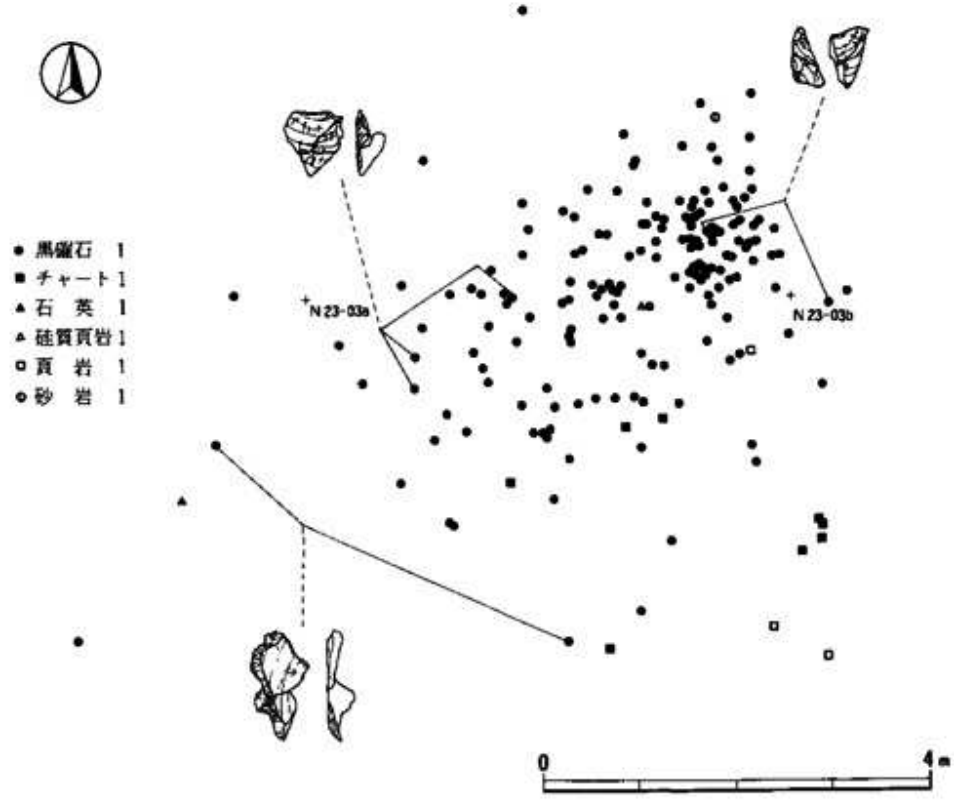

第５図　N22－23・N23－03区他遺物出土状況（1/80）

## 1　N22－23区・N23－03区・他

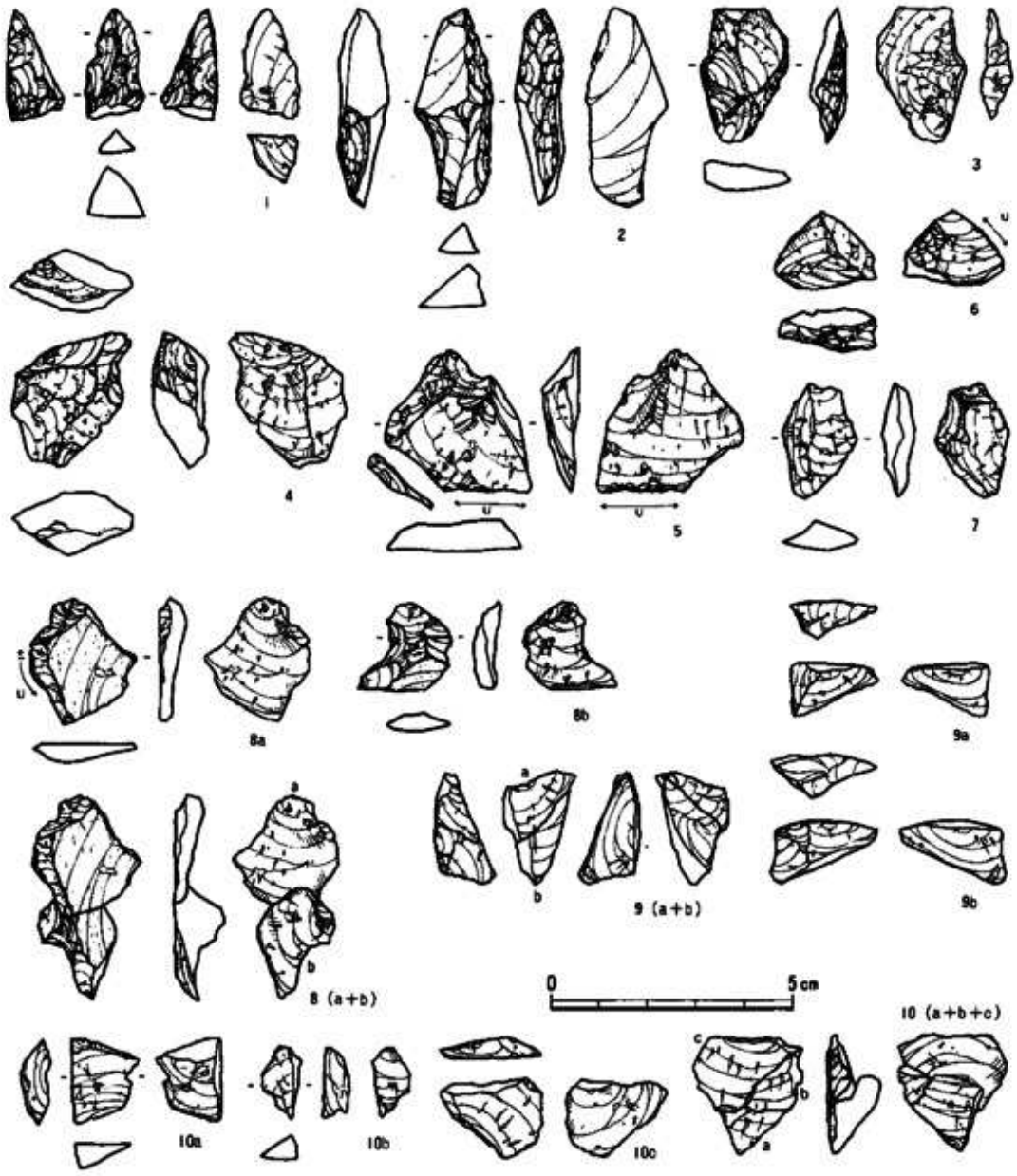
**出土状況**（第５図・図版３）　N22－23ｃ区からN23－03ａ区に中心を持つブロックが検出された。分布範囲は、南北6.6m、東西7.9mを測り、遺物総点数は185点である。分布密度は均一ではなく、濃密な分布を示すのは東西、南北ともおよそ４ｍの範囲であり、中でもブロックの北東端付近に集中する。石核とした遺物はその最も集中する部分に分布する。一方、定型的な石器はナイフ形石器２点と角錐状石器１点があるが、それらは南西寄りに拡散する傾向がある。垂直方向の分布は、およそ0.6m強の幅を持ち、土層観察面への投影ではII層下位からVI層上位にまで包含されていたことになるが、安定した層準がIV～V層中にあることは明確であろう。

**母岩別資料の分布**（第６図）　遺物の大半は黒曜石を素材としている。黒曜石はいずれも細かい球顆を多く含むあまり良質でないもので、すべて同一母岩と判断したが、２個体以上である可能性もある。他の石材は、殆ど単体かごく微量の個体であり、分散的な分布を示す。

**出土遺物**（第７図、図版３～４）　先述の通り、黒曜石製の遺物が圧倒的多数を占め、小型で幅広の剥片が多く生産されている。１～３は定型的な石器である。１は黒曜石１製の角錐状




第６図　N22－23・N23－03区他母岩別分布（1/80）




第7図　N22－23・N23－03区他出土石器（2/3）

石器で、尖頭部を遺存する。厚い横長剥片を素材としており、両側縁から尖頭部にかけては概ね粗い急斜な二次剥離が覆い、左側縁の一部と背稜には微細な剥離痕が観察される。遺存部位の断面形はほぼ正三角形に近いと言える。2は珪質頁岩2製の、尖頭部を有するナイフ形石器である。先端を僅かに欠損している。1と同じく厚みのある石器で、おそらくやや幅広の剥片を素材として剥片軸を斜位に用いている。刃潰し加工は右側縁全体と左側縁基部に施されるが、左側縁は内弯して若干抉られ、角柱状に仕上げられる。また尖頭部側の断面形も厚みがあり、角錐状石器と共通する要素と言えようか。3は刃部がほぼ水平な台形状のナイフ形石器で、黒

第1表　N22－23・N23－03区・他出土石器計測表(1)

| 挿図番号 | 遺物番号 | 器種 | 石質・母岩 | 最大長 mm | 最大幅 mm | 最大厚 mm | 重量 g | 打角 剥離角 | 調整角 | 使用痕の有無 | 折断の有無 | 欠損の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | N22-22-5 | 加工痕ある剥片 | 黒曜石 1 | 28.1 | 30.1 | 7.2 | 4.75 | － | 24 | ＋ | ＋ | － |
| | N22-23-6 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.9 | 3.5 | 2.4 | 0.05 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-7 | 剥片 | 黒曜石 1 | 10.5 | 9.8 | 4.7 | 0.45 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-8 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.6 | 5.8 | 1.2 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-9 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.4 | 4.8 | 1.5 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-10 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.1 | 9.2 | 4.1 | 0.33 | 86 | － | － | － | － |
| | N22-23-11 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.5 | 6.4 | 3.4 | 0.14 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-12 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.7 | 6.5 | 2.8 | 0.12 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-13 | 剥片 | 黒曜石 1 | 12.4 | 12.3 | 3.4 | 0.36 | 86 | － | － | － | － |
| | N22-23-14 | 砕片 | 黒曜石 1 | 10.0 | 10.0 | 1.6 | 0.12 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-15 | 剥片 | 黒曜石 1 | 25.5 | 11.7 | 7.8 | 1.62 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-16 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.8 | 4.1 | 0.8 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-17 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.6 | 4.0 | 0.4 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-19 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.6 | 6.8 | 1.5 | 0.09 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-20 | 石核 | 黒曜石 1 | 9.5 | 6.0 | 6.1 | 0.42 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-21 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.3 | 6.9 | 1.9 | 0.10 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-22 | 礫片 | 砂岩 1 | 16.8 | 7.5 | 6.8 | 0.71 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-23 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.7 | 8.7 | 1.7 | 0.07 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-24 | 石核 | 黒曜石 1 | 11.3 | 9.5 | 4.7 | 0.52 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-25 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.6 | 6.8 | 1.1 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-26 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.8 | 3.4 | 2.2 | 0.17 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-27 | 砕片 | 黒曜石 1 | 10.6 | 5.5 | 3.1 | 0.10 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-28 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.5 | 5.0 | 1.2 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-29 | 剥片 | 黒曜石 1 | 15.7 | 7.5 | 4.0 | 0.37 | 92 | － | － | － | － |
| 6 | N22-23-30 | 剥片 | 黒曜石 1 | 15.5 | 20.5 | 8.8 | 2.09 | － | 70 | ＋ | ＋ | － |
| | N22-23-31 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.8 | 7.8 | 1.9 | 0.12 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-32 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.3 | 3.1 | 2.1 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-33 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.8 | 10.3 | 4.2 | 0.25 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-34 | 剥片 | 黒曜石 1 | 10.6 | 19.3 | 5.3 | 0.69 | 82 | － | － | － | － |
| | N22-23-35 | 剥片 | 黒曜石 1 | 10.8 | 14.9 | 3.0 | 0.45 | 82 | － | － | － | － |
| | N22-23-36 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.5 | 6.9 | 2.1 | 0.07 | － | － | － | － | － |
| 4 | N22-23-37 | 石核 | 黒曜石 1 | 28.5 | 21.8 | 11.7 | 5.08 | 56 | － | － | － | － |
| | N22-23-38 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.4 | 12.5 | 2.9 | 0.21 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-39 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.0 | 2.5 | 1.0 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-40 | 剥片 | 黒曜石 1 | 11.6 | 9.6 | 5.1 | 0.55 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-41 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.2 | 2.8 | 0.6 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-42 | 砕片 | 黒曜石 1 | 12.2 | 8.5 | 2.5 | 0.19 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-43 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.7 | 5.3 | 1.8 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-44 | 剥片 | 黒曜石 1 | 19.3 | 13.3 | 5.8 | 1.11 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-45 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.0 | 7.5 | 1.0 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-46 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.9 | 3.4 | 1.3 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-47 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.1 | 10.0 | 3.1 | 0.16 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-48 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.4 | 3.3 | 1.0 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-49 | 剥片 | 黒曜石 1 | 18.2 | 11.9 | 4.7 | 0.65 | 42 | － | － | － | － |
| | N22-23-50 | 剥片 | 黒曜石 1 | 7.4 | 4.4 | 3.1 | 0.31 | － | － | － | － | ＋ |
| | N22-23-51 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.6 | 4.9 | 1.6 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-52 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.4 | 7.2 | 4.2 | 0.19 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-53 | 砕片 | 黒曜石 1 | 10.4 | 8.2 | 3.3 | 0.23 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-54 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.5 | 6.6 | 1.6 | 0.08 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-55 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.5 | 3.9 | 0.9 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-56 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.0 | 4.4 | 1.1 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-57 | 砕片 | 黒曜石 1 | 11.2 | 4.7 | 4.3 | 0.22 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-58 | 剥片 | 黒曜石 1 | 23.4 | 8.4 | 5.5 | 0.98 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-59 | 剥片 | 黒曜石 1 | 8.9 | 20.2 | 3.7 | 0.60 | 100 | － | － | － | － |
| | N22-23-60 | 剥片 | 黒曜石 1 | 19.6 | 25.8 | 5.5 | 2.12 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-61 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.2 | 6.3 | 1.3 | 0.04 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-62 | 剥片 | 黒曜石 1 | 12.7 | 10.0 | 3.6 | 0.36 | － | － | － | － | |

第２表　N22－23・N23－03区・他出土石器計測表（２）

| 挿図番号 | 遺物番号 | 器種 | 石質・母岩 | 最大長 mm | 最大幅 mm | 最大厚 mm | 重量 g | 打角 剥離角 | 調整角 | 使用痕の有無 | 折断の有無 | 欠損の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | N22-23-63 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.8 | 2.8 | 0.9 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-64 | 剥片 | 黒曜石 1 | 12.5 | 3.9 | 2.7 | 0.14 | － | － | － | － | ＋ |
| | N22-23-65 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.1 | 5.5 | 1.1 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-66 | 剥片 | 黒曜石 1 | 11.2 | 16.1 | 3.5 | 0.49 | 92 | － | － | － | ＋ |
| | N22-23-67 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.3 | 1.9 | 0.8 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-68 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.5 | 2.2 | 0.3 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-69 | 剥片 | 黒曜石 1 | 12.8 | 11.9 | 5.5 | 0.82 | 102 | － | － | － | － |
| | N22-23-70 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.5 | 2.3 | 0.6 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-71 | 剥片 | 黒曜石 1 | 10.7 | 13.6 | 3.2 | 0.34 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-72 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.6 | 6.6 | 2.6 | 0.07 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-73 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.2 | 12.4 | 3.4 | 0.23 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-74 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.3 | 2.6 | 1.5 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-75 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.0 | 5.0 | 1.2 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-76 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.6 | 3.6 | 1.6 | 0.04 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-77 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.4 | 1.2 | 1.1 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-78 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.1 | 7.7 | 1.0 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-79 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.5 | 12.2 | 5.0 | 0.63 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-80 | 剥片 | 黒曜石 1 | 8.7 | 12.8 | 1.9 | 0.22 | － | － | － | － | ＋ |
| | N22-23-81 | 剥片 | 黒曜石 1 | 10.1 | 16.2 | 5.1 | 0.82 | － | － | － | － | ＋ |
| | N22-23-82 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.0 | 10.5 | 1.7 | 0.11 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-83 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.4 | 7.3 | 2.8 | 0.04 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-84 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.7 | 8.8 | 2.0 | 0.09 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-85 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.9 | 2.6 | 2.0 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-86 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.7 | 3.8 | 1.1 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-87 | 剥片 | 黒曜石 1 | 15.8 | 11.2 | 4.9 | 0.96 | 98 | － | － | － | － |
| | N22-23-88 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.3 | 5.8 | 1.7 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-89 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.5 | 6.0 | 1.0 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-90 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.5 | 11.2 | 1.7 | 0.05 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-92 | 砕片 | 黒曜石 1 | 2.7 | 5.3 | 0.8 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-93 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.9 | 3.2 | 1.0 | 0.05 | － | － | － | － | － |
| 9b | N22-23-94 | 剥片 | 黒曜石 1 | 23.1 | 11.3 | 8.8 | 1.60 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-95 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.3 | 13.7 | 4.4 | 0.60 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-96 | 剥片 | 黒曜石 1 | 10.4 | 12.6 | 2.6 | 0.31 | 96 | － | － | － | － |
| | N22-23-97 | 石核 | 黒曜石 1 | 10.5 | 7.3 | 5.6 | 0.43 | 98 | － | － | － | － |
| | N22-23-98 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.4 | 2.9 | 1.8 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-99 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.9 | 2.4 | 0.8 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-100 | 剥片 | 黒曜石 1 | 8.2 | 7.6 | 5.1 | 0.33 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-101 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.5 | 3.4 | 0.8 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-102 | 剥片 | 黒曜石 1 | 9.3 | 13.8 | 2.7 | 0.21 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-103 | 剥片 | 黒曜石 1 | 12.7 | 8.6 | 3.3 | 0.25 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-104 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.1 | 4.0 | 2.9 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-105 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.5 | 1.7 | 0.1 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-106 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.5 | 1.6 | 0.5 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-107 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.0 | 1.7 | 1.2 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-108 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.9 | 5.7 | 0.7 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-109 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.1 | 3.8 | 1.0 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-110 | 剥片 | 黒曜石 1 | 11.8 | 15.3 | 2.9 | 0.33 | 96 | － | － | － | － |
| | N22-23-111 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.1 | 9.6 | 1.9 | 0.13 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-112 | 砕片 | 黒曜石 1 | 12.0 | 7.9 | 3.5 | 0.23 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-113 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.3 | 11.4 | 2.8 | 0.23 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-114 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.8 | 7.1 | 1.1 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-115 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.5 | 5.2 | 1.5 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-116 | 剥片 | 黒曜石 1 | 14.9 | 21.4 | 3.9 | 1.10 | － | － | － | － | － |
| | N22-23-117 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.7 | 4.0 | 1.0 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| 7 | N23-02-2 | 剥片 | 黒曜石 1 | 23.7 | 15.1 | 6.3 | 1.68 | － | － | － | － | － |
| | N23-02-3 | 剥片 | 石英 1 | 17.8 | 12.8 | 5.4 | 1.34 | 100 | － | － | － | － |
| 8a | N23-02-4 | 剥片 | 黒曜石 1 | 23.6 | 21.3 | 4.9 | 1.61 | 98 | － | － | － | － |

第３表　N22－23・N23－03区・他出土石器計測表（３）

| 挿図番号 | 遺物番号 | 器種 | 石質・母岩 | 最大長 mm | 最大幅 mm | 最大厚 mm | 重量 g | 打角 剥離角 | 調整角 | 使用痕の有無 | 折断の有無 | 欠損の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | N23-03-4 | 剥片 | 黒曜石 1 | 19.7 | 10.4 | 11.2 | 1.96 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-5 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.1 | 3.2 | 0.8 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-6 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.6 | 7.8 | 5.3 | 0.39 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-7 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.5 | 12.5 | 2.8 | 0.24 | 100 | － | － | － | － |
| | N23-03-8 | 剥片 | 黒曜石 1 | 14.3 | 19.8 | 3.7 | 0.65 | 92 | － | － | － | － |
| | N23-03-9 | 剥片 | 黒曜石 1 | 12.8 | 17.0 | 5.5 | 0.96 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-10 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.9 | 6.5 | 2.6 | 0.09 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-11 | 剥片 | 黒曜石 1 | 15.3 | 22.3 | 6.1 | 1.43 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-12 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.2 | 10.0 | 2.6 | 0.21 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-13 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.6 | 5.3 | 0.6 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-14 | 剥片 | 黒曜石 1 | 7.5 | 9.8 | 2.8 | 0.20 | － | － | － | － | ＋ |
| | N23-03-15 | 砕片 | チャート 1 | 5.0 | 4.3 | 1.6 | 0.09 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-16 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.1 | 1.3 | 0.8 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-17 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.5 | 2.7 | 1.2 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-18 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.1 | 4.6 | 1.0 | 0.04 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-19 | 剥片 | 黒曜石 1 | 11.5 | 14.5 | 3.1 | 0.21 | 122 | － | － | － | － |
| | N23-03-20 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.6 | 7.8 | 0.9 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-21 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.5 | 1.8 | 0.7 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-22 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.4 | 1.7 | 0.4 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-23 | 砕片 | 黒曜石 1 | 2.9 | 1.5 | 0.3 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-24 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.1 | 2.2 | 2.2 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-25 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.1 | 2.2 | 0.4 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-26 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.6 | 9.7 | 2.9 | 0.13 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-27a | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.2 | 5.8 | 1.4 | 0.04 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-27b | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.5 | 1.2 | 0.9 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-28 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.9 | 8.7 | 2.7 | 0.17 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-29 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.5 | 2.6 | 1.9 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| 2 | N23-03-30 | ナイフ形石器 | 珪質頁岩 1 | 41.5 | 16.1 | 10.1 | 5.33 | － | L84R66 | － | － | ＋ |
| | N23-03-31 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.5 | 7.0 | 4.8 | 0.29 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-32 | 砕片 | 黒曜石 1 | 3.8 | 5.4 | 2.6 | 0.04 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-33 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.7 | 6.4 | 1.1 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| 3 | N23-03-34 | ナイフ形石器 | 黒曜石 1 | 27.6 | 18.8 | 6.6 | 2.82 | － | 62 | － | － | － |
| | N23-03-35 | 剥片 | 黒曜石 1 | 17.6 | 9.8 | 9.4 | 0.62 | 112 | － | － | － | － |
| | N23-03-36 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.1 | 8.6 | 1.1 | 0.05 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-37 | 剥片 | 黒曜石 1 | 23.6 | 11.3 | 4.6 | 0.90 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-38 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.8 | 13.5 | 2.2 | 0.39 | 112 | － | － | － | － |
| | N23-03-39 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.6 | 3.4 | 3.5 | 0.23 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-40 | 剥片 | 黒曜石 1 | 14.6 | 17.1 | 6.9 | 1.36 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-41 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.3 | 5.4 | 3.2 | 0.12 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-42 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.8 | 2.6 | 1.5 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-43 | 剥片 | チャート 1 | 11.6 | 6.6 | 6.1 | 0.53 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-44 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.8 | 16.2 | 3.5 | 0.63 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-45 | 剥片 | 黒曜石 1 | 24.3 | 20.1 | 6.9 | 1.99 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-46 | 剥片 | 黒曜石 1 | 21.5 | 12.6 | 4.2 | 0.78 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-47 | 砕片 | 黒曜石 1 | 9.7 | 4.2 | 4.1 | 0.11 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-48 | 砕片 | 黒曜石 1 | 2.4 | 6.0 | 0.6 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-49 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.0 | 10.0 | 1.3 | 0.08 | － | － | － | － | － |
| 9a | N23-03-50 | 剥片 | 黒曜石 1 | 9.9 | 18.4 | 7.7 | 0.84 | － | － | － | － | ＋ |
| | N23-03-51 | 砕片 | チャート 1 | 3.5 | 3.9 | 1.7 | 0.02 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-52 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.2 | 7.6 | 2.2 | 0.10 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-53 | 砕片 | チャート 1 | 4.3 | 7.5 | 2.8 | 0.11 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-54 | 砕片 | チャート 1 | 6.1 | 5.9 | 3.7 | 0.14 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-55 | 砕片 | チャート 1 | 9.9 | 3.6 | 4.8 | 0.21 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-56 | 砕片 | チャート 1 | 12.5 | 5.0 | 4.1 | 0.32 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-57 | 砕片 | 頁岩 1 | 5.3 | 3.7 | 1.4 | 0.03 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-58 | 砕片 | 頁岩 1 | 8.3 | 11.2 | 3.8 | 0.35 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-59 | 剥片 | 黒曜石 1 | 13.1 | 16.2 | 4.1 | 0.64 | 120 | － | － | － | － |

第4表　N22－23・N23－03区・他出土石器計測表(4)

| 挿図番号 | 遺物番号 | 器種 | 石質・母岩 | 最大長 mm | 最大幅 mm | 最大厚 mm | 重量 g | 打角剥離角 | 調整角 | 使用痕の有無 | 折断の有無 | 欠損の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | N23-03-60 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.3 | 12.0 | 3.5 | 0.19 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-61 | 剝片 | チャート 1 | 7.4 | 15.6 | 7.1 | 0.73 | － | － | － | － | － |
| 8b | N23-03-62 | 剝片 | 黒曜石 1 | 17.1 | 17.5 | 5.0 | 0.94 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-63 | 砕片 | チャート 1 | 8.4 | 4.0 | 2.1 | 0.11 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-64 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.6 | 11.6 | 3.7 | 0.36 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-65 | 剝片 | 黒曜石 1 | 14.3 | 11.7 | 7.1 | 0.83 | － | － | － | － | ＋ |
| | N23-03-67 | 砕片 | 黒曜石 1 | 5.9 | 8.3 | 1.3 | 0.04 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-68 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.4 | 12.0 | 3.1 | 0.21 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-69 | 砕片 | 頁岩 1 | 2.5 | 3.3 | 0.7 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-70 | 砕片 | 黒曜石 1 | 6.9 | 5.2 | 1.2 | 0.06 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-71 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.0 | 6.6 | 1.2 | 0.09 | － | － | － | － | － |
| 1 | N23-03-72 | 角錐状石器 | 黒曜石 1 | 20.9 | 11.6 | 11.0 | 1.91 | － | 84 | － | － | ＋ |
| | N23-03-73 | 砕片 | 黒曜石 1 | 7.5 | 3.1 | 1.3 | 0.05 | － | － | － | － | － |
| | N23-03-74 | 砕片 | 黒曜石 1 | 4.5 | 3.5 | 1.2 | 0.01 | － | － | － | － | － |
| | SI-014-136 | 砕片 | 黒曜石 1 | 8.6 | 6.2 | 1.0 | 0.05 | － | － | － | － | － |

第5表　N22－23・N23－03区・他出土石器組成表

| | 角錐状石器 | ナイフ形石器 | 加工痕剝片 | 使用痕剝片 | 剝片 | 砕片 | 石核 | 礫片 | 点数計 | 総重量 g |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 珪質頁岩 1 | － | 1 | － | － | － | － | － | － | 1 | 5.33 |
| 頁岩 1 | － | － | － | － | － | 3 | － | － | 3 | 0.39 |
| チャート 1 | － | － | － | － | 2 | 7 | － | － | 9 | 2.26 |
| 黒曜石 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 53 | 110 | 4 | － | 171 | 72.45 |
| 石英 1 | － | － | － | － | 1 | － | － | － | 1 | 1.34 |
| 砂岩 1 | － | － | － | － | － | － | － | 1 | 1 | 0.71 |
| 総計 | 1 | 2 | 1 | 1 | 56 | 120 | 4 | 1 | 186 | 82.48 |
| 百分率 | 0.5 | 1.1 | 0.5 | 0.5 | 30.1 | 64.5 | 2.2 | 0.5 | 99.9 | － |

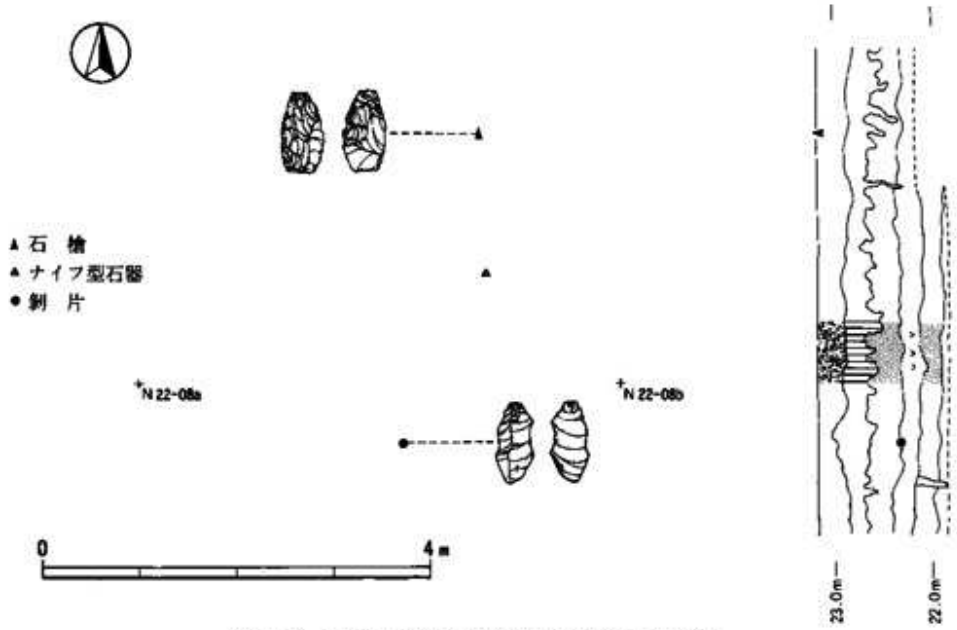
曜石1製である。横長剝片を素材として打面を残し、末端側に刃潰し加工を加えている。以上3点はⅣ下層に特徴的な遺物とされるもので、当ブロックの出土層準に全く矛盾しない。

4～7は二次的剝離痕や微細な刃こぼれが認められるものを示す。すべて黒曜石1である。4は一応石核としたが、上端と右側縁にあるネガティヴ・バルブを持つ剝離痕については、とくに右側縁のそれは加工痕である可能性もある。5も上端に二次的剝離痕を持つが、その性格は判然としない。この剝片は末端に使用痕と見られる刃こぼれが観察され、刃器としての性格を持った石器であろう。6は貝殻状の形状を持つ小型の剝片で、右側縁の一部にごく微細な刃こぼれ状の剝離が観察される。7も上端に二次的な剝離が認められる剝片であるが、やはりその性格は判然としない。

8～10は接合資料である。当ブロックでは、先述した通り、遺物点数に比較して接合関係が乏しい。接合資料も剝片2～3点が接合したのみで、とりたてて特徴的なものはない。8は剝片2点の接合で、打点の周回移動が行われたようである。なお8aの背面左側縁には刃こぼれ状の微細剝離痕が認められた。9は同じような形状の剝片2点の接合例で、同一打面から打点を後退しての剝離が行われている。10は剝片3点の接合例である。10aが剝離された際、10bが同時にはじけていると思われる。10cは10bの剝離痕を打面として剝離されている。

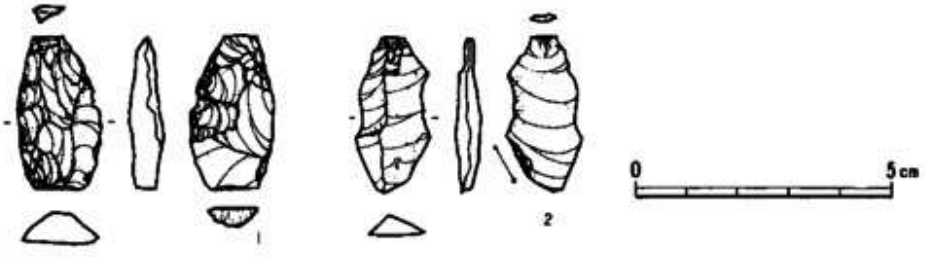
## 2　N22－03区・N22－08区

**出土状況**（第８図）　N22－03区からN22－08区にかけても下層本調査を実施して３点の遺物を検出したものの、ブロックとしてのまとまりは認められなかった。N22－03区では石槍１点とナイフ形石器１点が出土したが、残念なことにナイフ形石器については出土レベルを記録する以前に盗難によって紛失した。石槍はII層中から出土したものである。N22－08区では剥片１点が出土したが、出土層位は石槍とは全く異なり、VI層上面付近に包含されていた。




第８図　N22－03・08区遺物出土状況（1/ 80）

**出土遺物**（第９図・図版３）　１は半両面加工の小型石槍である。おそらく東北産の非常に良質な珪質頁岩（硬質頁岩）製。尖頭部を欠損し、基部側端は節理面を見せる。最終的な調整は裏面側から加えられており、表面右側縁と同左側縁尖頭部側の剥離痕にはバルブが失われている。２は珪質頁岩製の石刃状の剥片である。打面調整は行われていないが、頭部調整が行われており、残された打面は小さなものとなっている。背面の剥離痕はすべて上方からのもの。




第９図　N22－03・08区出土石器（2/3）

腹面左側縁末端側には使用痕と思われる刃こぼれ状の細かい剥離痕があり、刃器として用いられた石器であろう。

第6表　N22－03・08区出土石器計測表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 器種 | 石質・母岩 | 最大長 mm | 最大幅 mm | 最大厚 mm | 重量 g | 打角 剥離角 | 調整角 | 使用痕の有無 | 折断の有無 | 欠損の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | N22-03-2 | 石槍 | 珪質頁岩1 | 30.1 | 16.2 | 6.8 | 3.64 | － | L60R46 | － | － | ＋ |
| 2 | N22-08-5 | 使用痕ある剥片 | 珪質頁岩2 | 29.8 | 14.6 | 4.9 | 1.63 | 86 | － | ＋ | － | － |

下層確認調査風景

# Ⅳ 縄文時代

## 1 梗概

地蔵山遺跡A区において検出された縄文時代の遺構、遺物は、殆どが早期条痕文系土器期のものに限られる。遺物包含層はM22－05・10・N22－01区を中心に分布し、それと重なるように4基の炉穴が検出されている。またその西南方に10mほどのところにも3基の炉穴があり、全体は深い関連を以て営まれた遺構群を形成している。

## 2 炉穴群

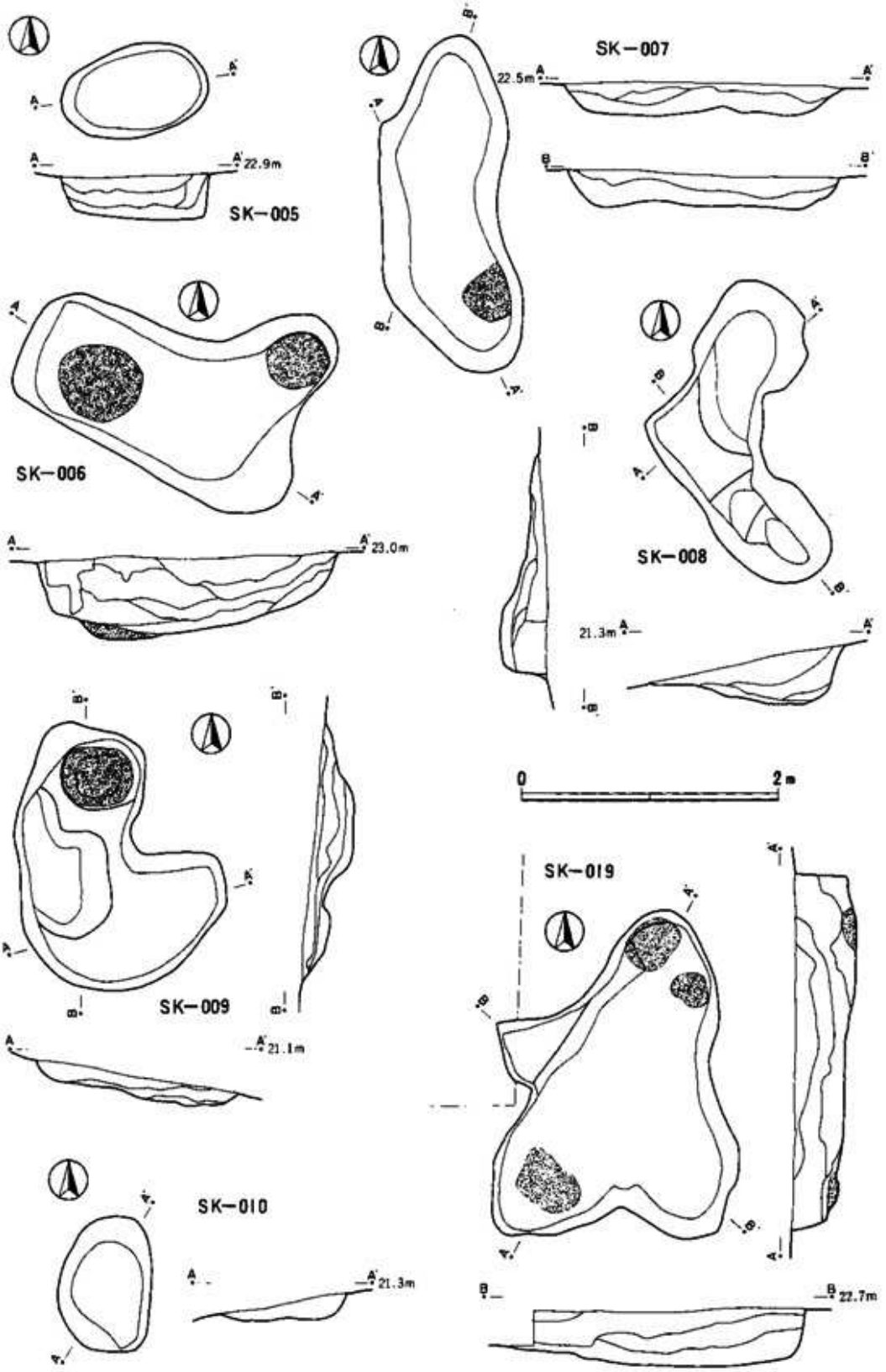
**SK-005**（第10図・図版5－3） N22－01区に位置する炉穴跡。平面形状は楕円形を呈し、長軸長1.16m、短軸長0.73mを測る。壁面は急斜で底面は概ね平坦、検出面からの深さは32cm～37cm。火床は明確には観察されなかったが、質的にテフラに近い覆土で焼土粒が目立って含まれ、炉穴跡に通有の内容であった。遺物は遺構確認面上で縄文土器3片が出土している。

**SK-006**（第10図・図版6－1） 前記SK-005のすぐ南東側、同じくN22－01区に位置する炉穴跡。「く」字形の平面形状を持つが、これは本来、北西－南東方向に主軸を持つものと北東－南西方向に主軸を持つものの2基の重複であろう。ただ新旧関係を示すような観察結果はなく、時間差を置かずに主軸方向を変えて拡張して営まれたと考えるべきか。長軸長2.34m、短軸長1.69m、検出面からの深さは37cm～59cmを測る。火床は東端と西端の2ケ所に認められ、火床面の被熱痕はいずれも非常に顕著。当遺構を中心に土器片の分布が際立って濃密で、遺構内外の接合関係（個体2）がある。

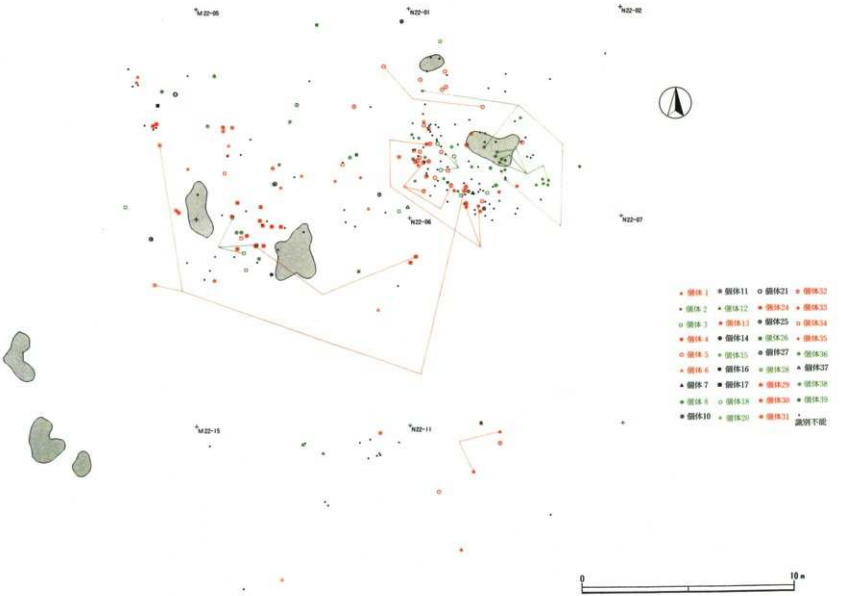
**SK-007**（第10図・図版6－2） M22－04・05・09・10各区に跨がって位置する炉穴跡。南北に長い不整長楕円形を呈し、長軸長2.64m、短軸長0.92mを測る。火床は南端寄りにあるが、底面は全体的に平坦で火床付近が深くなるようなことはない。検出面からの深さは最大で27cmであった。遺構検出面上で縄文土器片1点が出土したのみ。

**SK-008**（第10図・図版6－3） M22－09区に位置する炉穴跡。SK-006と同様、「く」字形の平面形を有するが、これもまた北東－南西方向に主軸を持つものと北西－南東方向に主軸を持つもの2基と見るべきで、時間差を置かないで主軸を変えた拡張であろう。北西－南東方向が1.74m、北東－南西方向が1.65mを測る。火床は明確には把握されなかったが、北東側と南東側がともに深く掘り込まれており、その2ケ所に火床があったことは疑いあるまい。北東側の検出面からの深さは50cm、南東側の深さは37cmであった。遺物としては縄文土器小片が数点出土したのみである。

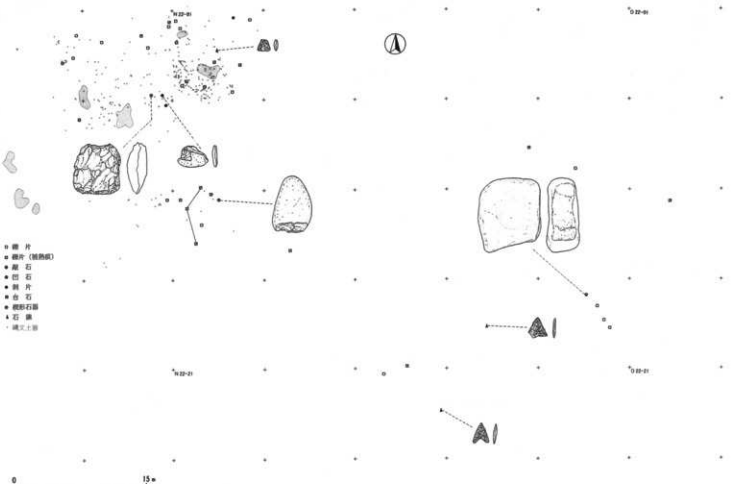
**SK-009**（第10図・図版7－1） 前記SK-008の南、約2mの間隔を置いてM22－14区に


SK−005
22.9m
SK−006
23.0m
SK−007
22.5m
SK−008
21.3m
SK−009
21.1m
SK−010
21.3m
SK−019
22.7m
0
2m

第10図　炉穴跡（1/50）




第11図　縄文時代遺物分布（土器）(1/300)




第12図　縄文時代遺物分布（石器）(1/300)

位置する炉穴跡。「し」字形のプランを持つ。長軸長1.99m、短軸長1.55mを測り、検出面からの最深は29cm。火床は北端の１ケ所に一段深く掘り込まれ、被熱痕の顕著なものとして認められたが、中央西側に深く掘り込まれている部分があり、そこを火床として東西に主軸をおいて機能した場合も考慮しておかねばならない。遺物は出土しなかった。

**ＳＫ-010**（第10図・図版７－２）　前記ＳＫ-009の南東に近接、同じくM22－14区に位置する炉穴跡である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸長1.04m、短軸長0.72mを測る。検出面からの掘り込みは浅く、21cmを測るにすぎない。火床は明瞭に把握されなかったが、覆土が暗黄褐色土で焼土粒を多く含む炉穴跡に通有のものであった。遺物は出土しなかった。

**ＳＫ-019**（第10図・図版７－３）　ＳＫ-007の南東約３ｍの間隔を置き、M22－10区に位置する炉穴跡。「Ｘ」字形の複雑な形状を持つ。北東－南西方向の長さ2.77m、北西－南東方向の長さ2.30mを測る。底面は高低差が少なく、検出面からの最深は48cm。火床は３ケ所に検出された。したがって、当遺構は３基の重複を考えておく。南西側の火床は北東－南西方向に主軸を持つもの、北側の火床は南北方向に主軸を持つもの、北東側の火床は東北東－西南西方向に主軸を持つものであろうか。これについても新旧関係の確認はなされず、時間を置かず、継起的に主軸方向を変えながら営まれ続けたものであろう。遺物としては遺構検出面上で２点の土器片が出土している。

## 3　遺物の分布

**土器の分布**（第11図）　最も濃密な分布を示したのがＳＫ-006の周辺である。またＳＫ-007からＳＫ-019にかけての周辺にも濃密な分布があり、それらの遺構群と同時期に形成された遺物集中であることを如実に示している。上記の遺物集中の南方M22－15区からN22－11区にかけても希薄ながら分布が確認されたが、ＳＫ-008、ＳＫ-009、ＳＫ-010の３基の周辺は土器片の分布が見られなかった。

後に実測図を掲げた土器は計39個体であるが、それらのうちで量的にまとまった個体毎の分布はあまり拡散する傾向を見せない。最も広範に分布するのは個体31で、ＳＫ-006のすぐ南とＳＫ-007の西方とに接合関係があるが、半径10mを越えて分布していたものは稀である。

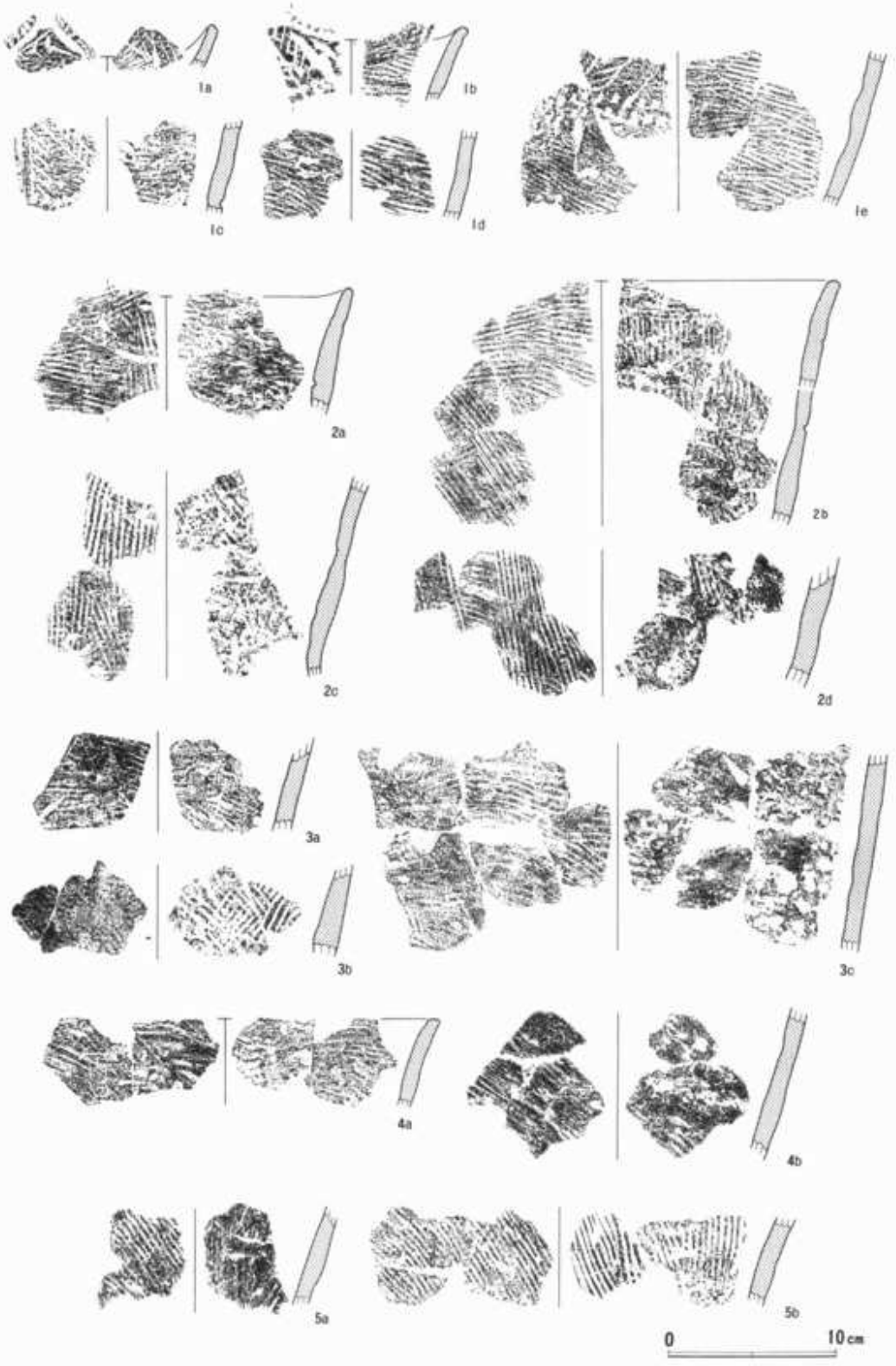
**石器の分布**（第12図）　石器の出土点数は少ない。土器の分布及び遺構の分布とほぼ合致する傾向を持つのが、礫の分布である。遺物集中区から出土した礫（礫片）は計27点（うち３点接合）であるが、被熱痕が明確なものはそのうち14点で、過半数を占める。他には楔形石器や敲石などが遺物集中区から出土しているが、土器や遺構との相関関係は不明である。またそれら以外の石器は遺跡全体に分散的に出土している。なお、地蔵山遺跡Ｂ区ではＡ区をはるかに上回る量の礫が、遺物集中及び遺構群に伴って出土している。

## 4　出土遺物

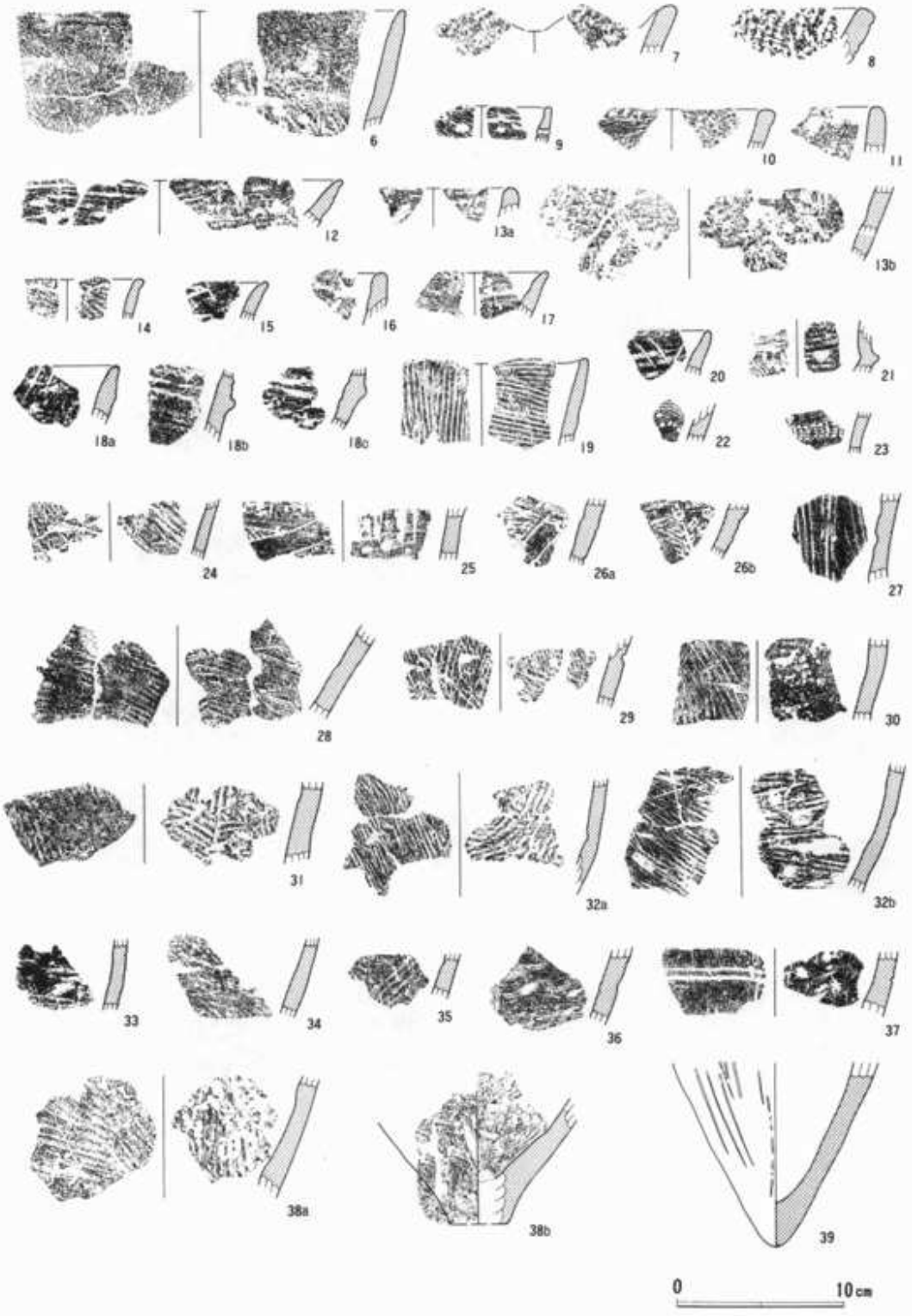
**土器**（第13図・第14図・図版８・９　土器の番号は、分布図上の個体番号と同一）　１は波状口縁を有するもので、端部には刻目が連続し、波頂部から２条単位の沈線を、直下と斜位に垂下させ、さらに沈線間に斜位の沈線を連続させる。沈線が描かれる文様帯の下には半截竹管による刺突を２段に亙って巡らせている。器面は表裏とも全面条痕施文となっている。２は緩やかな波状口縁を有すると思われる土器で表裏とも条痕が施されるだけの土器。この個体は炉穴跡ＳＫ-006に主要部分が存在したもので、二次的被熱痕が顕著であり、とりわけ内面の剝落が著しい。３は口縁部が遺存しないが、遺存部分では内外面とも条痕のみの施文である。３ｃを見る限り、内面には条痕が弱い部分があり、剝落も認められる。４、５も内外面とも条痕が施文される土器である。４は遺存範囲に限っては波状口縁を呈さない。

６は外面無文の口縁部破片である。しかし内面の下位には条痕が弱く残る。７は波状口縁波頂部の破片、８は平縁の口縁部破片で、ともに縄文を施しているものである。両者とも口端部に刻目を施しているようではあるが明瞭ではない。縄文の原体はいずれもＬＲらしい。９～11はいずれも口縁部の小片である。９には焼成前の穿孔が認められ、また外面に条痕が施されている。12は端部に細かい刻目を施す土器で、かなり大きく開く器形を有し、内外面に弱い条痕が残る。13は器面の荒れが激しく、遺存部分では施文、条痕等は観察されない。14～17は口縁部の小片である。いずれも弱い条痕が残る。18は外面に突帯を貼り付ける土器で、口縁部には斜格子状の沈線が施文されている。突帯はほぼ横走するものの他、18ａでは縦位に近い斜位にも見られる。19は緩やかな波状口縁を呈し、内外面に整った条痕が施される。20は18のような斜行沈線が見られる口縁部。21は屈曲部位の破片で、屈曲の下に細かい縄文ＲＬが施文されている。22は繊細な条痕で波状を描き、その下に刺突を連続させるものであるが、小片のため文様構成は判らない。23は貝殻腹縁による押引文が見られるもの。25、26は沈線による区画文を描き、区画内に間隔の狭い沈線を充塡する他、沈線の交差する部位に竹管による刺突を施している。24、27～32は条痕が施される胴部破片。33～36は無文か削痕状のものが認められる胴部破片である。37は拓影では非常に浅い沈線が２条横走するように見えるが、実際は３条を一単位として同時に施文されているものである。38は内外面に条痕が施される土器であるが、底部を遺存する（38ｂ）当遺跡では希少な個体。39は尖底をなす底部片で、器面には縦位の細く浅い沈線が施されている。

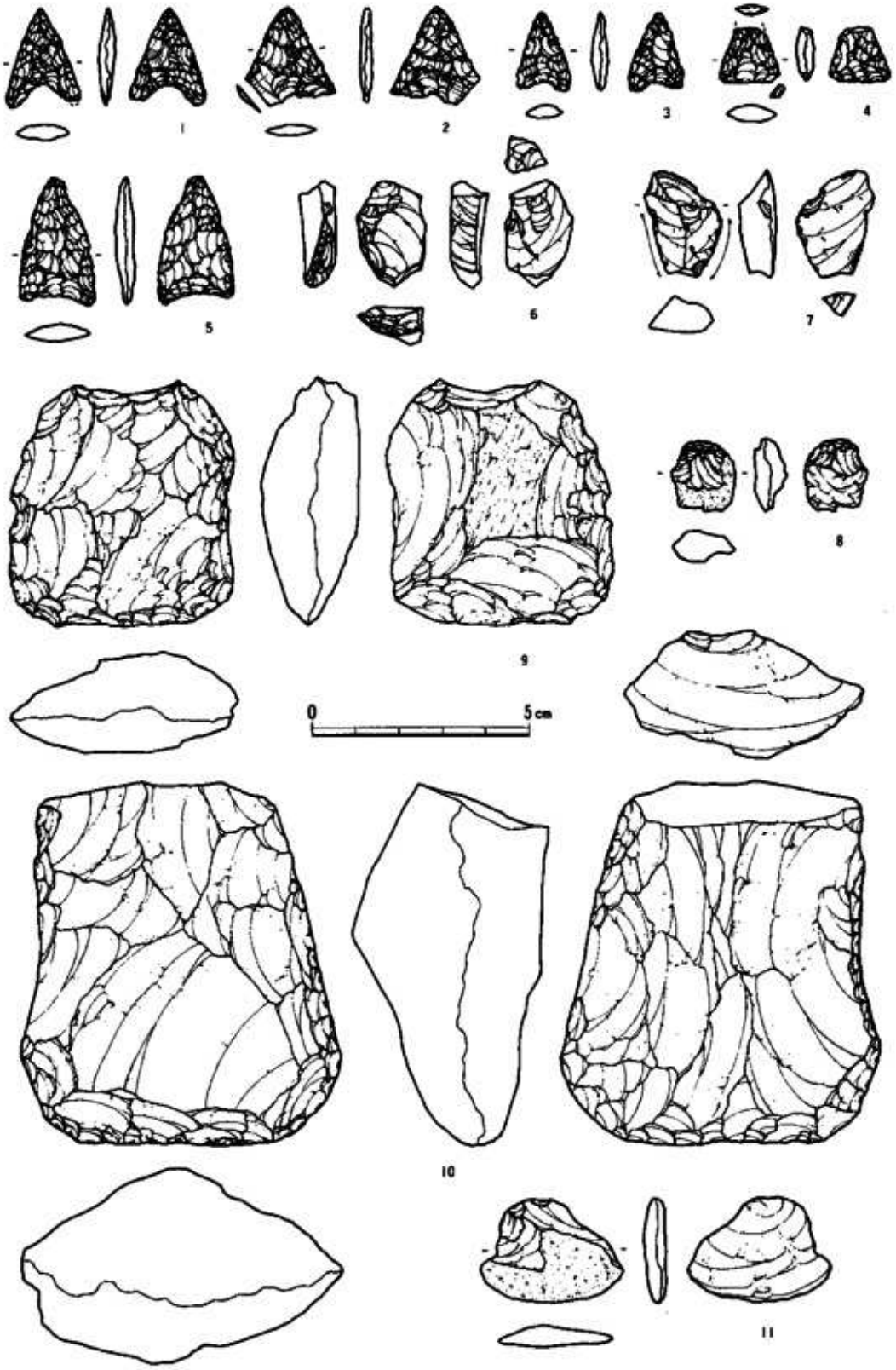
**石器**（第15図・第16図・図版10）　１～５が石鏃である。石材、計測値等は別表に譲る。ここで便宜上実測図左をＡ面、図右をＢ面とする。１は整った形状を持つ凹基の石鏃。Ａ、Ｂ両面とも右側縁尖頭部側と左側縁基部側にバルブのある剝離を残す。２はＡ面左側縁側基部が微細な調整を加えられず、折断によって成形されるもの。バルブを残す剝離面は左側縁とＢ面基




第13図　縄文土器（1）(1/4)

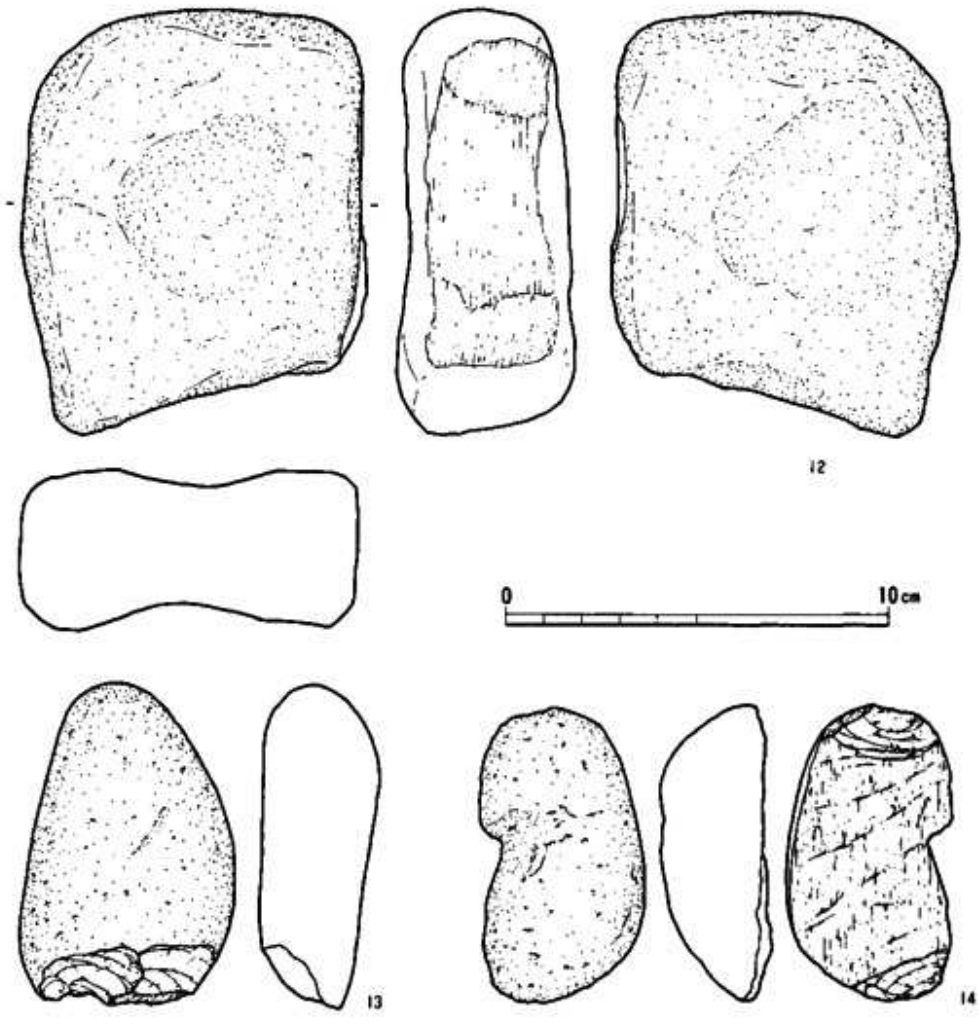



第14図　縄文土器（2）(1/4)




第15図　縄文時代の石器（1）(2/3)

部にある。4は石鏃としては唯一土器集中地点から出土したものである。尖頭部を折損する平基の例。5はA面右側縁尖頭部寄りに弱い抉りが見られる左右非対称のものであるが、とくに特徴的なものとは言えまい。6はやや厚みのある小型の剥片の、背面左側縁から末端にかけて急斜な加工を施す削器である。7は頭部及び末端双方を折断または折損する剥片で、左右の側縁部に刃こぼれ状の微細な剥離が観察される。8は小型の剥片の頭部に微細な剥離痕が連続するものであるが、その性格は不詳である。9は一応楔形石器とした。粘板岩製の分厚いものであり、本来打製石斧を起源として、その折損品を再生したものであろう。10は安山岩製の打製石斧。非常に分厚いもので、着柄痕、使用痕等は明確ではない。11は背面に礫皮面を残す貝殻状の剥片である。12は凹石であるが、側面（一面のみ）に明瞭な削痕が認められ、複合機能を持った石器であることは明らかである。13は敲石である。下方に使用の際生じたと思われる剥離痕がある。14は礫片で、腹面はほぼ節理面で覆われているが、上下両端の剥離から両極加撃




第16図　縄文時代の石器（2）(1/2)

が行われたと考えられるためここに図示した。

第７表　縄文時代石器計測表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 器種 | 石質 | 最大長 mm | 最大幅 mm | 最大厚 mm | 重量 g | 打角 剥離角 | 調整角 | 使用痕の有無 | 被熱痕の有無 | 折断の有無 | 欠損の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SI-014-11 | 石鏃 | 黒曜石 | 21.3 | 16.8 | 3.8 | 0.90 | － | － | － | － | － | ＋ |
| 2 | SI-011-39 | 石鏃未製品 | 黒曜石 | 21.6 | 19.1 | 2.8 | 0.93 | － | － | － | － | － | ＋ |
| 3 | P22-18-2 | 石鏃 | チャート | 17.4 | 12.5 | 3.4 | 0.56 | － | － | － | － | － | － |
| 4 | M22-01-157 | 石鏃 | 珪質頁岩 | 12.7 | 13.2 | 4.1 | 0.70 | － | － | － | － | － | ＋ |
| 5 | 4トレンチー2 | 石鏃 | チャート | 28.3 | 16.9 | 4.1 | 1.88 | － | － | － | － | － | ＋ |
| 6 | SD-1東区B-31 | 削器 | チャート | 23.7 | 14.9 | 8.0 | 3.34 | － | － | － | － | － | － |
| 7 | M22-05-62 | 剥片 | 黒曜石 | 23.6 | 15.2 | 9.3 | 2.65 | － | － | ＋ | － | － | － |
| 8 | P22-18-3a | 剥片 | 瑪瑙 | 15.7 | 14.1 | 7.0 | 1.47 | 120 | － | － | － | － | － |
| 9 | M22-05-60 | 楔形石器 | 安山岩 | 55.2 | 54.2 | 21.3 | 67.8 | － | － | － | － | － | － |
| 10 | P22-21-3 | 打製石斧 | 安山岩 | 76.1 | 72.0 | 41.2 | 236.8 | － | － | － | － | － | － |
| 11 | M22-05-57 | 剥片 | 頁岩 | 23.8 | 32.5 | 4.7 | 3.38 | － | － | － | － | － | － |
| 12 | SI-006-77 | 凹石 | 雲母片岩 | 102.0 | 86.0 | 43.1 | 710.0 | － | － | ＋ | － | － | － |
| 13 | N22-11-6 | 敲石 | 砂岩 | 82.8 | 55.3 | 29.5 | 186.9 | － | － | ＋ | ＋ | － | － |
| 14 | M22-04-3 | 礫片 | 砂岩 | 73.2 | 41.8 | 24.7 | 113.1 | － | － | － | － | － | － |

## 5　小結

前節で見た土器群のうち時期が比定されるものは、例えば18、25、26などがあり、鵜ケ島台式土器の特徴を持っている。しかし鵜ケ島台式土器として全体が一括されるわけではなく、例えば１、２や縄文を施す個体などは茅山下層式土器に比定すべきであろう。これらの遺物群から個々の遺構の時期を明断することはできないが、炉穴群を伴う遺物包含層は鵜ケ島台式期から茅山下層式期にかけて形成されたとすることができる。なお、土器39のように明らかに時期の溯るものもあって、以前から断続的な占地が行われていた可能性も持っている。

遺跡の性格を物語る遺物として他に焼礫を多く含む礫（片）の存在があるが、当地蔵山遺跡Ａ区では量的に少なく、分布も散漫でとくに分析の対象とすることはできない。しかし近い将来報告される予定の地蔵山遺跡Ｂ区では、Ａ区に数倍～十数倍する数量の遺構、遺物、そして大量の礫の分布が見られるなど縄文時代の集落の中心となっており、当遺跡を論ずるにはその報告を待たねばならない。またＢ区出土の多量の土器（鵜ケ島台、茅山下層式土器）は条痕文系土器群自身の研究に寄与することも期待される。

# V 弥生時代

## 1 梗概

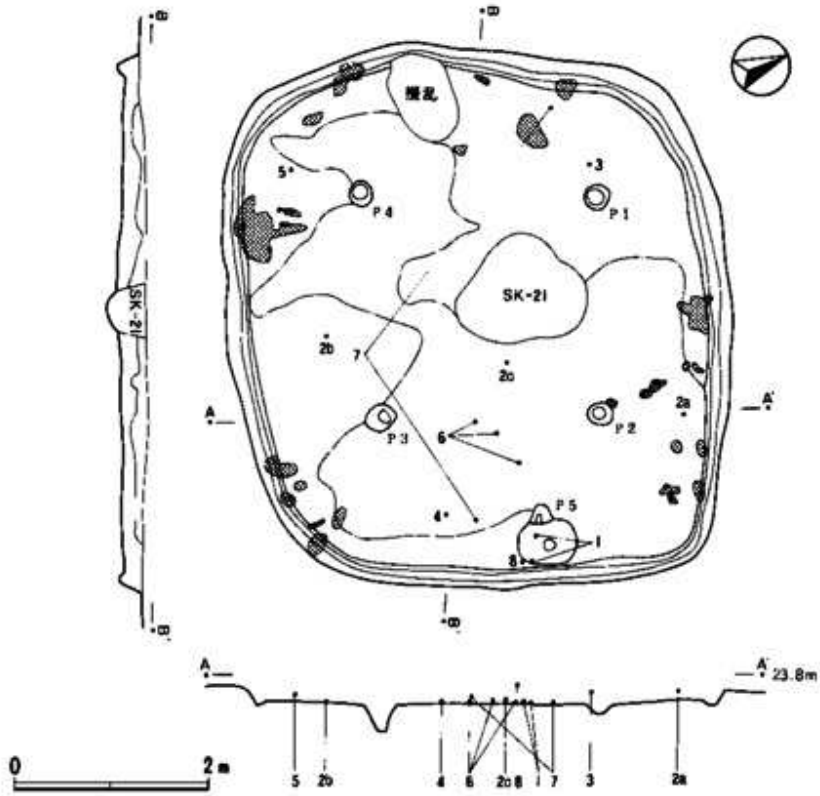
竪穴建物跡４棟が検出されている。その４棟は調査区やや西寄り、N22区東半からO22区西半にかけてまとまって分布していた。竪穴建物跡以外の遺構はなく、また遺跡南半部（B区）では該期の遺構、遺物とも未検出である。以下、各遺構毎に詳細を記述する。

## 2 ＳＩ－001（第17図・第18図・図版11－１）

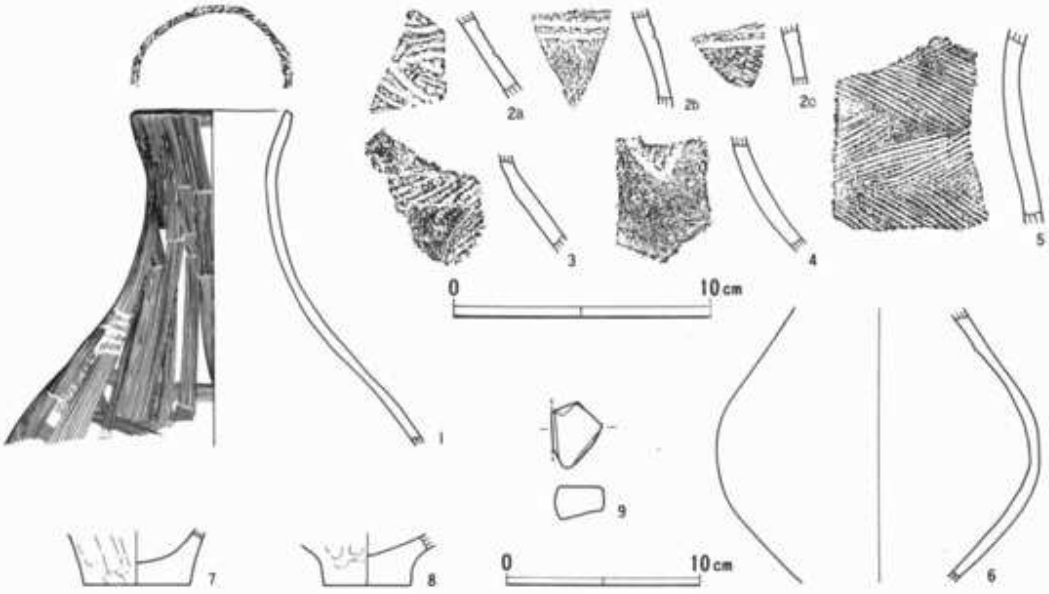
**位置・形状** 弥生時代の遺構群では最も東、O22－17ｃ区を中心に位置する竪穴建物跡。北西－南東方向に主軸方位を置く。平面形状は、主軸方向に若干長い隅丸長方形を呈し、長軸長5.5m、短軸長5.3mを測る。検出面からの深さは0.1m～0.2m。

**重複関係** 床面の中央付近にＳＫ-021が存在する。当遺構が古。他に北西辺下に攪乱孔が認められた。

**付帯施設・床面** 主柱穴は４ケ所に穿たれ、その配置はほぼ正方形を示している。それらの床面からの深度はＰ１、Ｐ３、Ｐ４が0.2m強、Ｐ２が0.1mと浅い。南東辺やや北寄りに貯蔵




第17図 ＳＩ－001（1/80）




第18図　ＳＩ－001出土遺物（実測図1/4・拓影1/3）

穴Ｐ５が検出されている。楕円形を呈し、平面規模は0.62m×0.45m、深さは0.39mとしっかりした掘り込みを持つ。入口ピットは調査されていないが、入口施設は貯蔵穴の南側に位置したことはまず疑い得まい。また炉も検出されていないが、これについてはＳＫ-021によって破壊された故と考えられる。壁周溝は全周する。

踏み締めによる床面の硬化は主軸方向に対して入口側で顕著に認められ、本来炉が位置したと思われる位置より奥では、Ｐ４の周囲がよく踏み締められていただけであった。

**遺物等出土状況**　全体として遺物量は少なく、その殆どが土器片である。貯蔵穴及び入口施設周辺にまとまって分布する点が注目される。当遺構では、壁寄りに焼土ブロック及び炭化材が散見された。

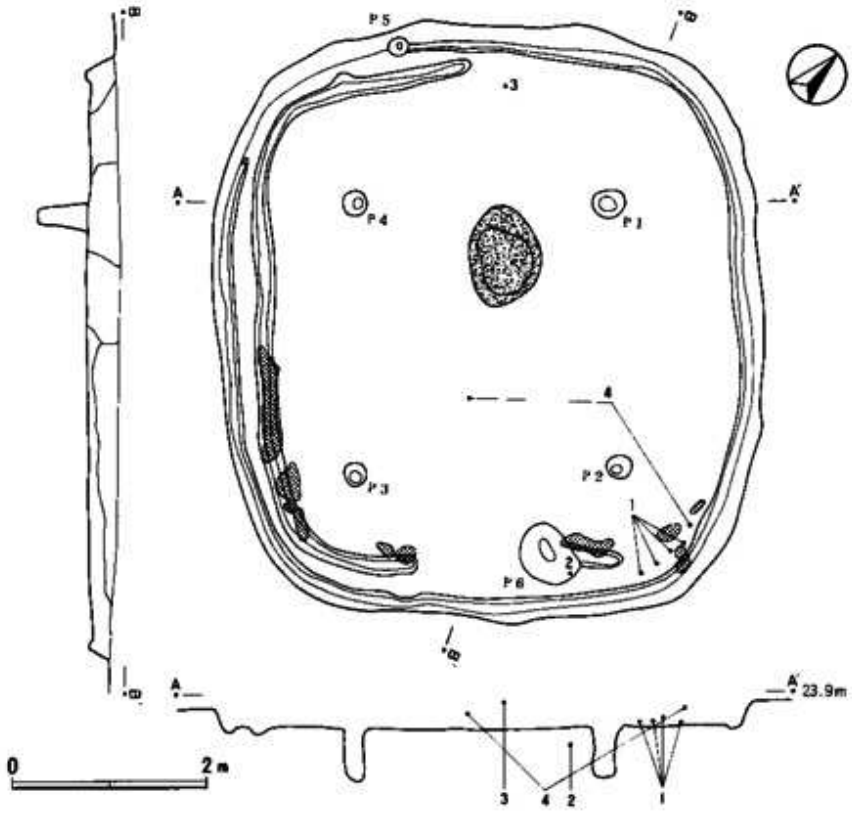
**出土遺物**　１～４、６は壺形土器である。１は肩部以上が遺存し、口縁部があまり開かないもの。口縁端部にのみ縄文ＬＲが施され、以下は全面刷毛目状条痕で覆われる。条痕は口端直下と肩部の地に横位施文が認められるが、概ね縦位施文である。２は肩部から胴部の３点の破片で、粗雑な縄文ＬＲ地に浅い沈線で文様が描かれる。３、４ともに肩部破片で、区画縄文を持つものである。３は繊細な沈線区画（紐結文）に磨消縄文、４は文様構成不明である。原体はいずれもＬＲ。６は無文の壺胴部で、ほぼ横位に研磨されている。５は甕胴部片で横位の羽状条痕が施される。７、８は土器底部で、８には木葉痕が認められる。９は砂岩製の砥石片である。

## 3　ＳＩ－005（第19図・第20図・図版11－２）

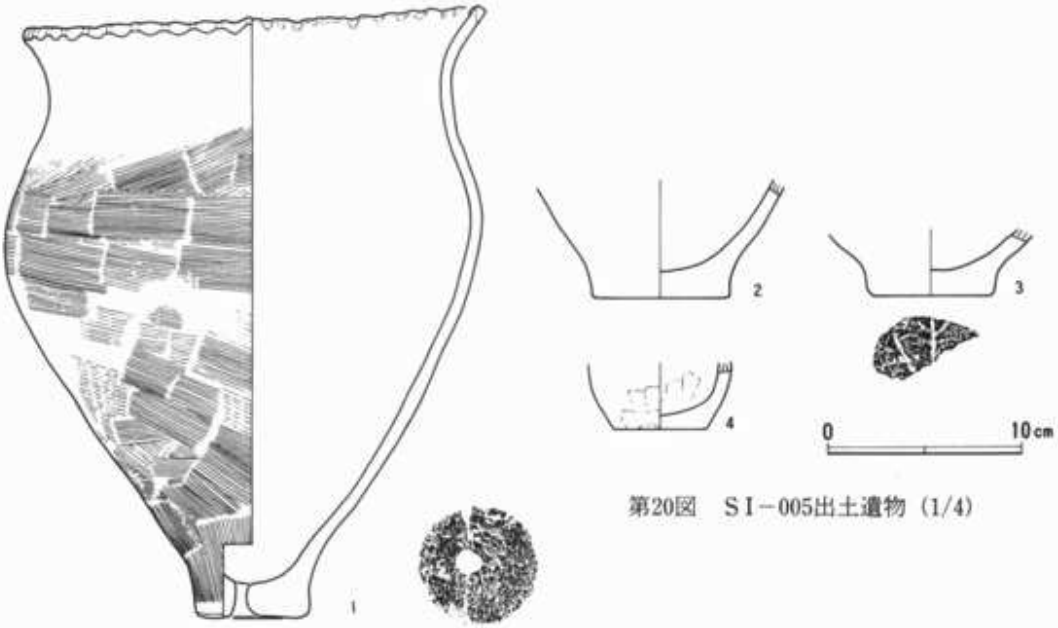
**位置・形状**　弥生時代遺構群では南、N22－25区とO22－21区に跨がって検出された竪穴建物跡。やはり北西－南東方向に主軸方位を置く。平面形状は主軸方向に長い隅丸長方形で、長軸長6.1m、短軸長5.7mを測る。検出面からの深さは0.2mから0.3m。

**付帯施設・床面**　主柱穴は４カ所にあり、整った正方形配置を取っている。柱穴の掘り込みは深く、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４が0.55m前後、Ｐ３が0.4m。貯蔵穴Ｐ６は南東辺中央北寄りにあり、楕円形プランを持ち、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.3mを測る。入口ピットはここでも検出されていないが、やはり貯蔵穴の南に接して入口施設があったものであろう。炉は主軸線上の北西寄りにあり、楕円形の浅い窪みを持つ地床炉である。規模は長径1.1m、短径0.8m、深さ0.1mである。壁周溝は西コーナー付近以外に巡っている。西コーナー北側の周溝が途切れる地点には深さ0.2m程の小ピットが穿たれているが、その性格は不明である。西コーナーから南コーナーにかけて及び貯蔵穴の北側の壁の内側にはさらに一条の周溝が巡り、当遺構拡張以前の施設であろうと考えられる。それによって拡張以前の長軸長を推定すると、5.2m前後となる。

床面について、踏み締め等による硬度の顕著な違いなどは観察されていない。




第19図　ＳＩ－005（1/80）




第20図　ＳＩ－005出土遺物（1/4）

**遺物等出土状況**　ＳＩ-001同様、遺物量は少ない。やはり東コーナーから貯蔵穴付近に偏在する点が興味深い。南コーナーから東コーナーにかけての壁際に焼土ブロックが見られた。

**出土遺物**　１は甑に転用された甕形土器で、底部の穿孔は焼成後のもの。頸部以上は篦状工具によるなでによって仕上げられ、刷毛目状条痕を残さないが、肩部以下は横位から斜位の条痕が施文されている。口縁の端部には刻目が全周するが、それは指頭による表裏からの交互押捺によって施されている。２～４には底部を示した。２、３はともに壺形土器の底部であろうか。３には木葉痕が見られる。４は小型の鉢か。

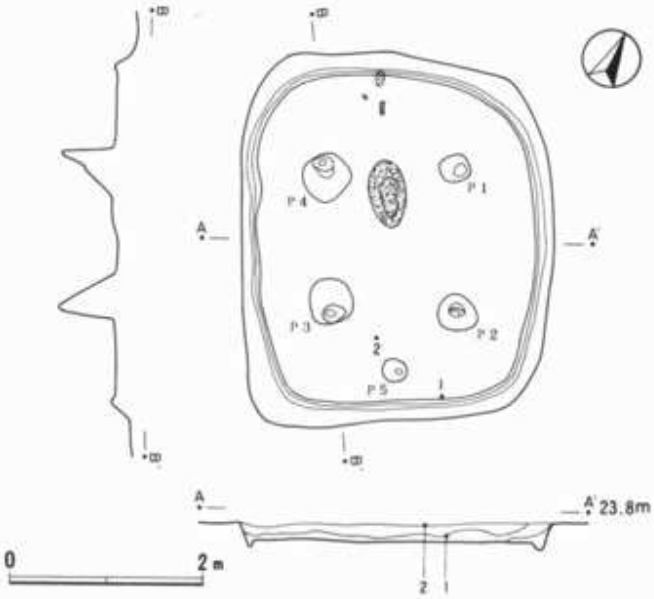
## ４　ＳＩ－007（第21図・第22図・図版11－３）

**位置・形状**　弥生時代の遺構群の中央、O22－16区に位置する竪穴建物跡。北西－南東方向に主軸方位を置く。平面形状は主軸方向に若干長い隅丸長方形。長軸長3.9m、短軸長3.2mを測り、検出面からの深さは0.2m前後。

**付帯施設・床面**　主柱穴は４カ所に正方形配列で穿たれる。そのうちＰ３、Ｐ４については掘り方が大きく、柱痕は主軸方向に偏っていた。主柱穴の深度はいずれも0.5～0.6m。南東辺側中央に入口ピットと思われる施設が検出された。その深さは0.17mである。貯蔵穴と推定される施設はない。炉は主軸線上北西寄りに、長楕円形の浅い掘り込みを持つ地床炉として営まれている。壁周溝は全周している。

床面について、踏み締め等による硬度の顕著な変化は認められていない。

**遺物等出土状況**　遺物量は乏しい。この竪穴建物跡においても遺物分布の偏在傾向があり、実測遺物について言えば２点とも入口ピット周辺にある。入口の対辺中央には僅かに炭化物と




第21図　SI－007（1/80）

第22図　SI－007出土遺物（1/4）

焼土ブロックが認められた。

**出土遺物**　1は壺形土器の頸部破片である。実測部位のほぼ全周が遺存するが、全面縦位の刷毛目状条痕で覆われている。2は底部破片である。胎土の粒子は粗く砂っぽい印象があり、内面は二次的な被熱による器面剝落が観察される。

## 5　SI－010（第23図・第24図・図版12－1）

**位置・形状**　弥生時代の遺構群の西端、N22－14区とN22－15区に跨がって位置する竪穴建物跡。他の竪穴建物跡と同じく北西－南東方向に主軸方位を置いている。平面形状は主軸方向に長い隅丸長方形。長軸長6.1m、短軸長5.4mを測る。検出面からの深さは0.2～0.3m。

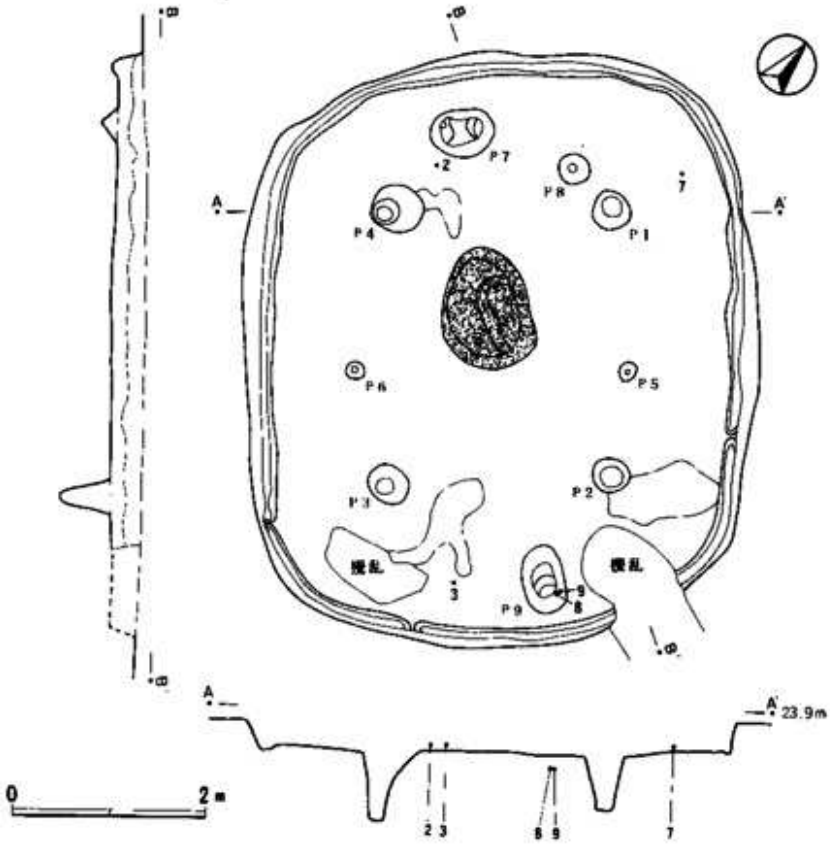
**付帯施設・床面**　主柱穴は4カ所にある。ただ他の竪穴建物跡が正方形配列を取るのに対して、当遺構の主柱穴は主軸方向に長い長方形配列である。主柱穴の床面からの深度は、P1がおよそ0.5m、他は0.7m前後でかなり深く掘り込まれていると言える。4カ所の主柱穴の他にはP1とP2の間にP5が、P3とP4の間にP6が穿たれており、いずれも補助的な柱穴であろうと考えられる。深さはP5が0.35m、P6が0.27m。また北西辺側には性格不明のピッ

トが２基検出されている。いずれも10cm程度の掘り込みしか持たない。南東辺側にはＰ９があるが、これはおそらく貯蔵穴であろうと考えられる。楕円形プランで0.71×0.44m、掘り込みの深さは0.26mを測る。炉は床面中央、やや北西寄りにあり、不整楕円形、浅い皿状の地床炉である。入口ピットと思われる施設は検出されていない。壁周溝はほぼ全周するが、わずかに途切れる部分が３カ所にあった。

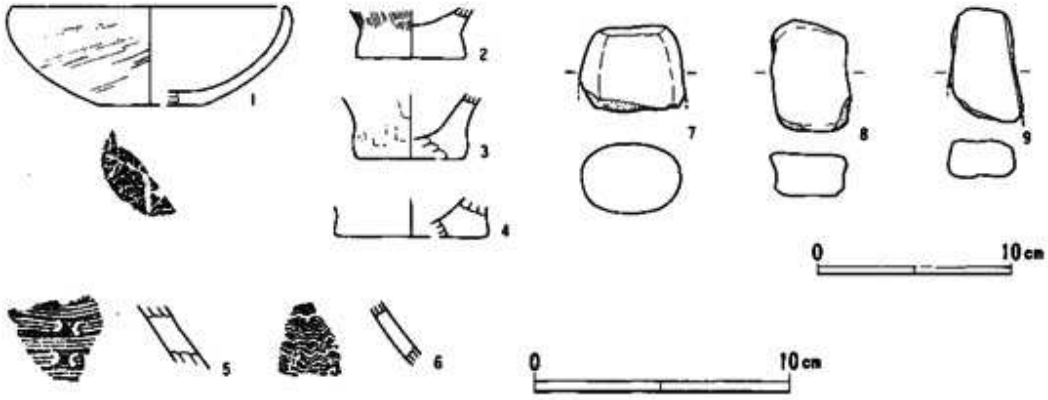
床面硬化はあまり顕著には認められていないが、Ｐ２の外側、Ｐ３のやや入口寄り、そしてＰ４の北側で踏み締めによるかと思われる硬化面が観察されている。

**遺物等出土状況**　当遺構も遺物量は少ない。実測遺物のうち３の底部と８、９の砥石２点が入口施設付近及び貯蔵穴内で検出されているのは他の竪穴建物跡に共通する現象と言えるだろうか。

**出土遺物**　１は当遺構内から出土しているものの、古墳時代中期の坏形土器と考えられるものである。外面には横位から若干斜位の研磨が、底面には木葉痕が残る。２～４は土器底部である。２は外面に刷毛目状条痕が施されており、甕形土器の底部かと思われる。５、６は壺形土器の肩部破片である。５は櫛描流水文が、６には櫛描波状文が施文されている。７は蛤刃石斧の基部破片である。石材は一見閃緑岩のように見えるが、石英安山岩製である。遺存部の最




第23図　ＳＩ－010（1/80）




第24図　SI－010出土遺物（実測図1/4・拓影1/3）

大長42.8mm、最大幅53.3mm、最大厚38.6mm、重量117.6gを測る。8、9は細粒の砂岩製の砥石片である。

## 6　小結

以上報告した4棟の竪穴建物跡は、出土遺物から判断する限り、弥生時代中期後半、宮ノ台期に帰属するものであると考えられる。出土遺物群自身は、量的に僅少なため、宮ノ台期のうちの新古の判断はきわめて難しいものがあるが、遺構間に適度な間隔が存在することや、遺構の主軸方位がほぼ共通する点から見れば、竪穴建物群が同時に営まれていた可能性を想定することは許されるであろう。現在までのところ、周辺の遺跡では弥生時代中期のまとまった集落跡は知られていない。しかし同じ千葉寺地区の中野台遺跡では、宮ノ台期の「方形周溝墓」群が調査されている。地蔵山遺跡と中野台遺跡は小支谷を挟んで指呼の間にあり、当遺跡の竪穴建物群と中野台遺跡の「方形周溝墓」群の密接な関係は明らかである。今後充分な検討が必要となろう。

# Ⅵ 古墳時代

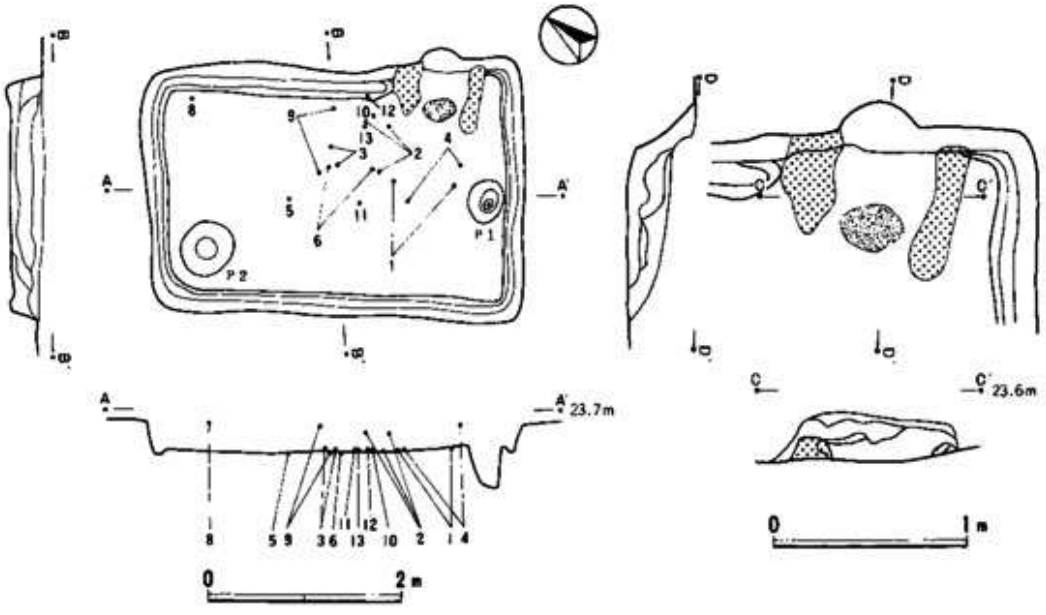
## 1 梗概

今回報告する遺跡北半部（A区）では竪穴建物跡12棟が検出されている。いわゆる和泉期、古墳時代中期の竪穴建物跡４棟と、古墳時代後期の竪穴建物跡８棟によって構成されるが、後期のものには６世紀でも古い段階の例と７世紀段階の例があってその間にはかなりの時間差があり、むしろ前者が古墳時代中期の建物群に後続するものとも考えられる。遺跡南半部（B区）においても、A区とほぼ同数の古墳時代の竪穴建物跡が調査されているが、それらB区の建物群の時期も５世紀後半から６世紀前半のものと７世紀のもので構成されているようである。なお、地蔵山遺跡A区では、竪穴建物跡以外の古墳時代の遺構は調査されていない。以下、遺構毎に詳細を記述していくが、古墳時代中期の４棟と古墳時代後期の８棟はとくに時期別に分割せず、遺構番号順に報告する。

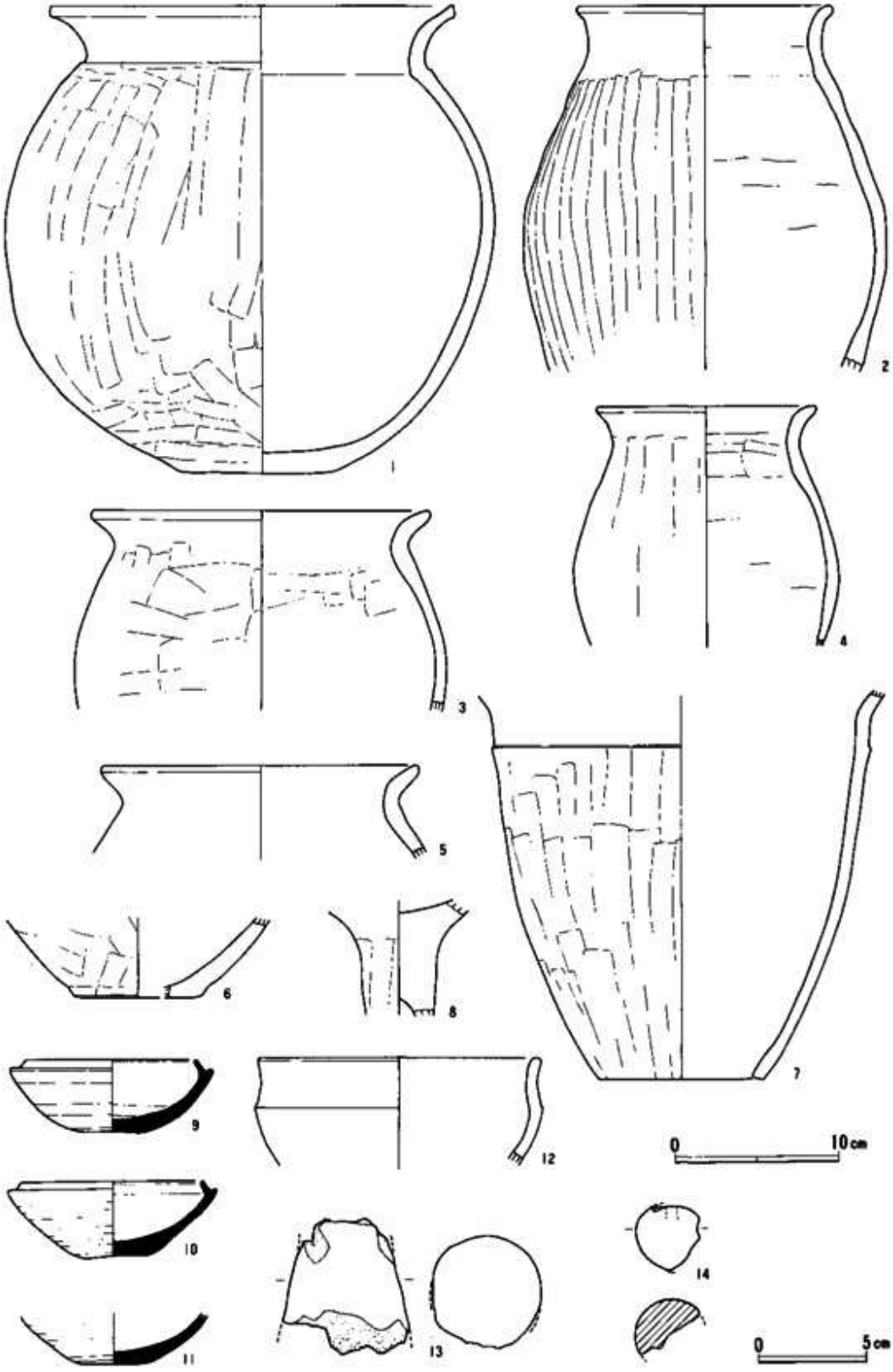
## 2 ＳＩ－002（第25図～第26図・図版13－２）

**位置・形状** 古墳時代の遺構群の南東端、O23－08区に位置する竪穴建物跡。主軸方位は明断し難い。カマドと直交方向に長い長方形を呈する。長辺方向4.0m、短辺方向2.7mを測る。検出面からの深さは0.3～0.4mほどであった。

**付帯施設・床面** 小型の竪穴建物跡であるためか、柱穴は検出されていない。Ｐ１は南東辺




第25図 SI－002（1/80・カマド1/40）




第26図　SI－002出土遺物（1/4・14のみ1/3）

壁直下に、48cmとかなり深く掘り込まれたピットで、入口施設に伴うものである可能性が指摘できる。その場合当建物の主軸方向は北西－南東となるが、西コーナーに貯蔵穴と考えられるＰ２があって、カマドも含めた諸施設の位置関係は通例の竪穴建物の原則[1]を逸脱していることになる。Ｐ２は57cm×49cmの楕円形で、床面からの深度は16cmと浅い。カマドは北東辺の著しく東コーナーに偏在した位置にあり、谷旬による分類[2]に従えば、$B_2$類に属する。火床は平坦である。壁周溝は全周する。ただしカマド下は掘られていない。

当遺構では、踏み締め等による床面の顕著な変化は観察されていない。

**遺物等出土状況**　遺物は床面中央に極端に偏在した。またＰ１付近にもややまとまっていたが、そこでは床面から浮いて出土したものが多い。したがって建物廃絶後、周辺部分が一気に埋められ、中央付近のみが窪みとして残った段階で、集中的な遺物廃棄行為がなされたと考えられる。なお甑（７）はカマド火床付近の出土である。

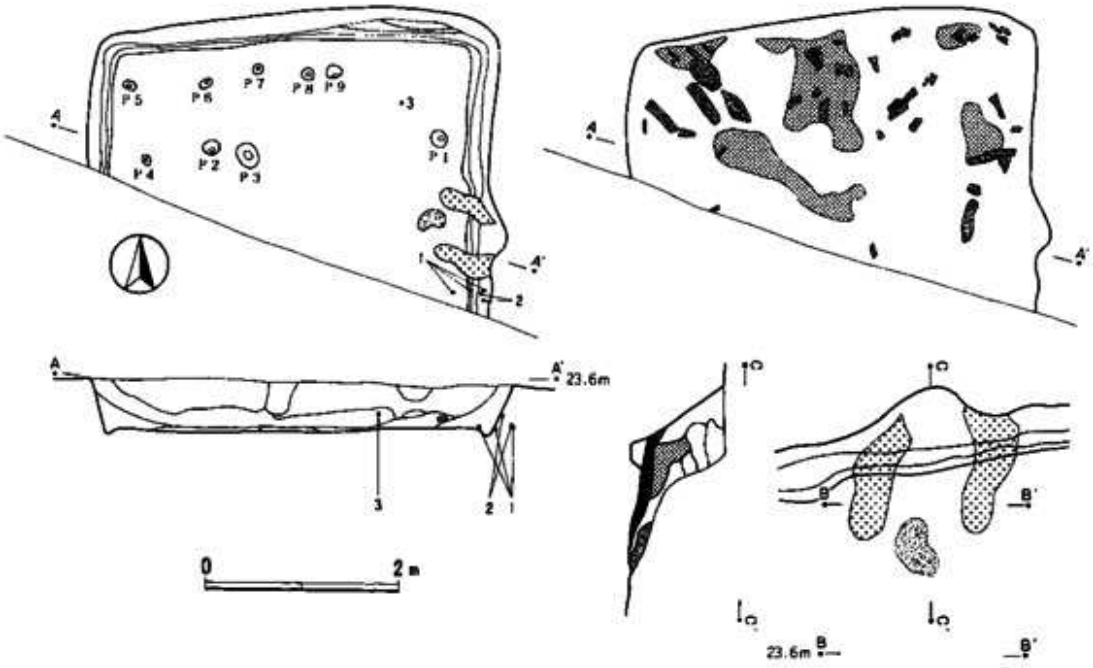
**出土遺物**　１～６は甕形土器である。１は球胴状のもので、口縁部が外反し、頸胴部界が明瞭な段を呈するもの。２、４は長胴のもので肩部の張りがなく、最大径を胴部中位に持つ。３と５は口頸部は短いが、頸部の屈曲は大きいものである。６は甕形土器の底部であろう。７は甑で、口縁部を欠失する。口頸部のなでにより、頸胴部界に鋭い稜が残る。８は高坏の脚部上位の破片。９～11は須恵器坏で、11のみ口縁部が失われているが、いずれも共通した形状を持つものである。口径が小さく底部から受部までが直線的で、口縁の立ち上がりが短く内傾している。10は回転篦削り痕を残さず、９、11でも篦削り痕は底胴部界の僅かな幅のみ。12は頸胴部界の稜を持つ鉢。13は支脚片、14は土玉片である。

## ３　ＳＩ－003（第27図～第28図・図版14－１）

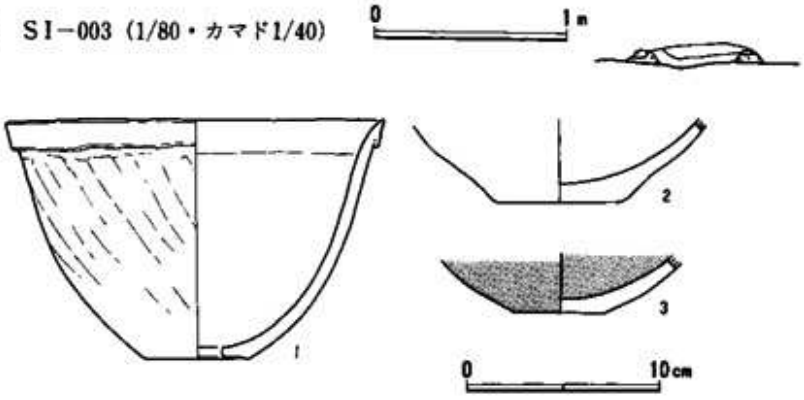
**位置・形状**　調査区の南縁、N23－10区に位置し、南側は主要地方道千葉・大網線によって削られた部分となるため、北半部しか調査し得なかった。入口施設の位置が判らないため主軸方位不明であるが、各辺をほぼ東西南北に置く竪穴建物跡である。北辺長4.2mを測り、検出面からの深さは0.3～0.5m。

**付帯施設・床面**　小ピットが計９ケ所で検出されているが、主柱穴はないものと見るべきであろう。入口ピット及び貯蔵穴と思われる施設も調査区内では未検出である。小ピット群は小径で浅いものが多く、Ｐ９が25cmの掘り込みを持つ他は10cm前後の深度しかない。カマドは東辺おそらく中央に位置し、前記ＳＩ－002と同様、谷分類の$B_2$類に相当する。壁周溝は調査区内においては全周し、カマド下にも巡っていた。

**遺物等出土状況**　遺物量は僅少で分布も疎らである。ただカマド右袖脇にやや集中するのが注目される。当建物跡では焼土ブロックが広範に検出され、炭化材も求心的な配列で検出されている。




第27図　SI－003（1/80・カマド1/40）



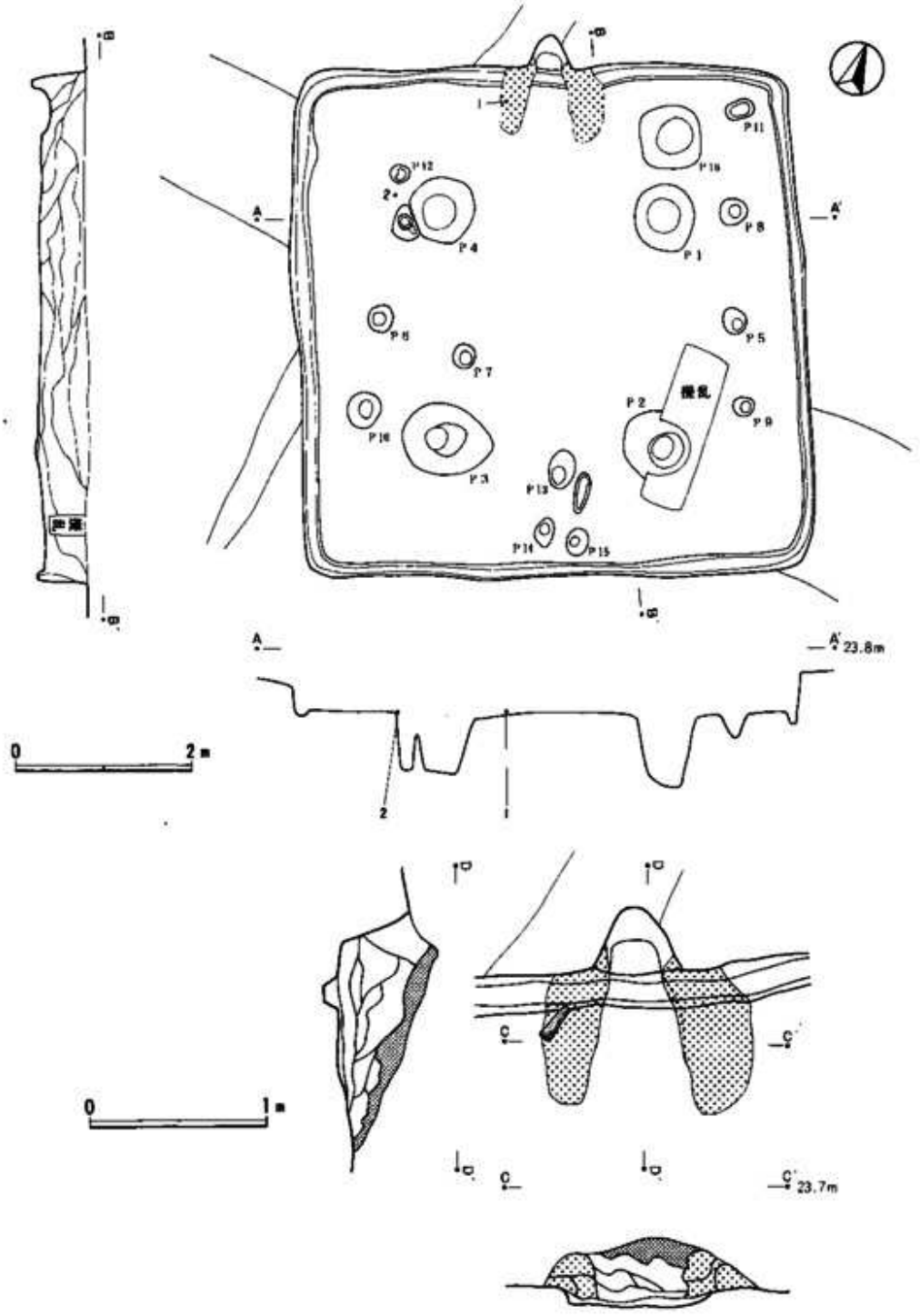

第28図　SI－003出土遺物（1/4）

**出土遺物**　1は甑形土器である。焼成前に穿孔され、底孔の口径は26～28mmを測る。口縁部は折り返し状複合口縁を呈する。器面は斜位の篦削りの後同方向に研磨されている。2、3は底部であるが、2は甕形土器の底部、3は丁寧に研磨されたうえに赤彩されており、坏か鉢と考えられる。

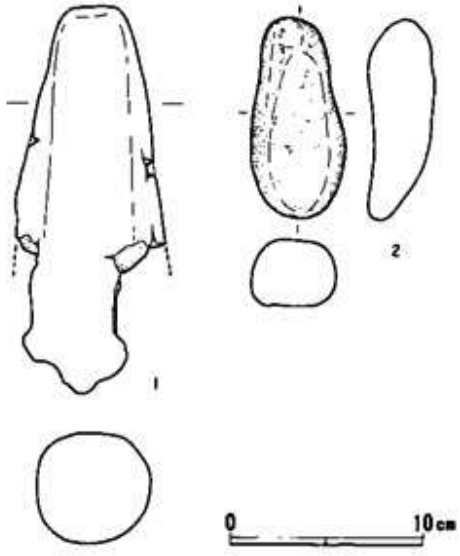
## 4　SI－004（第29図～第30図・図版14－2）

**位置・形状**　古墳時代遺構群の南西寄り、O22－21・22区、O23－01・02区に跨がって位置するほぼ正方形の竪穴建物跡。北々西－南々東方向に主軸方位を置く。北辺、東辺、南辺とも5.8m、西辺5.7mを測り、検出面からの深さは0.4～0.5m。

**重複関係**　SD-001とSD-003と重複し、当遺構の方がいずれよりも古。またP2付近に攪




第29図　SI－004（1/80・カマド1/40）




第30図　ＳＩ－004出土遺物（1/4）

乱孔が認められた。

**付帯施設・床面**　主柱穴は４ケ所にある。Ｐ１～Ｐ４がそれで、壁面よりかなり内側に穿たれ、ほぼ正方形配列を示す。床面からの深度はＰ１が81cm、Ｐ２が77cm、Ｐ３が75cm、Ｐ４が64cm。Ｐ16は貯蔵穴であろう。径69cmの隅丸方形で、床面から96cmと非常に深く掘り込まれている。他に小ピットが多く検出されているが、それらのうちＰ13、Ｐ14、Ｐ15が入口施設にかかわるものであろう。このような配列の入口ピットが検出されることは珍しいが、これらから入口施設は一本梯子の懸架でないことは明らかである。深度はＰ13が19cm、Ｐ14が34cm、Ｐ15が21cmであった。東辺側にはＰ11、Ｐ８、Ｐ５、Ｐ９が、西辺側にはＰ12、Ｐ６、Ｐ10が列をなして穿たれているが、深さは16cmから37cmあり、補助的な柱穴になるのかどうか判然としない。とくに西辺側の配列は遺構の軸からかなりずれているため、当建物に伴うかどうかも疑問視すべきか。カマドは北辺中央に設置されている。やはり$B_2$類に分類される。壁周溝は全周し、またカマド下にも巡っている。

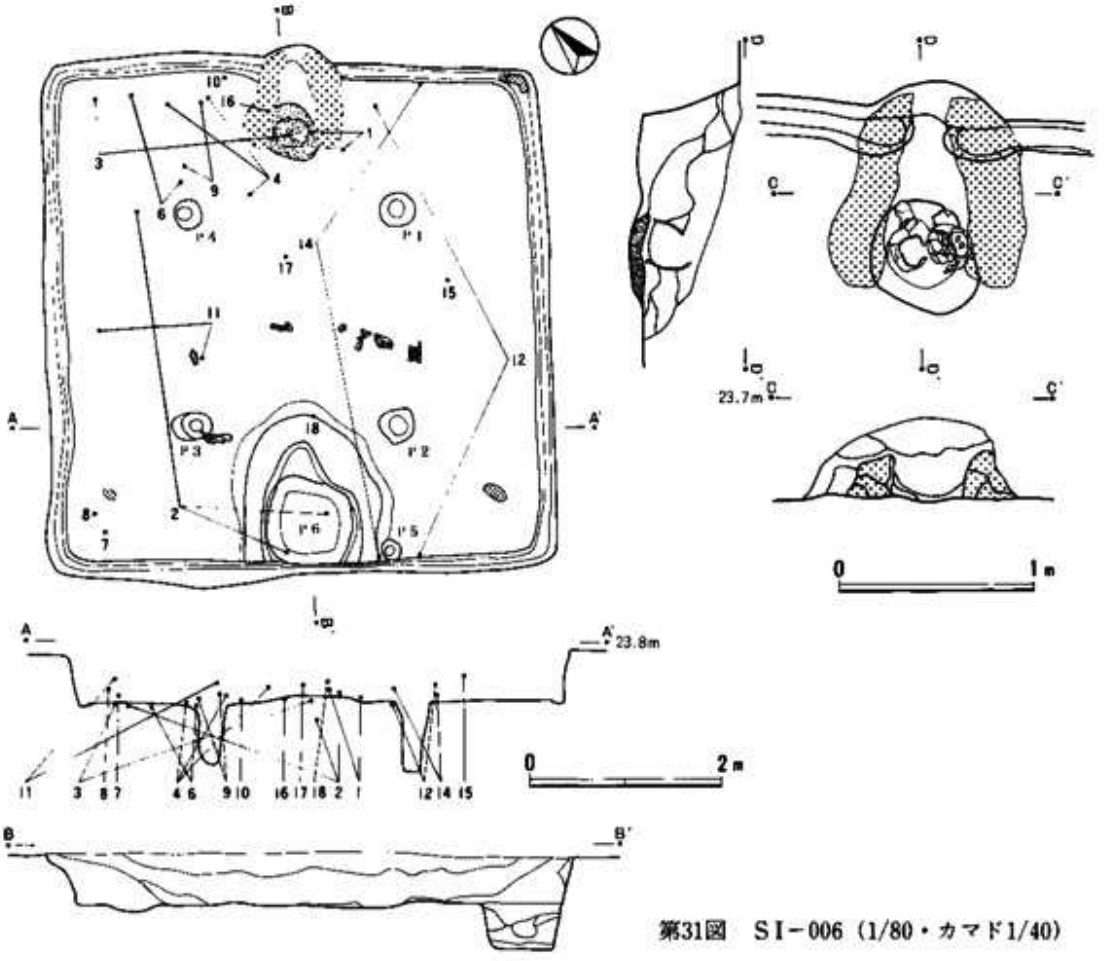
当建物跡では、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

**遺物等出土状況**　比較的大型の遺構ではあるが、出土遺物量は僅少で、とくに集中傾向もない。カマド左袖下から支脚（１）が出土している。

**出土遺物**　１はカマドから出土した支脚、２は角閃安山岩製と思われる長楕円礫である。とくに被熱痕、使用痕等は観察されない。

## ５　ＳＩ－006（第31図～第32図・図版14－３）

**位置・形状**　古墳時代の遺構群のほぼ中央、N22－20区に位置する竪穴建物跡で、北々東－



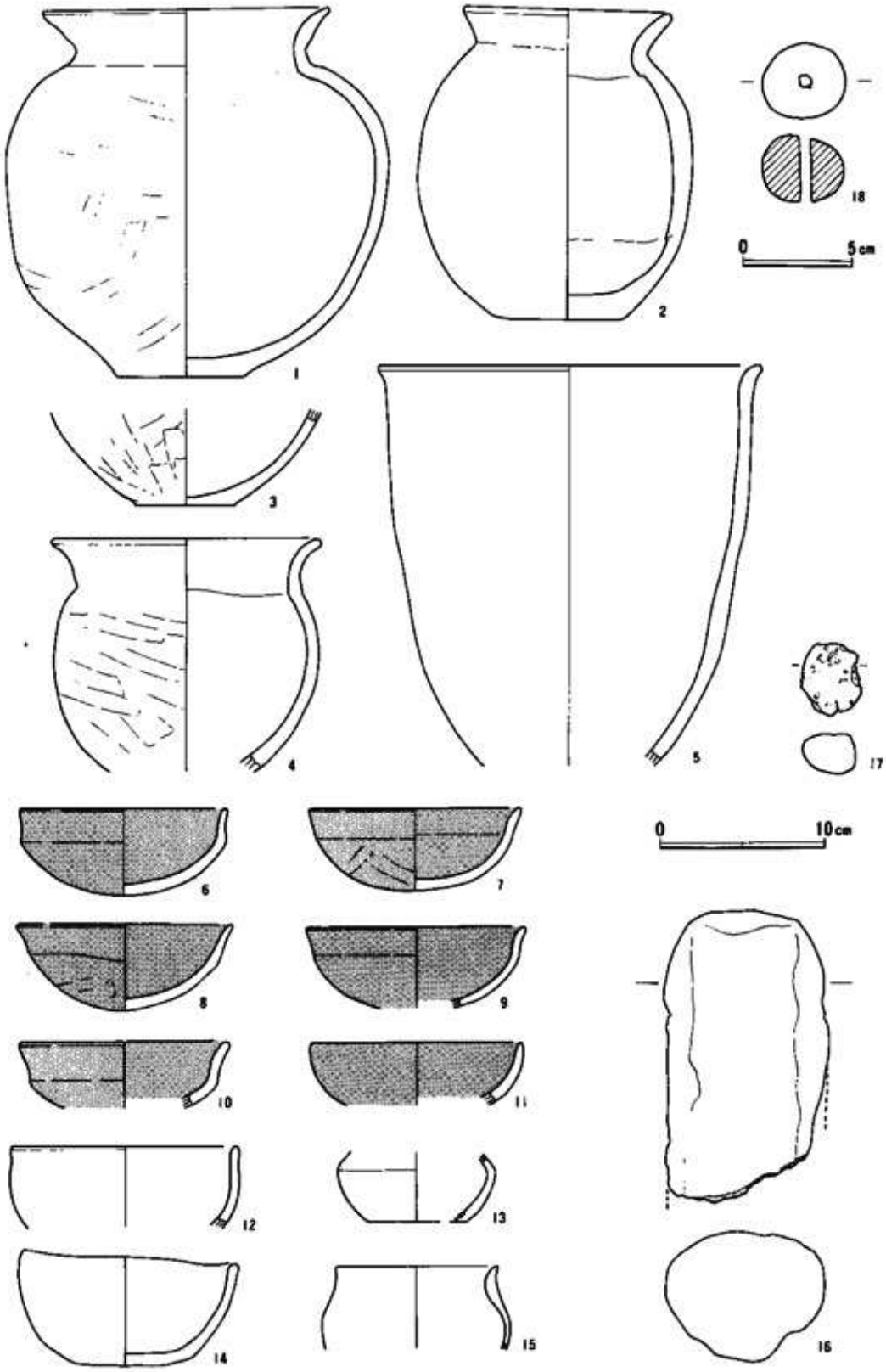

第31図　ＳＩ－006（1/80・カマド1/40）

南々西方向に主軸方位を置いている。平面形状は概ね正方形を呈しており、北辺と南辺がそれぞれ5.2m、東辺と西辺がそれぞれ5.3mを測る。検出面からの深さは0.5m前後である。

**付帯施設・床面**　主柱穴は４ケ所にあり、正方形配列を示す。それらは前記ＳＩ-004におけると同様、壁からかなり離れた位置に配されている。床面からの深度には差が見られ、北側のＰ１とＰ４の掘り込みが37cmと39cmであるのに対し、南側のＰ２は71cm、Ｐ３は60cmと深い。南辺中央にあるＰ６はその形状から貯蔵穴と考えられ、100cm×94cmの隅丸方形を呈し、深さは49cm。その周りには土堤状の高まりが巡り、貯蔵穴上に入口施設があったことが想定される。なお土堤状施設の幅は25～60cm、高さは３cm以下であった。土堤状施設右脇に小ピットＰ５があるが、14cmと浅く、その性格は不明。カマドは北辺中央に位置し、入口と正対する。谷分類によるＣ類に相当し、火床は浅い皿状の窪みをなしていた。壁周溝は全周するが、カマド下は袖の下で途切れている。

当建物跡でも踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

**遺物等出土状況**　100点あまりの土器片が出土しているが、カマド前面からその左(西）側に




第32図　SI－006出土遺物（1/4・18のみ1/3）

かけてやや偏在する傾向がある。また覆土中下位～床面からの遺物が多い。カマド内からは甕形土器2個体がつぶれた状態で出土しているが、カマド外との接合関係もある。なお床面中央とＰ３脇に僅かながら炭化材が検出された。

**出土遺物**　１～４が甕形土器である。１は球胴気味のもので、肩が張り、最大径はやや上位にある。２は若干長胴気味の甕形土器で、器壁は厚く、胴部の調整は篦による縦位のなで。４はかなり広口のやや小型の甕形土器で、胴部の調整は斜位の篦削り。５は甑形土器で、底部を欠失する。口端は僅かに外反するのみ。６～11には坏形土器を示す。いずれも赤彩される。頸胴部界の稜を持つ１～10と、稜を持たない11に分かれるが、前者の中では６のみ口縁部が直立し、他は外反している。12と14を椀形土器とする。しかし14が粗雑な成型であるのに対し、12は丁寧な作りで、異なった機能を有していたことも想定される。13は算盤玉状の胴部を持つ土器である。全体の器形は判然としない。15はゆるやかに屈曲した口頸部を持ち、小型の甕と言うべきか。内外面とも丁寧に研磨されている。16は支脚、17は軽石片、18は土玉である。

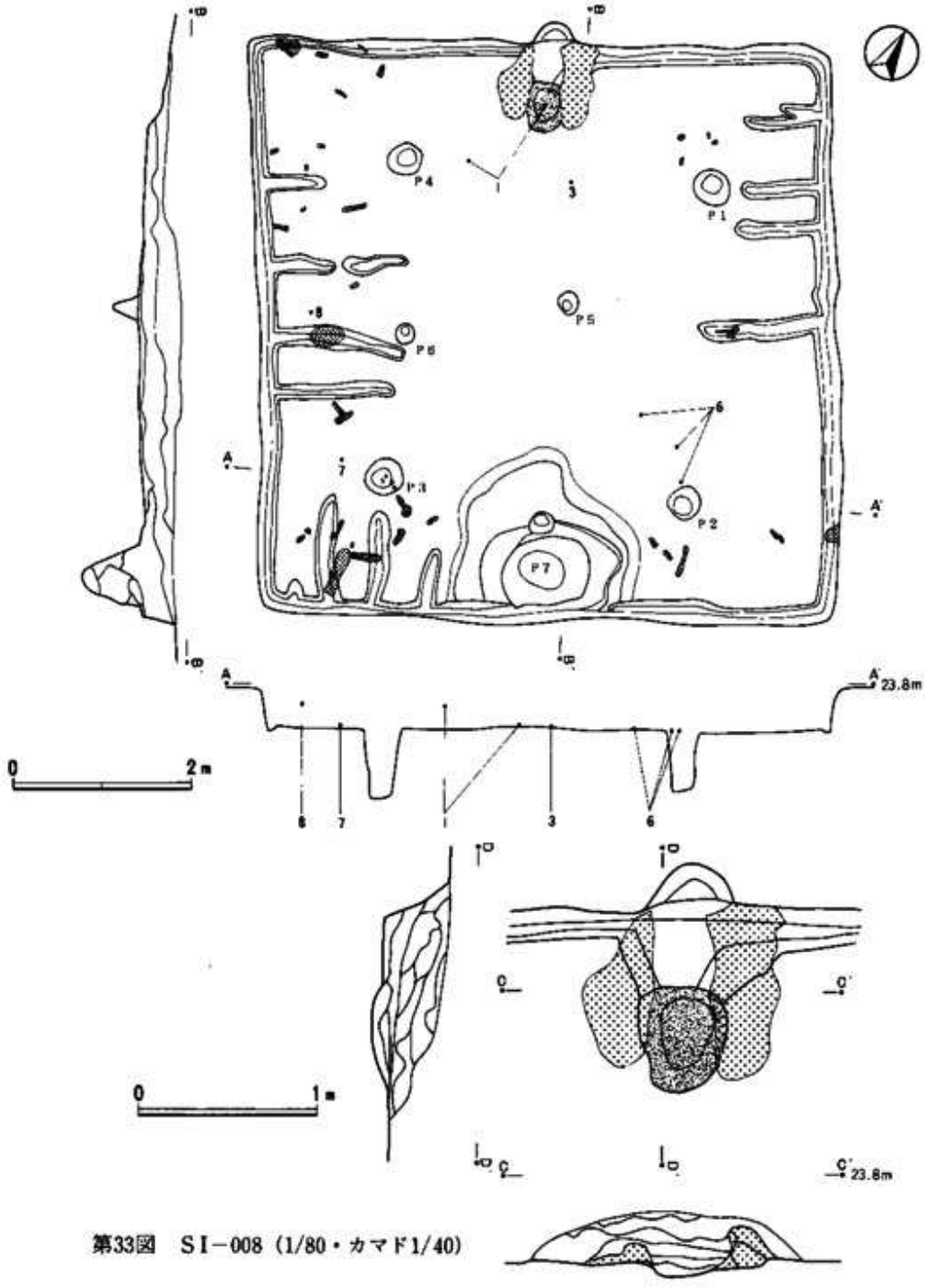
## ６　ＳＩ－008（第33図～第34図・図版15－１）

**位置・形状**　古墳時代の遺構群北縁、Ｏ22－06区とＯ22－11区に跨がって位置した竪穴建物跡。北々西－南々東方向に主軸方位を置く。平面形状はほぼ正方形を呈する大型の建物で、各辺とも約6.5m、検出面からの深さは0.4m前後であった。

**付帯施設・床面**　主柱穴は４ケ所にあり、ほぼ正方形配置をとる。床面からの深度はＰ１が63cm、Ｐ２が69cm、Ｐ３が76cm、Ｐ４が58cm。床面中央にはＰ５が、Ｐ３とＰ４の間にはＰ６があって、いずれも小径であるが26～29cmの深さを持ち、補助的な柱穴の可能性もある。南辺中央には101cm×73cmの楕円形を呈するＰ７があって、貯蔵穴と考えられる。深さは56cm。その周囲にＳＩ-006と同様の土堤状の高まりが認められる。その幅は20～85cmで、高さは１～４cmであるが、Ｐ７の上に入口施設が存在したものであろう。Ｐ７の北に接して30cmの掘り込みを有するＰ８があるが、おそらく入口施設に伴う。カマドは北辺中央に設けられている。谷分類による$B_2$類に属し、火床は浅い窪みとなっている。壁周溝は全周する。周溝から床面に向かい計11条の小溝が延びるが、当建物のように狭い間隔を以て連続する場合、寝床等の下部施設であった可能性[3]が考えられるが、中でも例えば東辺中央に位置するものなどは間仕切り施設の下部構造である可能性も考慮しておかなくてはならないだろう。

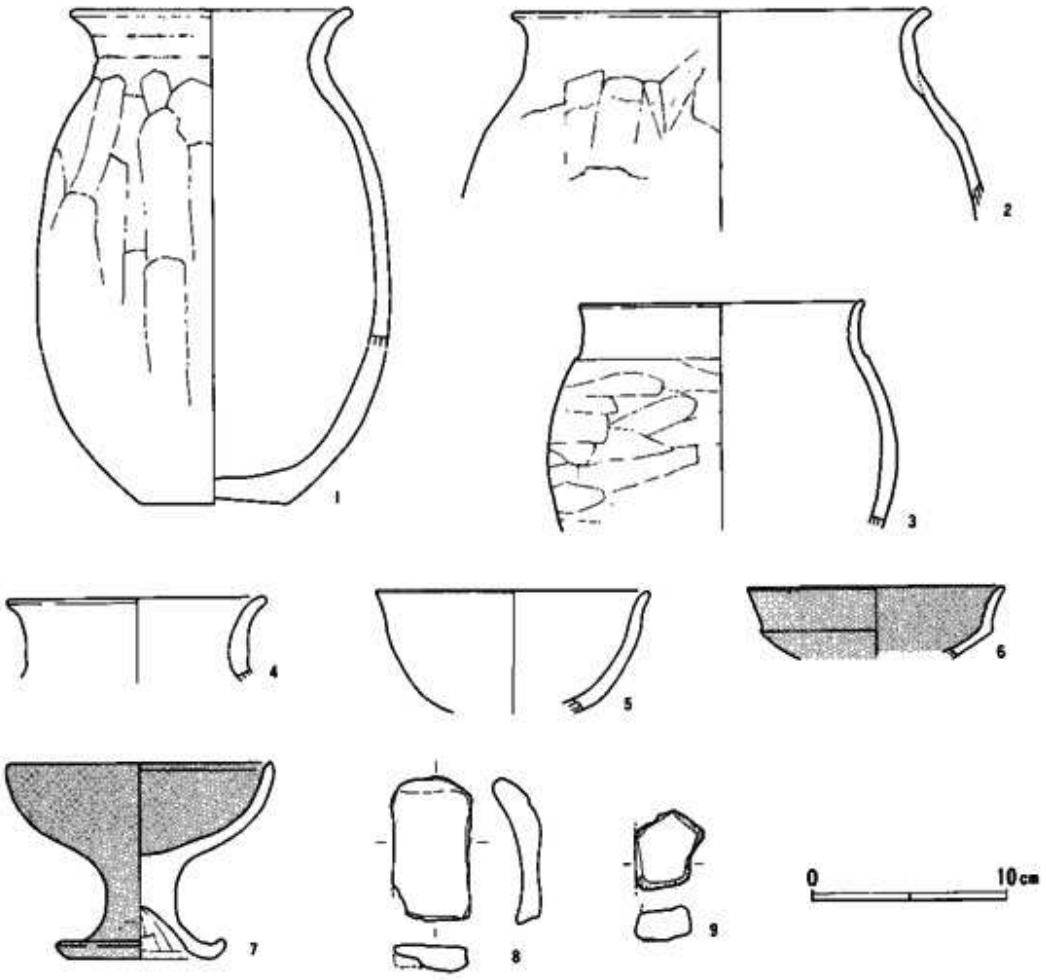
当遺構でも、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

**遺物等出土状況**　遺構全体としては遺物は疎らにしか出土していないが、カマド内とその周辺だけは著しい集中分布を示していた。ただし器形が復元される個体数は少なく、１がカマド内に集中分布した他、２と４がカマド内とカマド前面の出土である。また遺構内周縁部に炭化材及び焼土ブロックが分布したが、きわめて断片的なものであった。




第33図　SI－008（1/80・カマド1/40）

**出土遺物**　1～4が甕形土器である。1は頸部に輪積痕を残す長胴の甕で、最大径を胴部下位に持つ。2、3も肩部の張りがないものであるが、とくに3は胴径に比較して口径が大きいと言えようか。4は口頸部のみの破片であるが、この個体については球胴のタイプかも知れない。5は椀形土器とする。内外面とも比較的丁寧ななでにより仕上げられているが、器面の荒れが激しい。6は坏形土器である。内外面とも赤彩され、頸胴部界の稜がシャープで、口縁部



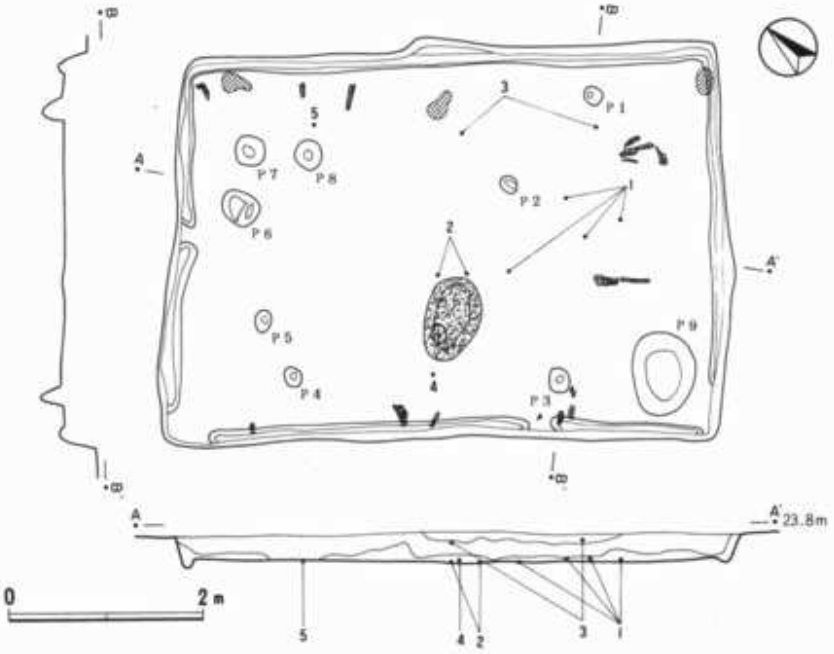

第34図　ＳＩ－008出土遺物（1/4）

が外反して開く器形。７は高坏形土器で、脚部内面以外は赤彩されている。口端は丁寧ななでにより、つまみあげたように薄く成型され、また脚部端は若干上に反り上がって終わる。８、９は細粒砂岩製の砥石片である。

## ７　ＳＩ－009（第35図・第36図・図版15－２）

**位置・形状**　古墳時代の遺構群の北寄り、N22－10区に位置する竪穴建物跡。北東－南西方向に主軸方位を置く。平面形状は主軸と直交方向に長い長方形を呈する。北西辺4.0m、南東辺4.1m、北東辺5.6m、南西辺5.8mを測り、検出面からの深さは0.2～0.4m。

**付帯施設・床面**　主に周辺部において小ピットが多く検出されているが、主柱穴と思われる施設は認められない。小ピットはＰ５が最も浅く、深さは僅か５cm、最も深いＰ２で24cmである。それらのうち、Ｐ３は入口ピットである可能性が濃厚で、前記のように主軸方位を想定した理由はここにある。南コーナーには貯蔵穴と考えられるＰ９がある。これについては平面規

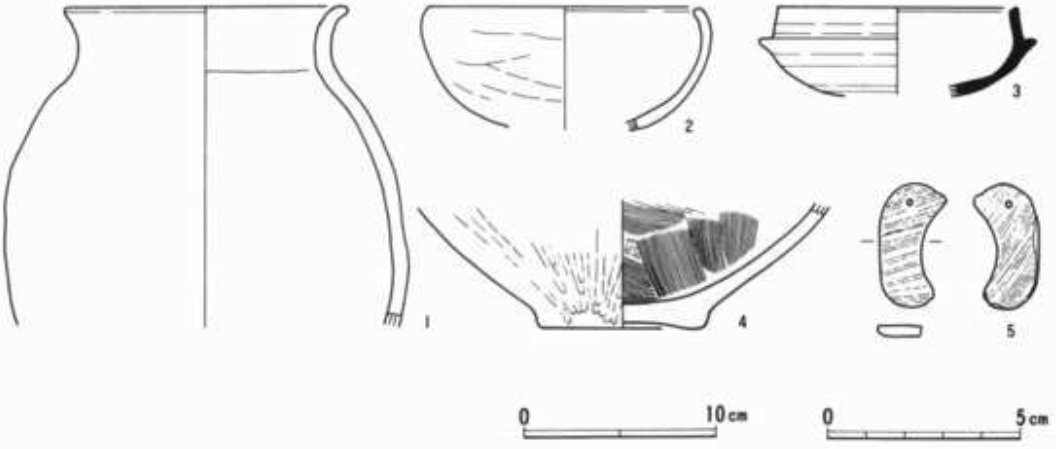



第35図　SI－009（1/80）

模は0.8×0.7mと大きいものの、床面からの深度は最大12cmしかなく問題を残す。炉は床面の南西寄り中央にあり、P3が入口施設であるとすれば、入口の左脇に炉を営んだことになる。壁周溝は概ね全周する。しかし西コーナーと南コーナー及び北西辺、南西辺にそれぞれブリッジ状に周溝が途切れる部分がある。

当遺構には踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

**遺物等出土状況**　全体として土器小片が多く、またそれほど特徴的な出土状況を示していないが、炉周辺から南にかけて密度が増す傾向がある。実測図を掲載した遺物については、3の須恵器を除いて床面から出土したものである。また遺構の周辺部からは、遺存度は悪いが炭化



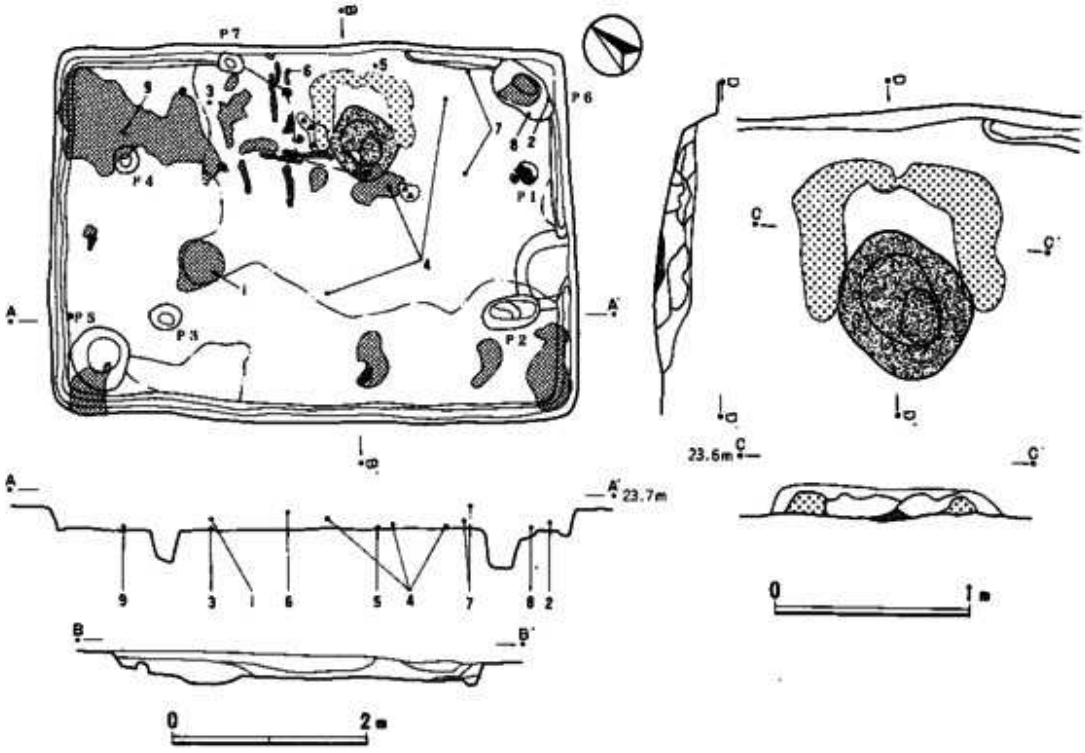

第36図　SI－009出土遺物（1/4・5のみ1/2）

材と焼土ブロックが検出されている。

**出土遺物**　1は甕形土器の口縁部～胴部である。口縁部はあまり大きくは外反せず、横位のなでによって仕上げられる。この土器は二次的被熱痕が顕著で、内外面とも器面は荒れ、とくに内面の剝落が目立っている。2は椀形土器である。口縁部は小さく内弯している。口縁部を除く外面は篦削り、内面は比較的丁寧ななでによって調整されている。この個体についても二次的な被熱痕が認められる。3は須恵器坏片で、遺存度は1／4強、推定口径12.4cm。口縁部の立ち上がりはさほど直立的ではないが、端部は明確な面とりがなされている。受部下15mm前後までヨコナデにより調整され、以下回転篦削り。4はおそらく壺形土器の底部で、外面は縦位の丁寧な研磨がなされ、内面には刷毛目状条痕が残る。この土器についても二次的被熱の故か器面の荒れが目立ち、また本来の焼成もあまりよくない。5は石製模造品（滑石製勾玉）で最大長31.4mm、最大幅16.8mm、最大厚2.8mm、重量2.3gを測る。

## 8　ＳＩ－011（第37図・第38図・図版15－３）

**位置・形状**　古墳時代の遺構群の中央西寄り、N22－19区に位置する竪穴建物跡。ＳＩ-009と同様、北東－南西方向に主軸方位を置く。平面形状についても、やはり主軸と直交方向に長い長方形を呈し、北西辺3.8m、南東辺3.8m、北東辺5.3m、南西辺5.4mを測る。検出面からの深さは0.2～0.3m。平面プランとしてはＳＩ-009に近似する。

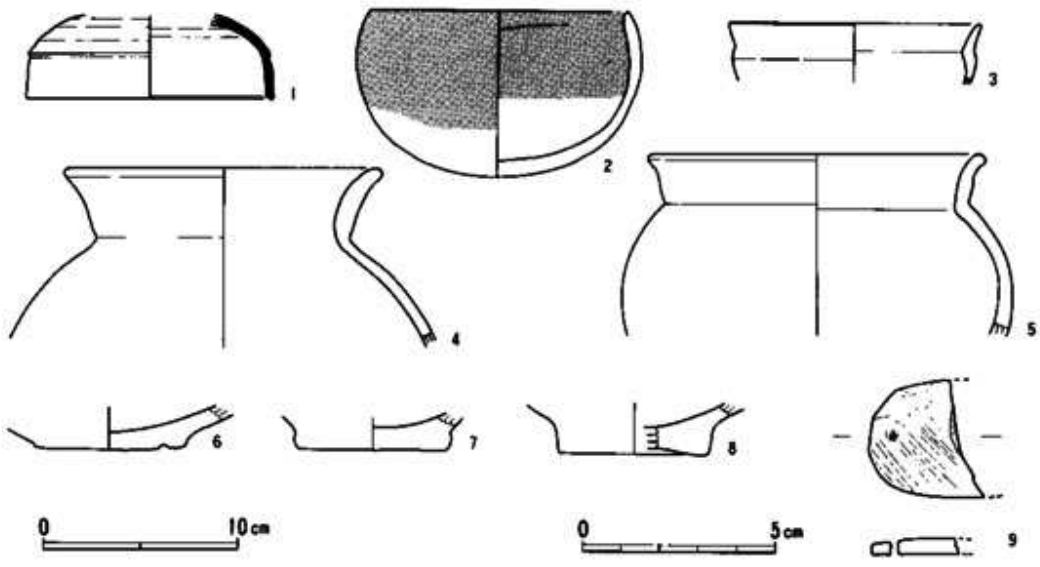



第37図　ＳＩ－011（1/80・カマド1/40）

**付帯施設・床面**　主柱穴と思われる施設は検出されていない。ピットは総計７ケ所で検出されているが、それらのうちＰ３を入口ピットと考えたい。30cmの掘り込みを持つ。ただ10cmと浅いＰ１についても、後に述べる床面観察から入口ピットの可能性が捨て切れない。勿論その場合には主軸方向は90°異なることになる。また入口が途中でつけ替えられた可能性も考慮しなくてはならないであろう。それは貯蔵穴と推定されるＰ５、Ｐ６によっても首肯されよう。Ｐ５はＰ３の脇に、Ｐ６はＰ１の脇にあるが、６世紀初頭以前の竪穴建物は入口脇に貯蔵穴を設ける例が多いからである。Ｐ５は66cm×60cmの円形に近いもの、Ｐ６は75cm×43cmの不整楕円形で、床面からの深度はいずれも30cm程度ある。他にピットとしてはＰ２、Ｐ４とＰ７の３基があり、いずれも性格は不明、Ｐ４とＰ７はごく浅いもので、Ｐ２は39cmの掘り込みがあるが、後年の攪乱孔かも知れない。通常の地床炉はないが、北東辺中央やや南寄りに山砂を用いて構築されたカマド（ヘッツイ）状施設がある。壁面とカマド状施設の間はおよそ20cm離れており、また煙道の痕跡はない。壁周溝はカマド状施設の背後と南東辺中央の２カ所以外に巡っている。南東辺中央には周溝の代わりに皿状の窪みとなる部分がある。

床面の踏み締め等による硬化はＰ２、Ｐ３、Ｐ７を直角に結ぶ範囲と、Ｐ３の外側において観察され、北西辺側と南西辺側では概ね軟質であった。

**遺物等出土状況**　遺物はほとんどが土器片で、Ｐ６、Ｐ１からカマド状施設の周辺と南西辺側中央の２カ所に偏在した。随所に焼土ブロックが検出され、またカマド状施設の左脇を中心に炭化材が出土しているが、あくまで断片的なもので部材の特定等はできない。さらにカマド状施設付近では貝ブロックが検出されている。これは床面から15～20cm以上上位にあり、建物廃絶後に投棄されたものであるのは明らかである。

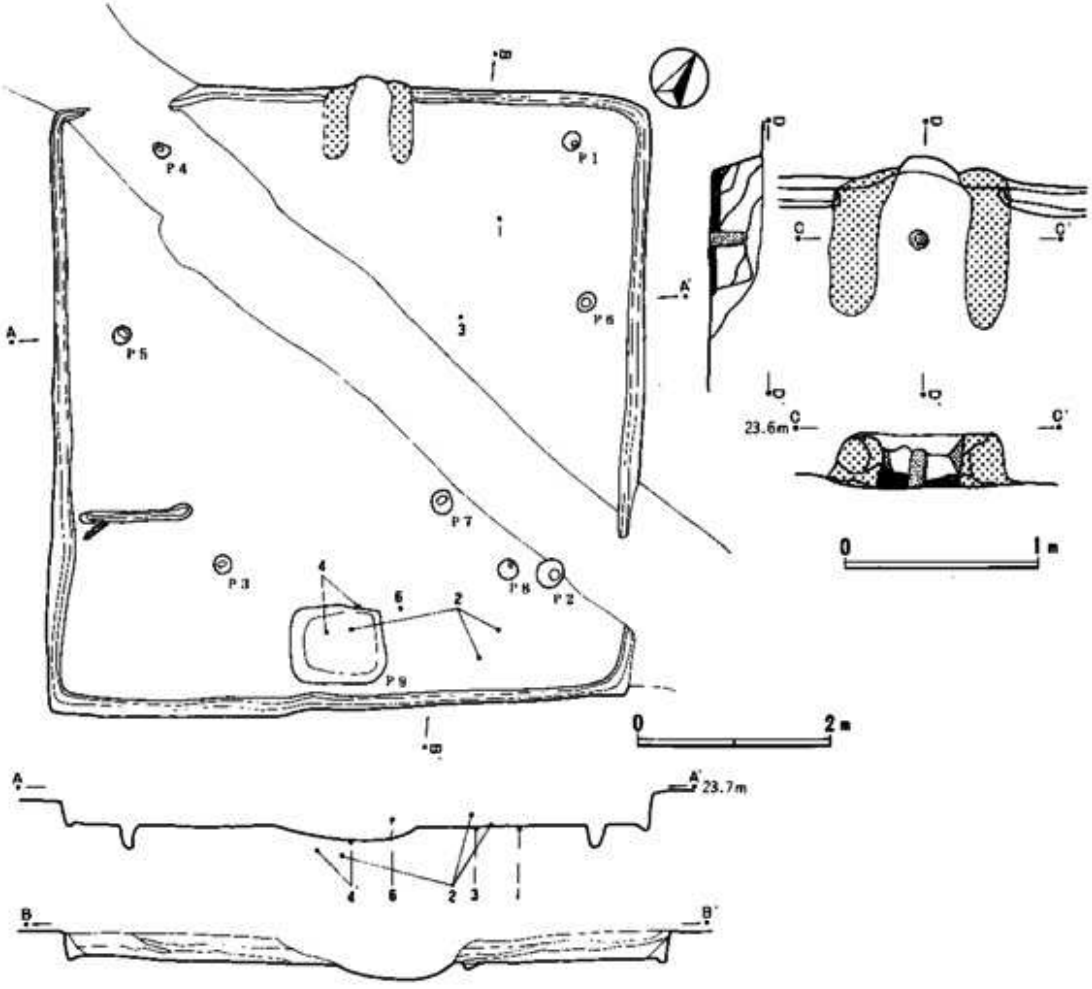



第38図　ＳＩ－011出土遺物（1/4・９のみ1/2）

**出土遺物**　1は須恵器坏蓋で、遺存度1／4、推定口径12.4cm。外面の稜は鋭く、口端の面とりも明確で凹線状を呈する。遺存部位に限れば、外面全面に自然釉が認められる。2は椀形土器で、口縁部は僅かに内弯し丸底。この土器には内外面とも赤彩の痕跡が残される。内面の赤彩は上位のみ、外面は痕跡が残るのは上位のみであるがおそらく全面赤彩であろう。3は口縁部がやや外反する小型の鉢形土器である。4、5は甕形土器で、両者とも口縁部は丁寧な横位のなで、胴部は縦位の削りの後、4は斜位の篦なで、5は横位の研磨で調整されている。6～8に底部を示した。9は石製模造品で、双孔円盤であろう。遺存部の最大長30.2mm、最大幅29.2mm、最大厚4.1mm、重量5.6gを測る。

## 9　SI－012（第39図～第40図・図版16－1）

**位置・形状**　古墳時代遺構群中央やや南寄り、N22－25区とN23－05区に跨がって位置する竪穴建物跡。主軸方位を西北－南東方向に置く。平面形状はほぼ正方形であるが、東コーナー



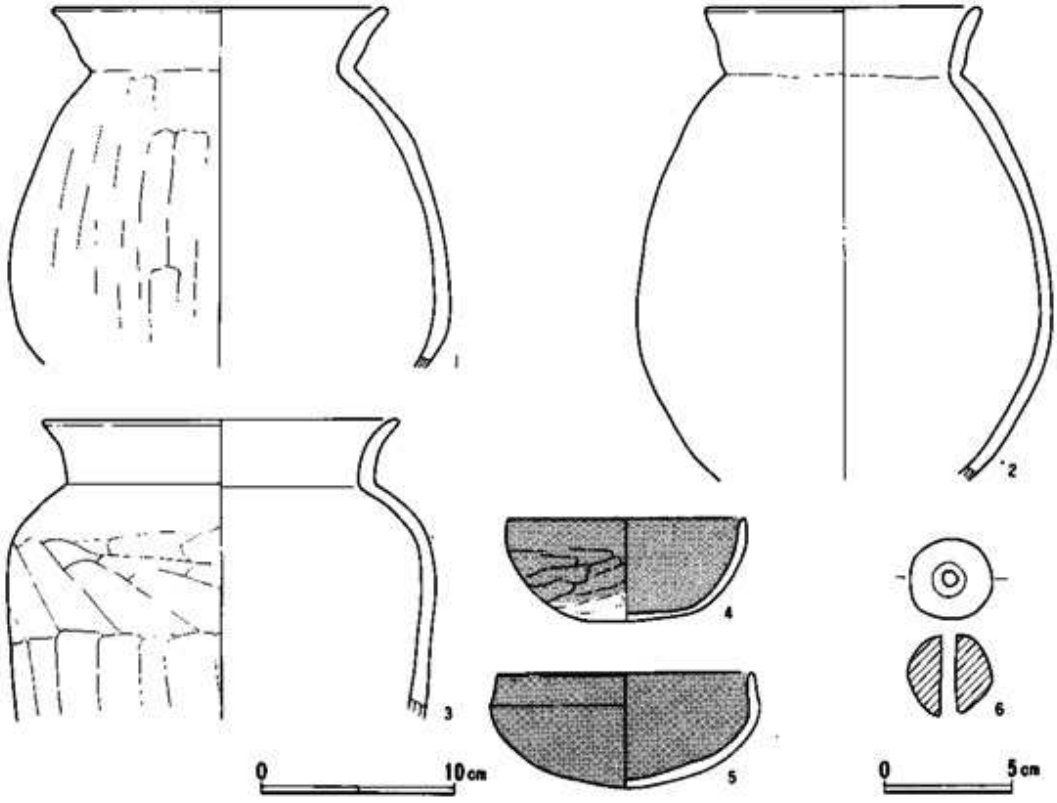

第39図　SI－012（1/80・カマド1/40）

付近に若干の歪みがあり、規模は北西辺6.3m、北東辺6.2m、南東辺6.1m、南西辺6.4mを測る。検出面からの深さは0.2～0.3mであった。

**重複関係**　遺構の中央を溝状遺構ＳＤ-001が通る。新旧関係は当遺構が古であり、床面の一部が失われている。

**付帯施設・床面**　比較的大型の竪穴建物跡であるにもかかわらず、主柱穴と明断できる施設は検出されていない。強いて規則的な配置を示すピットを挙げればＰ１～Ｐ４があるが、全体として北寄りに偏っている。またＰ１は19cm、Ｐ２～Ｐ４は31～35cmと浅い掘り込みしか有さない。他には43cmの掘り込みを持つＰ７と、20cm前後の掘り込みを持つＰ５、Ｐ６、Ｐ８が不規則な位置にある。南東辺中央壁際には貯蔵穴と考えられるＰ９が検出されている。平面形は98cm×79cmの隅丸長方形で、深さは22cm。入口施設は、その痕跡を残さないものの、おそらく貯蔵穴の上に構築されていたであろう。カマドは北西辺中央に設けられている。谷分類による$B_2$類に相当する。火床は平坦であったが、火床面上に灰が堆積し、中央には支脚が直立していた。壁周溝はＳＤ-001との重複部分で失われているが、本来は全周したものであろう。また南西壁際より周溝と直行方向に溝が検出されている。その長さは1.9m程であるが、間仕切りにかかわるものである可能性がある。

当建物跡では、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。




第40図　ＳＩ－012出土遺物（1/4・６のみ1/3）

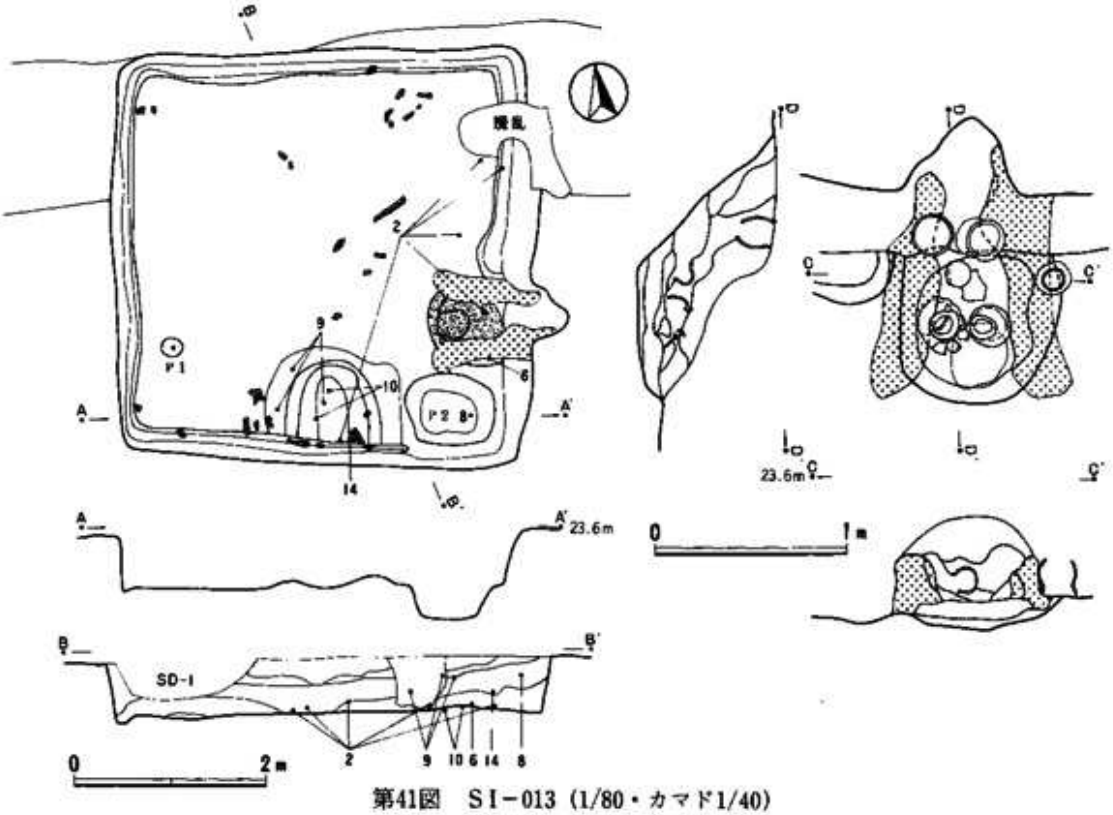
**遺物等出土状況**　遺物量は多くないが、カマドとその前面及び貯蔵穴とその前面に、すなわち遺構中軸線上に分布が集中する。また実測可能な遺物ではなかったが、カマド付近と貯蔵穴付近の間の接合関係も認められる。なお坏5はカマド内の出土である。当遺構では炭化材、焼土ブロック等は殆ど検出されなかった。

**出土遺物**　1～3が甕形土器であるが、1、2は比較的直線的な口頸部を持ち、肩部の張りがなく、最大径が胴部下位に位置するものである。対して3は口縁部が外反し、肩部の張りが著しい器形を有している。4、5は坏形土器である。4は口頸部が稜を持たずにゆるやかに湾曲して直立するもので、内面全面と外面の底部を除く部位に赤彩が施されている。5は口頸部が僅かに内傾し、頸胴部界の明瞭な稜を持つもので、全面が赤彩されている。6は土玉、最大径32.5mm、高さ30.6mm。

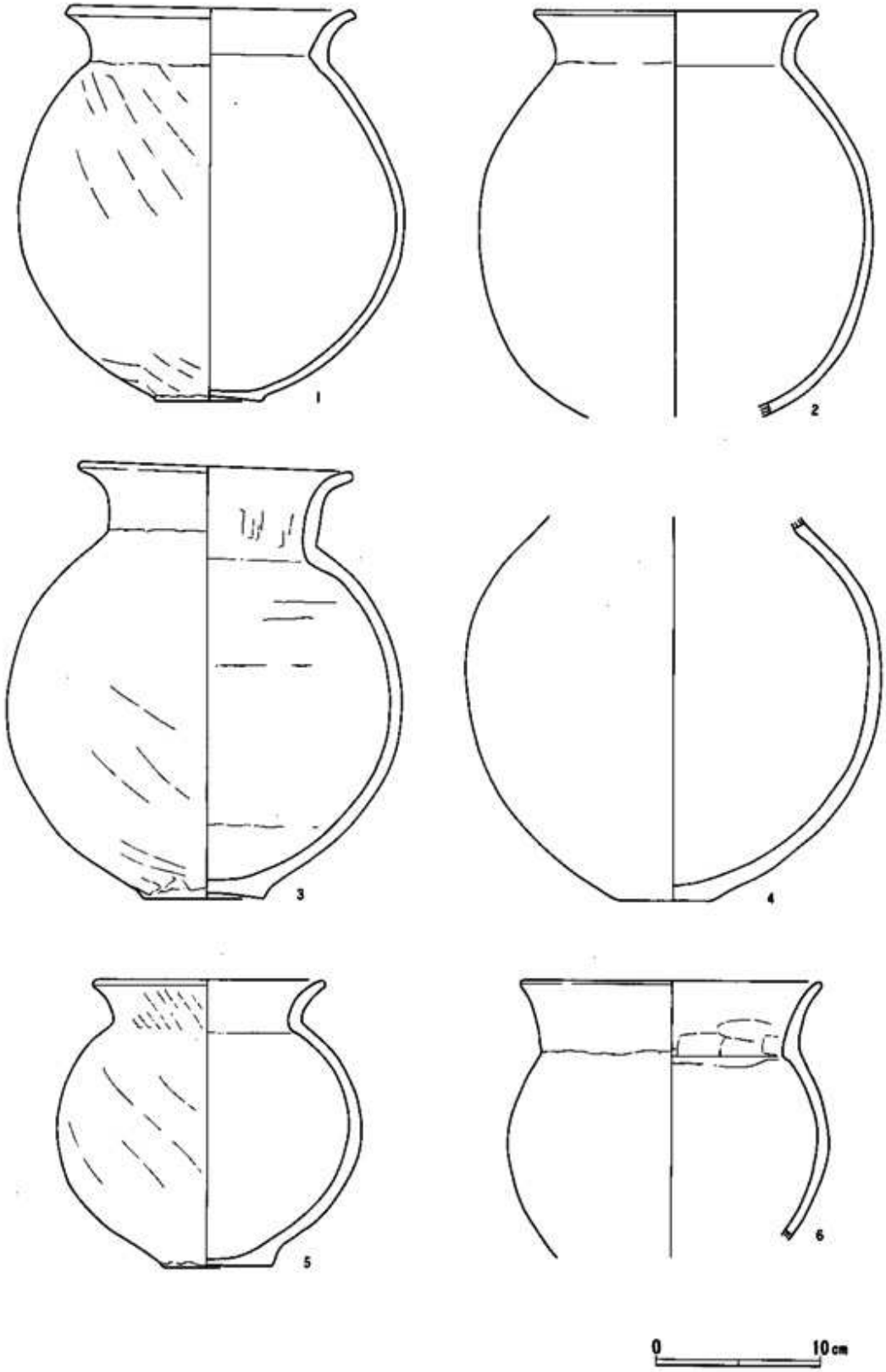
## 10　ＳＩ－013（第41図～第43図・図版16－２）

**位置・形状**　ＳＩ-012のすぐ西側、N22－24区とN23－04区に跨がって位置する竪穴建物跡で、東南東－西北西方向に主軸方位を置く。平面形状はほぼ正方形で、北辺4.5m、東辺4.4m、南辺4.3m、西辺4.2mとややいびつ。検出面からの深さは0.5～0.6mで、遺存度はよい。

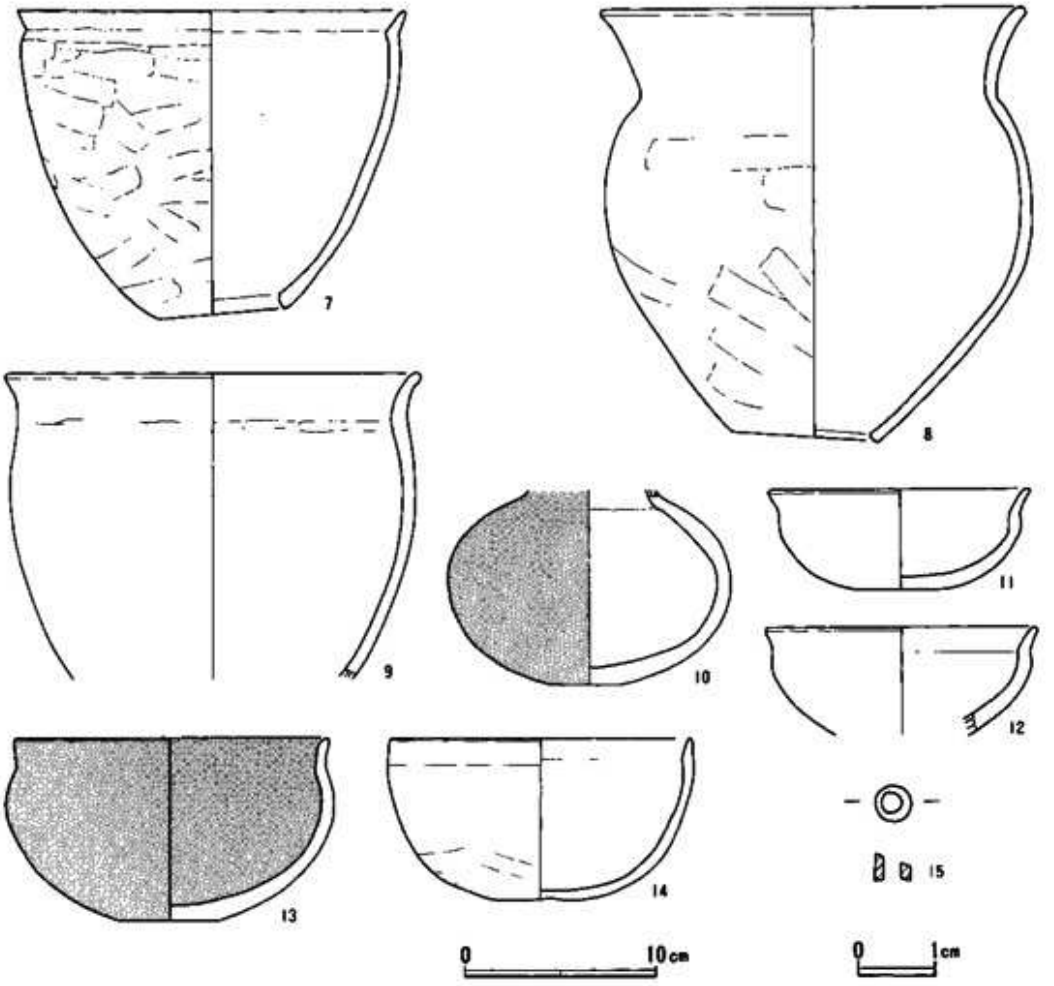
**重複関係**　北側で溝状遺構ＳＤ-001と重複するが、当建物跡の方が古である。また東壁の一




第41図　ＳＩ－013（1/80・カマド1/40）




第42図　SI－013出土遺物 1 (1/4)




第43図　SI－013出土遺物 2 (1/4・15のみ1/1)

部に攪乱を受けている。

**付帯施設・床面**　主柱穴は検出されていない。P 1は深さ21cmの小径のピットであるが、その性格は判らない。南辺中央、僅かに東に寄った位置に環状に巡る土堤状の高まりが検出されている。その幅は30～50cm、高さは5～10cmあるが、その内部にはピットは検出されていない。しかしこれが入口施設に伴うものであることは疑いなく、単に未検出であっただけであろう。その脇の南東コーナーには貯蔵穴と推定されるP 2がある。96cm×71cmの隅丸長方形を呈し、その深さは33cm。貯蔵穴の周囲の床面はやや低くなっている。さらにその脇、東辺南寄りにはカマドが設けられている。上記諸施設の位置関係は典型的な集中配置型（筆者の分類によるC型）[4]を示すと言える。カマドは煙道の切り込みがやや大きいが、基本構造としては谷分類のB類とすることができ、壁面そのものの傾斜の上部を切り込んだ結果形成されているので、$B_1$類としておきたい。火床部には略円形の掘り込みが見られるが、火床はそれを埋め込んで平坦にした上に設けられている。壁周溝は概ね全周するが、貯蔵穴の周囲とカマド下には巡っていな

い。貯蔵穴の周囲については床面レベルそのものが低い所以であろう。

この建物跡についても、踏み締め等による床面硬度の顕著な変化は観察されていない。

**遺物等出土状況**　量的には少ない。しかしカマドから入口にかけての周辺に顕著な偏在傾向がある。またとくにカマド内においては完形及び準完形のの甕形土器1、3、5、6（甑か）が火床上に埋まっており、甑形土器7、8は煙道寄りの上位に置かれていたように出土した。当遺構では炭化材は断片的なものが少量出土しただけであった。

**出土遺物**　1～5が甕形土器である。いずれも球胴形で口縁部が外反するが、中では3のみ頸部が直立した後に口縁部が外反するという特徴がある。6は甕形土器かも知れないが、8との類似性から甑形土器の可能性がある。7、8、そしておそらく9が甑形土器である。7は非常に短い口頸部が「く」の字形に屈曲して開くもの、8は球胴形の胴部を持ち、比較的長い口頸部が外反して開くものである。9は7に近いものの、中間的な形態を持つと言えようか。10は小型の壺形土器である。口頸部を欠失する。底部は小さな平底で外面が赤彩され、非常に丁寧に研磨されている。11、12を坏形土器としておく。両者とも短い口頸部が開くもので11は丸底に近い平底。この2点は内外面に著しい被熱痕を持つことで共通する。13、14を椀とする。13は丁寧に磨かれ赤彩されているのに対して、14はやや粗雑なつくりで、また坏形土器と同様に著しい被熱痕が観察される。

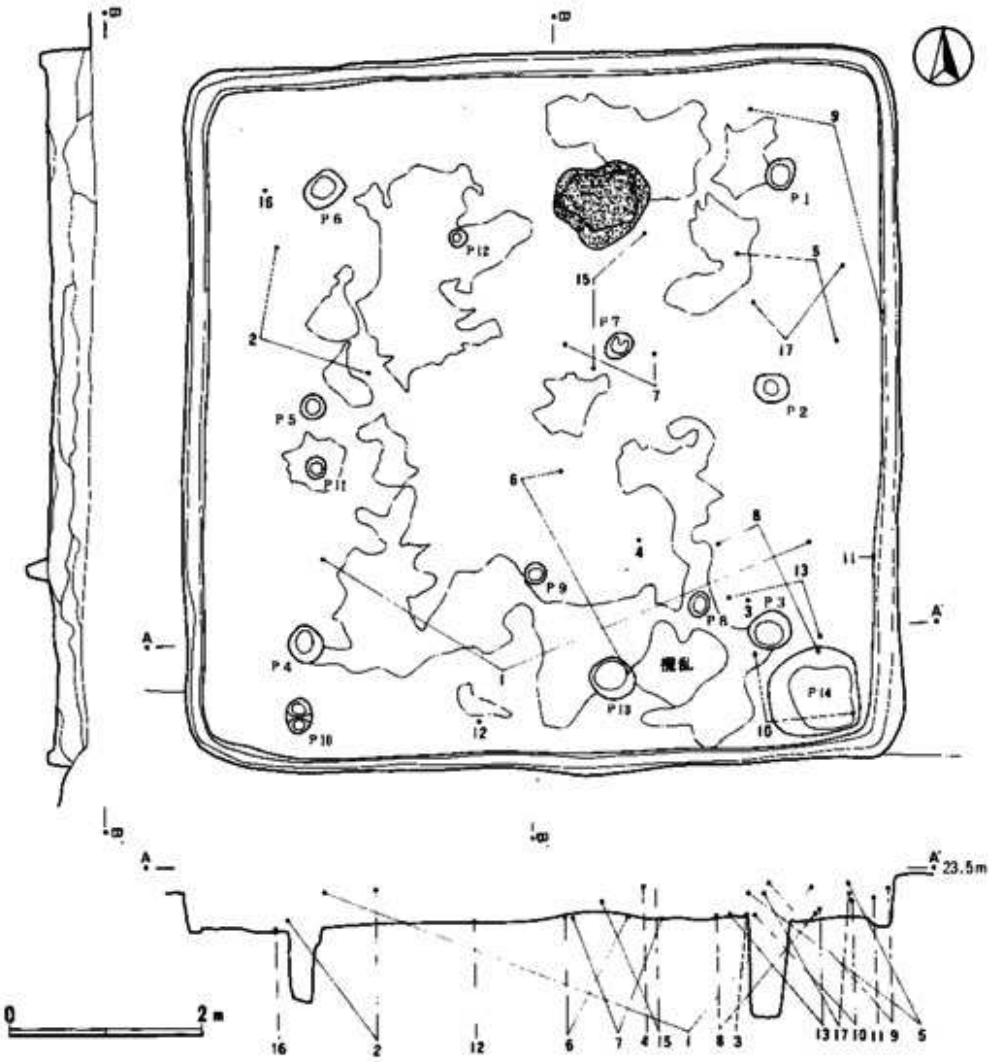
## 11　ＳＩ－014（第44図～第46図・図版16－３）

**位置・形状**　前記ＳＩ-011の南西に近接、N22－23区に位置する竪穴建物跡。ほぼ北－南方向に主軸方位を置く。平面形状はほぼ正方形。北辺7.3m、東辺7.4m、南辺7.5m、西辺7.3mを測り、検出面からの深さは0.3～0.5m。

**付帯施設・床面**　主柱穴は6カ所に検出されている。うちＰ２とＰ５は相対的に補助的なものであろう。それぞれの掘り込みの深さはＰ１が63cm、Ｐ２が53cm、Ｐ３が100cmで最も深く、Ｐ４が77cm、Ｐ５が49cm、Ｐ６が90cmである。他にＰ７からＰ12までの小ピットがあるが、性格は不明。それらは20cm弱から30cm強までの深さに掘りこまれている。南辺やや東寄りに検出されたＰ13を入口ピットと考える。床面からの深度は39cm。南東コーナーには91cm×89cmの隅丸方形を呈する貯蔵穴があり、その深さは32cm。炉はＰ１とＰ６の間やや東寄り、入口ピットと正対する位置にあり、深さ10cm弱の浅い窪みを呈する地床炉である。壁周溝は全周する。

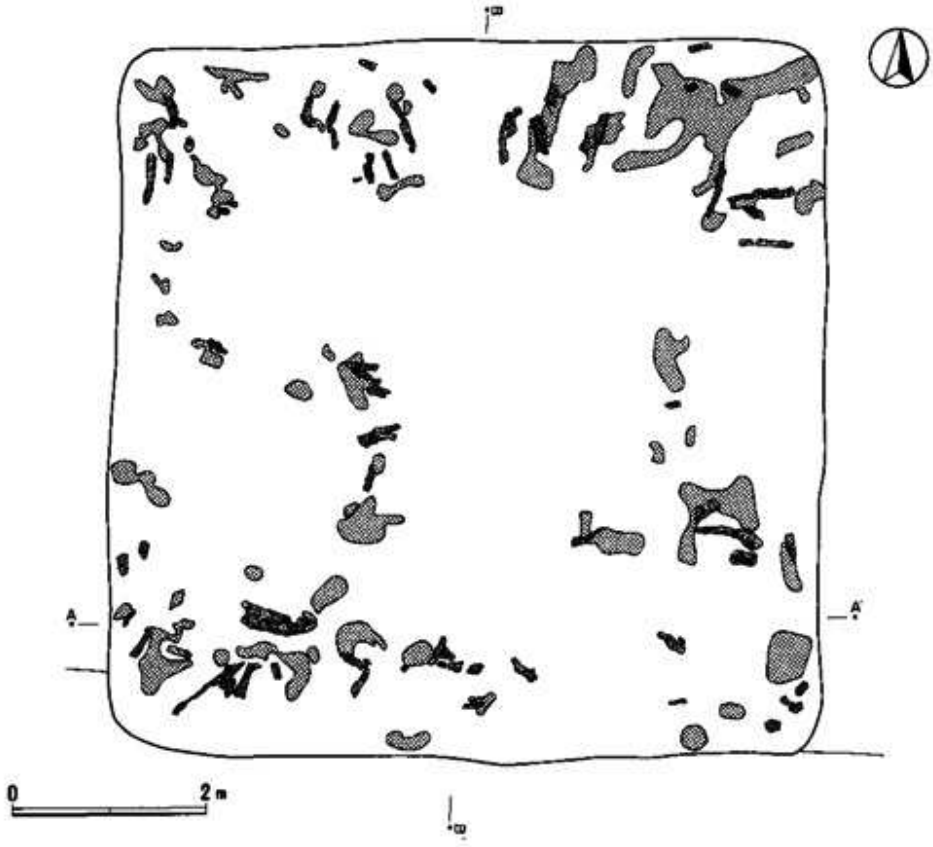
踏み締め等による硬化面は概ね柱間内に分布し、主軸方向に、具体的には入口施設の周囲と炉の奥に延びるが、むしろ床面中央に軟質な部分が広がるのはいかなる理由からであろうか。

**遺物等出土状況**　土器片を主体に150点あまりの遺物が出土しているが、分布密度は南東コーナーが最も濃密で、北西コーナーに向かうに従って希薄になる。遺物の投棄方向を示す可能性がある。当遺構からは焼土ブロックや炭化材は検出されていない。




第44図　SI－014（1/80）

**出土遺物**　1～6は甕形土器である。完形の土器はない。1、2、5は口縁部を含む破片であるが、うち1は口頸部が直線的に開くもの、2、5は外反しながら開くもので、胴部はいずれも球形に近いものであろう。3、4、6は底部を含む破片である。7はおそらく鉢形土器の底部であろうが、断定はできない。8～16は坏形土器である。うち8～14の内外面に赤彩が見られる。8～10は口頸部が屈曲して開くものでいずれも丸底である。外面の頸胴部界の稜が明確なのは8のみ。11、12、14は器体がゆるやかなカーヴを描いてほぼ直立気味になったところで終わるもので、12は丁寧ななでにより端部が薄くなる。11は凹底気味、12は小さな平底を持つ。13、16は口縁部が内弯するもので、13は丸底である。15は他の土器とは異なる緻密で砂粒をあまり含まない胎土で、きわめて堅緻に焼成され、きわめて丁寧な研磨が施されている。また内面は暗文状の磨きが施される。この土器については他の土器との時期差が問題となり、当




第45図　SI－014炭化材・焼土ブロック検出状況（1/80）

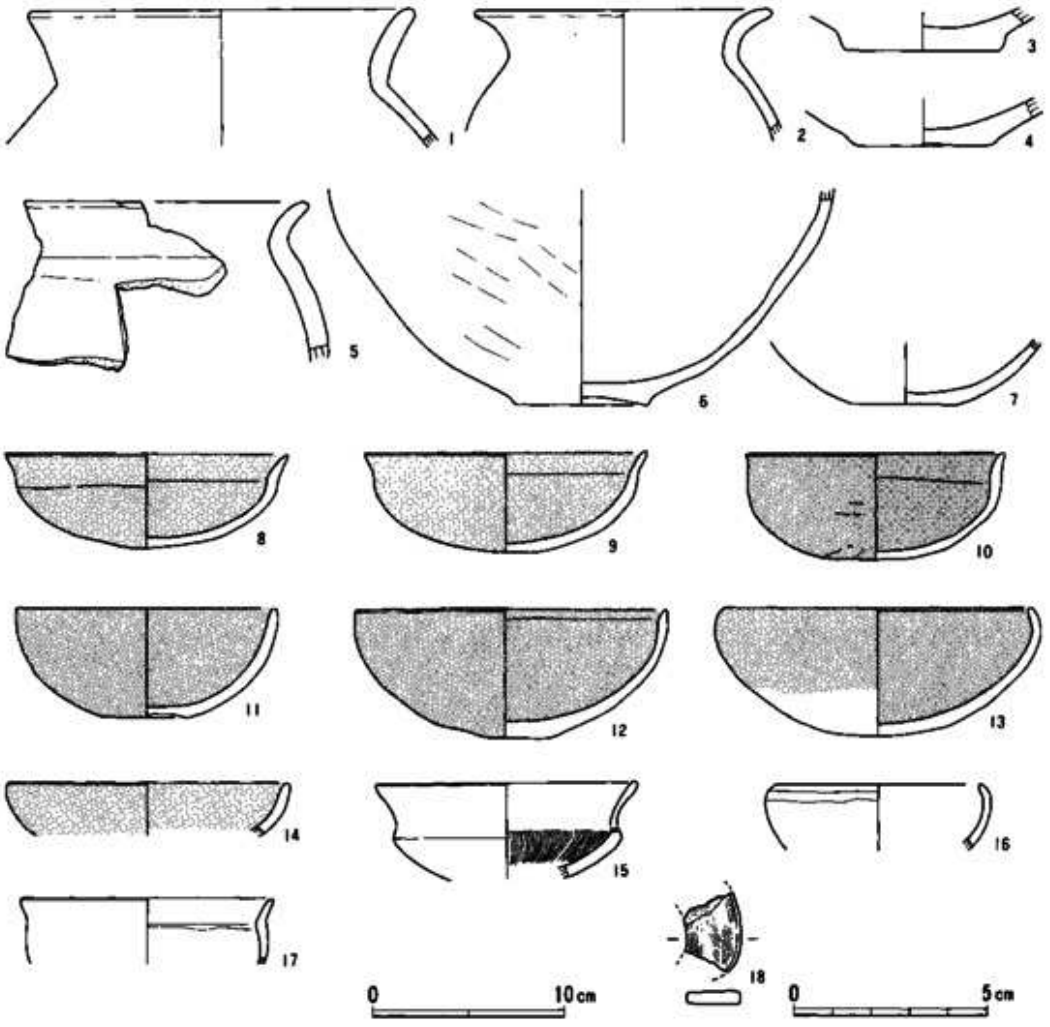
遺構への混入の可能性を考えているが、いずれにしても搬入品（北関東か？）であることは間違いないであろう。17は椀形土器とする。短い口頸部を屈曲させるもので、内面の稜が明確である。18は石製模造品の破片。滑石製勾玉であろうか。

## 12　ＳＩ－015B（第47図～第50図・図版17－１）

**位置・形状**　古墳時代の遺構群の西端、N22－12区に位置する竪穴建物跡。北々西－南々東方向に主軸方位を置く。平面形状は若干歪みを伴う正方形を呈し、北辺4.6m、東辺4.5m、南辺4.8m、西辺4.7mを測る。検出面からの深さは0.3～0.4mであった。

**重複関係**　ほぼ同程度の規模の竪穴建物跡ＳＩ－015Aと重複する。遺構の深さは当建物跡の方が深いが、新旧関係は当建物跡が古。

**付帯施設・床面**　主柱穴と推定されるものはＰ１～Ｐ４の４ケ所にある。概ね正方形配列で遺構全体の比率から言えばやや内側に寄る。掘り込みはあまり深くなく、Ｐ１は28cm、Ｐ２は33cm、Ｐ３は31cm、Ｐ４は24cmを測る。Ｐ５、Ｐ７の二つの小ピットは非常に浅いもので性格不明。Ｐ６は西壁に斜めに掘り込まれ、床面から35cmの深さを有する。カマドは北辺中央に設



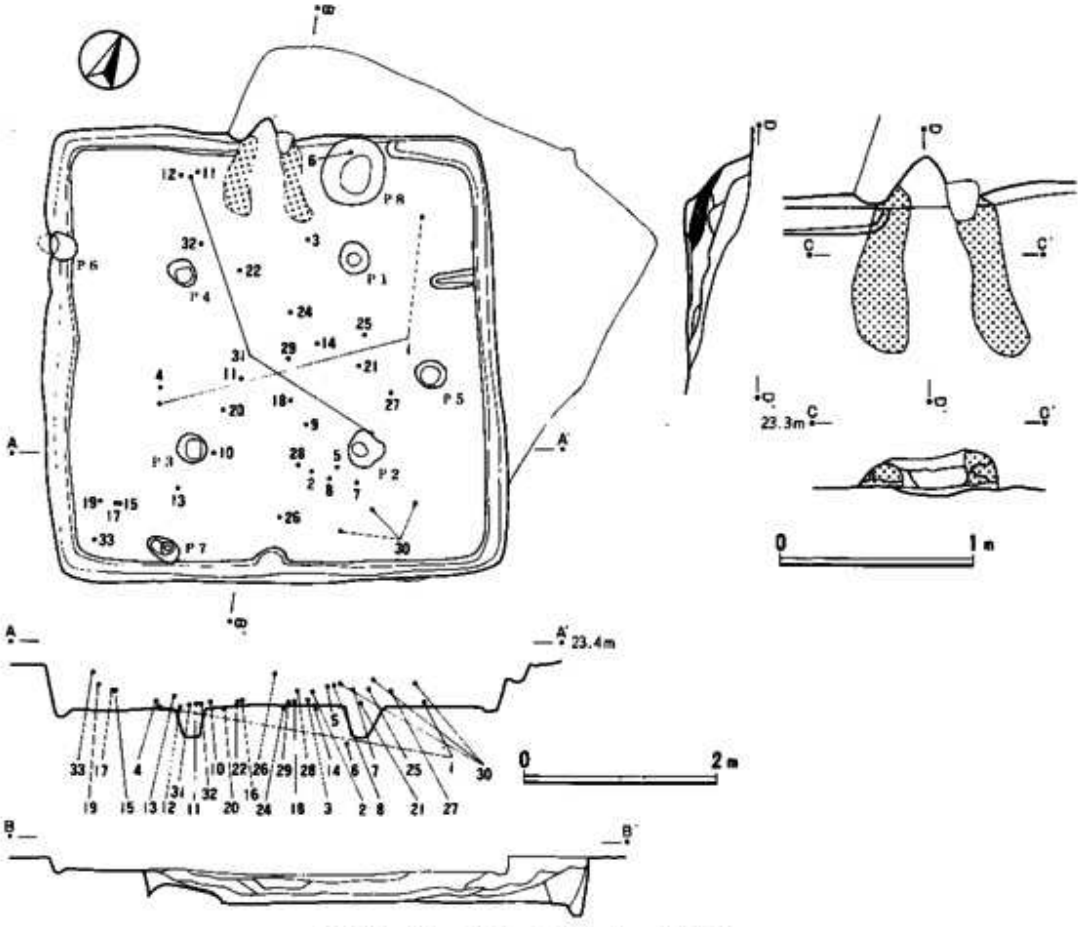

第46図　SI－014出土遺物（1/4・18のみ1/2）

けられる。谷分類による$B_2$類に相当する。カマドのすぐ右脇にあるP8は位置、形状から考えて貯蔵穴とすべきものであろう。73cm×65cmの隅丸方形で、45cmの深さを持ち、その周囲は床面がやや低くなっている。壁周溝は概ね全周するが、カマド下から貯蔵穴にかけては途切れている。また東辺やや北寄りの周溝から内側に向かって短い溝が伸びるが、いかなる性格のものであろうか。

当建物跡では、踏み締め等による床面の顕著な硬度変化は観察されていない。

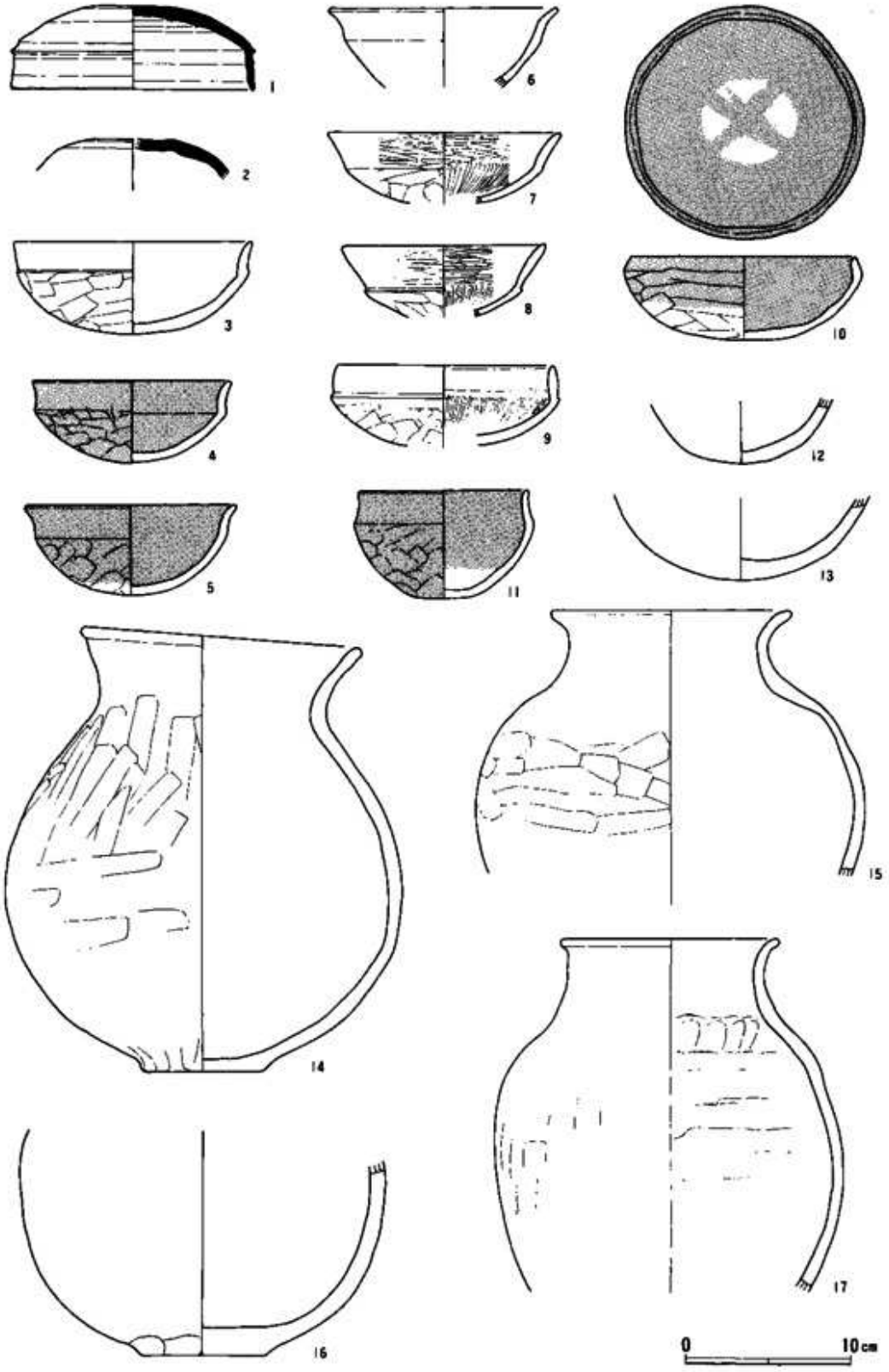
**遺物等出土状況**　80点余の土器が出土している。とくに集中分布等の特徴的な傾向は見いだせない。しかし点数そのものは少なくとも、完形、準完形で、覆土下位から床面上で出土した遺物が多いのが特徴で、結果的に遺物量は他遺構よりもむしろ多いと言えるかもしれない。

**出土遺物**　1、2は須恵器の坏蓋である。1は口径14.6cmとやや大ぶりなもので、外面に非常にシャープな稜を持つ。口端の形状は、明瞭な面取りがなされず、滑らかに端部に向かって

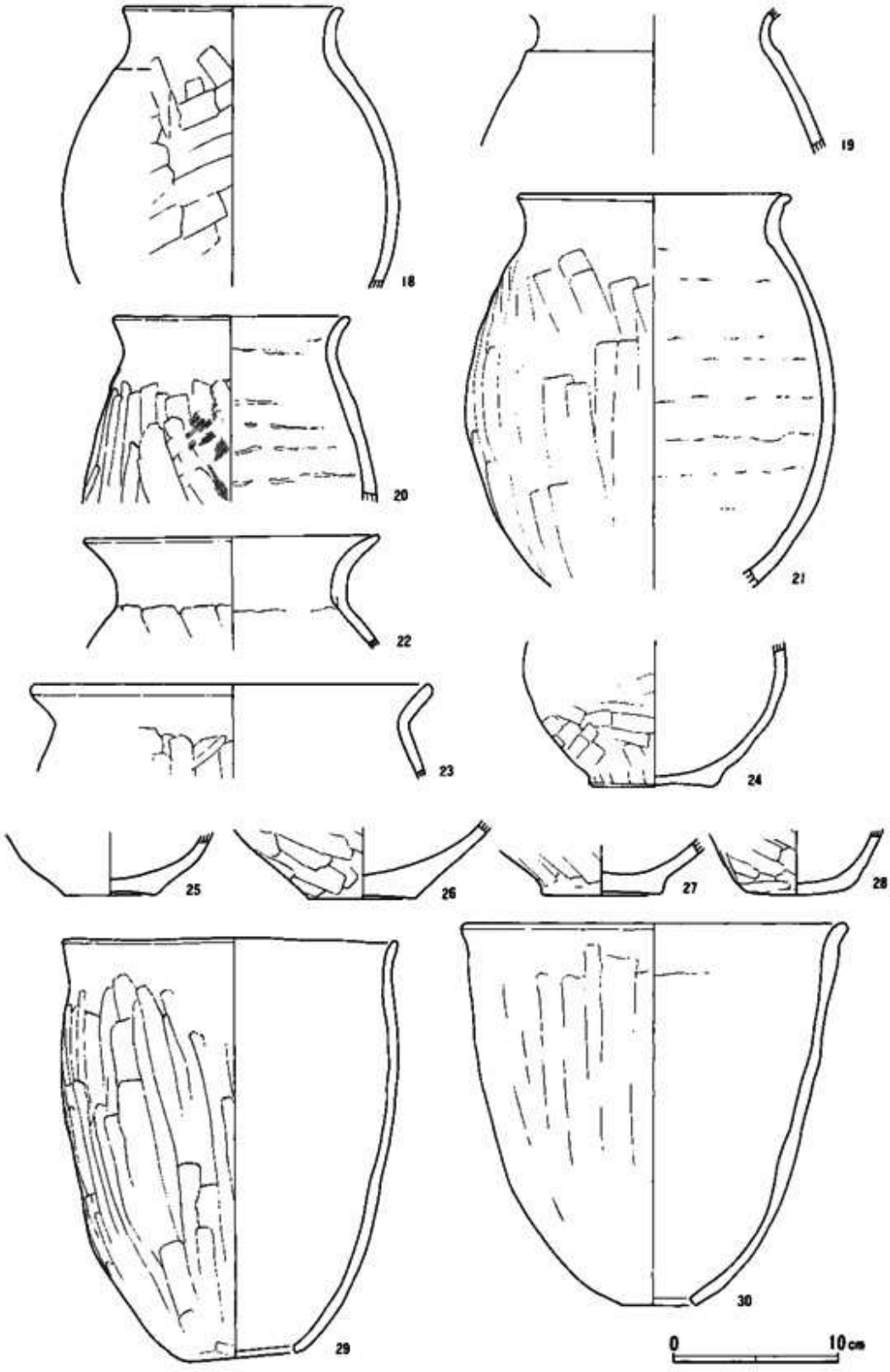



第47図　SI－015B（1/80・カマド1/40）

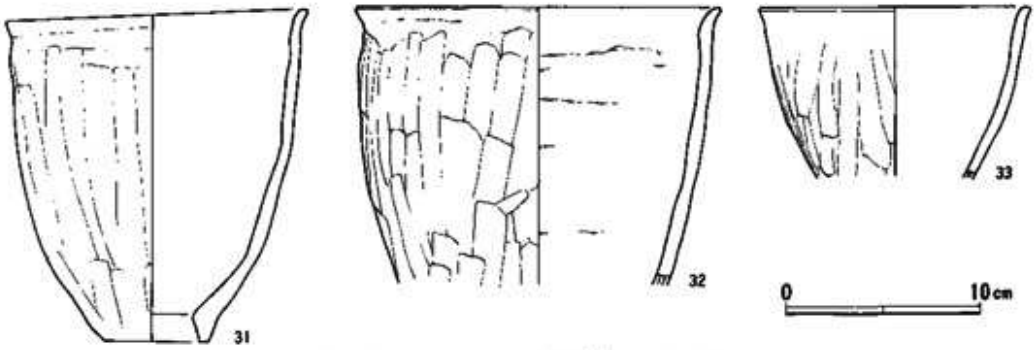
薄くなる。3～10は土師器坏形土器を集めた。いずれも頸胴部界に明瞭な稜を有し、底部は、遺存しないものも含めてすべて丸底であろう。3、4は口頸部が緩やかに外反するものの、比較的直立に近い例である。4の内外面には赤彩が施されている。5、6は前記2個体より外反の度合いが大きいもので、5は4と同様赤彩される。3～6の口頸部形状は明瞭に分類すべきものではなく、あくまで漸移的な現象であろう。7、8は前者よりもさらに口頸部が長く大きく開く例であるが、口頸部はきわめて丁寧に横位研磨され、内面下位は放射状の磨きが施される。9は放射状の磨きが施される点は前二者と共通であるが、口頸部は直立、寧ろ僅かに内傾している。10は短い口頸部が内傾するもので、内外面赤彩である。底部内面には赤色顔料による「×」状の記号（？）が描かれている。11は椀形土器とするが、口径に対して器高が高いというだけで、基本的に坏形土器と大きな相違はない。これも内外面が赤彩されている。12、13は椀形土器の底部であろう。14～28は甕形土器である。14～16は球胴状をなすと言ってもよいであろうが、14などは肩の張りがないため、最大径がかなり下位にくる。17～21は長胴気味の甕形土器である。17は口頸部が長い特徴的な器形を有する。また18、19は頸胴部界の稜がはっ




第48図　SI－015B出土遺物 1 (1/4)




第49図　SI－015B出土遺物 2 (1/4)

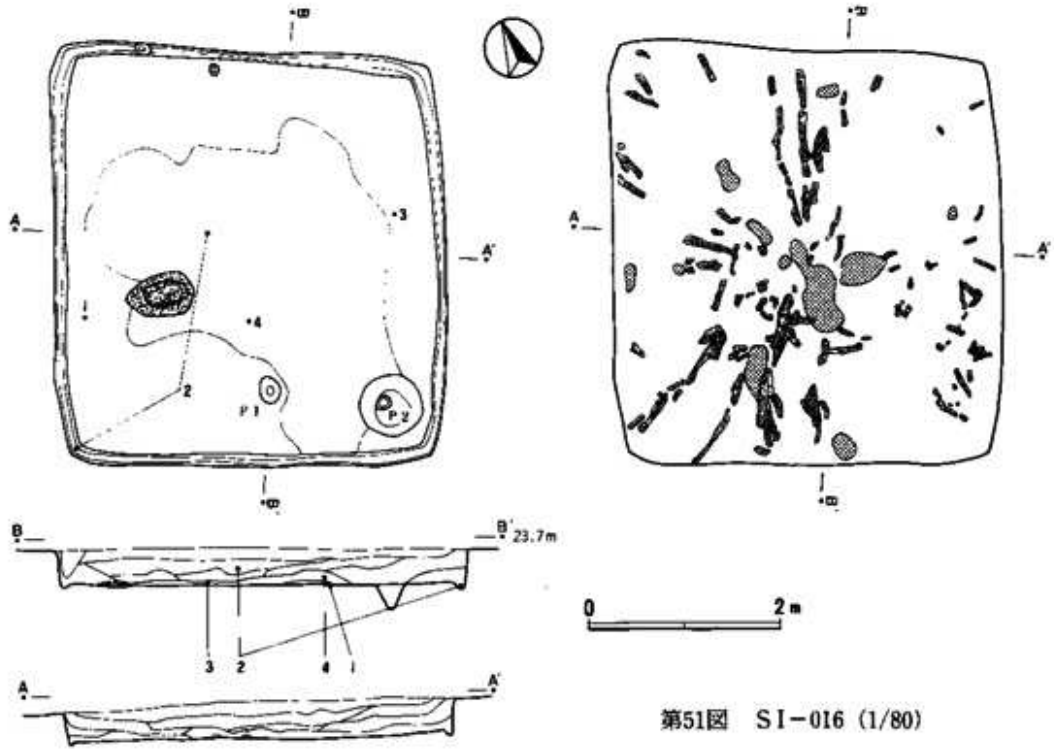



第50図　ＳＩ－015Ｂ出土遺物 3 (1/4)

きりしている。なお20の外面の一部には刷毛目状条痕が残っている。22、23には口縁部破片、24～28には底部破片を集めた。29～33は甑形土器である。とりたてて特徴を述べる必要はないであろうが、29、30のような大型の器種と、31、33のような小型の器種が存在する点が興味深い。

## 13　ＳＩ－016（第51図・第52図・図版17－２）

**位置・形状**　古墳時代の遺構群の北端、N22－09区に位置する竪穴建物跡。北々東－南々西方向に主軸方位を置くものと思われる。平面形状は僅かに南北に長いが、正方形に近く、北辺4.1m、東辺4.2m、南辺4.0m、西辺4.4mを測る。検出面からの深さは0.3～0.4mであった。

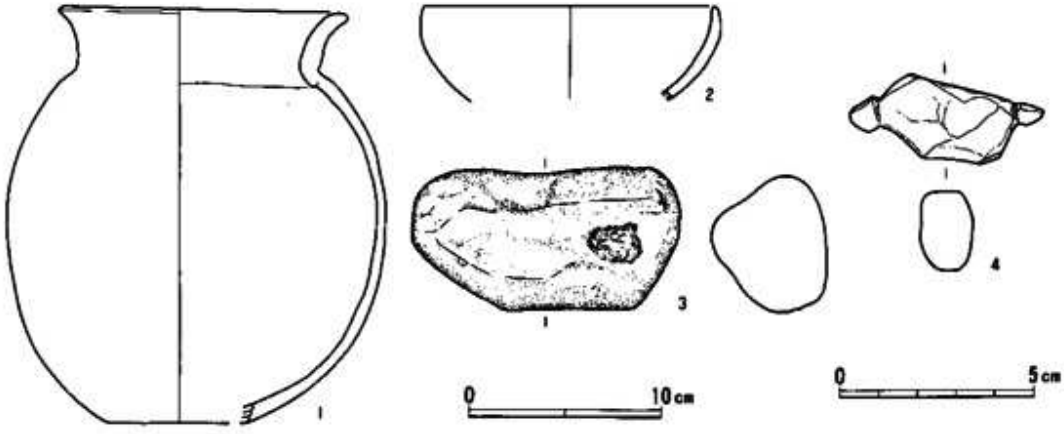



第51図　ＳＩ－016 (1/80)

**付帯施設・床面**　主柱穴と考えられる施設は検出されていない。南辺中央僅かに東寄りで小ピットＰ１が検出されているが、断定はできないもののここでは入口ピットとしておきたい。床面からの深さは23cmである。南東コーナーにはほぼ円形を呈するＰ２があり、貯蔵穴と推定される。平面規模は65cm×63cmで、床面からの深さは26cmを測る。炉は床面中央からかなり西に寄った位置にあり、ごく浅い窪みをなす地床炉であるが、これによって東辺側に入口施設が存在した可能性が捨て切れない。壁周溝は全周する。

床面の硬度変化は、中央付近で顕著に踏み締められており、さらに硬質部分はＰ１とＰ２の間に延びているのが観察された。

**遺物等出土状況**　遺物点数は乏しく、分布も疎らで、偏在傾向は指摘できない。しかし当建物跡では焼土ブロック及び炭化材が豊富に検出されており、とくに炭化材は放射状の分布を示したため、主として屋根材の崩落である可能性が強い。




第52図　ＳＩ－016出土遺物（1/4・４のみ1/2）

**出土遺物**　１は甕形土器で、球胴状を呈し、口縁部は外反しながら開くもの。２は坏形土器である。とくに稜を持たず、緩やかに湾曲して口端がほぼ直立したところで終わる。３は砂岩製の礫で、何らかの台石として用いられた可能性を持つ。４は頁岩製の性格不明石製品。両端のくびれは明らかに意図的な加工を加えられたもので、人形あるいは何らかの動物を意匠するものの未製品であろうか。

## 14　小結

以上報告した12棟の古墳時代の竪穴建物群について、その存続期間等を冒頭に述べておいたが、ここで再び、時期を追って遺構群の形成過程をまとめておきたい。

カマドを持たない竪穴建物４棟（ＳＩ-011を含む）は既に触れたように５世紀の所産であるが、５世紀でも前半に溯る遺物を出土した建物跡はなく、５世紀後半にあまり時間差を持たず

に営まれたものであると思われる。竪穴建物の形態上の分類[5]ではＥＳ型２棟、ＥＯ型２棟ということになるが、ここのＥＯ型は主軸（入口方向）に対してかなり横長の形状を持ち、一般的な居住機能優先の建物とは性格を異にしている可能性もある。筆者はＳＩ-011のようなカマド状施設を設ける５世紀段階の竪穴建物について、複数の調査を行った[6]経験があるが、いずれもきわめて小型のもので滑石製臼玉等の遺物が特徴的に出土した。当地蔵山遺跡でもＳＩ-009、ＳＩ-011いずれからも滑石製模造品が出土するなどの共通項があり、特殊な性格を有した建物であった可能性も考慮しておくべきであろう。

５世紀の遺物を出土した竪穴建物には他にカマドが設置されたＳＩ-003、ＳＩ-013がある。おそらく前記４棟の建物群に、さほど時間差を置かずに後続して営まれたものであろう。今日では旧上総地域においては５世紀中葉前後までカマド出現が溯ることが確認されているが、旧下総地域でも５世紀段階にカマドが出現していることは確実であろう。ただ現在のところ、下総は上総よりも出現時期が遅れているように思われる。この２棟の竪穴建物は、いずれもＣ型（ＳＩ-003については推定）に分類される。

以上の遺構群に後続するのが、ＳＩ-006、ＳＩ-012の２棟であろう。それらを６世紀初頭前後と考える。この２棟は須恵器模倣坏出現以前の可能性がある。建物の分類ではいずれもＦｉ型となる。同じくＦｉ型であるＳＩ-008は、やや時期が下るものであろう。ＳＩ－015Bは建物の構造上の分類では新しいタイプであるＦⅢ型であるが、坏の形態分化が進んでいるものの、１の須恵器を指標とすればあまり新しくは位置付けられず、６世紀前半のうちに収めるべきであろう。同じくＦⅢ型であるＳＩ-004については遺物が僅少なため時期判定は不能である。

最も新しく位置付けられるのはＳＩ-002である。ここでは床面から出土した３点の須恵器が指標になるが、それらから７世紀中葉の年代を与えておきたい。つまりこの建物だけは他の古墳時代の建物群とは隔絶した時期の所産ということになる。この建物は著しい長方形を呈し、やはり特殊な性格を想定してもよいかも知れない。

以上今回報告した古墳時代の遺構群についてまとめたが、地蔵山遺跡にはさらに多数の同時代の遺構があり、詳細な分析はそれが報告された後に行いたい。

註１　周知のように、カマドは入口の脇か入口の対辺に位置し、貯蔵穴は入口脇のコーナーかカマド側コーナーまたはカマド脇に設けられるのが通例であろう。

２　谷旬「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要７』（財）千葉県文化財センター　1982

３　ベッド状施設の根太の痕跡であるとする意見がある。

４　渡辺修一「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌11』（財）千葉県文化財センター　1985

５　前掲註４

６　市原市ナキノ台遺跡（未報告）において３棟の小型建物跡を調査したが、うち２棟からカマド状施設を検出。他の１棟からは壁に接したカマドを検出したが、とくに煙道を切り込んで設けてはいなかった。しかしこれらの施設については、本来煙道を設置してあったはずだとする意見がある。筆者は時期的に合致するも

のが多いことや、煙道を設けるにはきわめて不合理な位置に構築されていることなどから、ある時期を中心に、カマドとしての機能を完備しないかかる簡便な施設が存在した可能性を考えている。

地蔵山遺跡から荒久古墳を望む

# Ⅶ 古　　代

## 1　梗概

古代、いわゆる奈良時代から平安時代にかけての遺構は、竪穴建物跡1棟と、古墳4基、火葬墓1基が検出されている。B区（遺跡南半部）においても竪穴建物跡4棟と古墳1基、土壙墓、火葬墓が検出されているが、とくに墳墓群について見れば、A区の一群のすぐ南側が主要地方道千葉・大網線によって削られ、また民家が現存する調査区域外であるため、遺構群の分布が十分に把握されないのが惜しまれる。以下、各遺構毎に詳細を記述する。

## 2　ＳＩ－015Ａ（第53図～第54図・図版17－３）

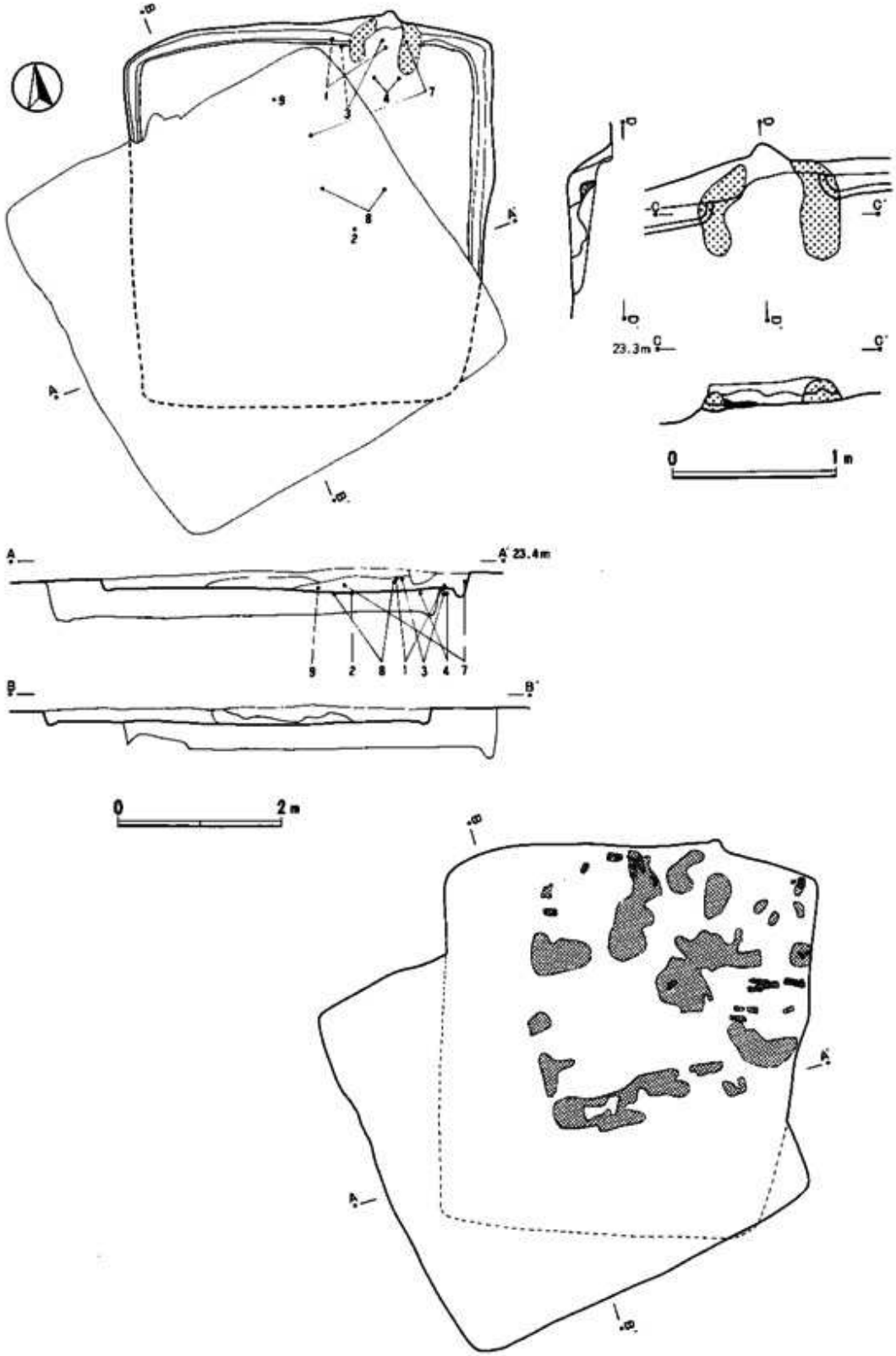
**位置・形状**　調査区の西端近く、N22－12区に位置する竪穴建物跡。ほぼ北－南方向に主軸方位を置くと思われるが、入口施設の位置が特定できないため明断できない。概ね正方形に近い形状を示すものであろうが、ＳＩ-015Ｂとの重複部分が明確ではない。北辺の長さは4.6mを測り、検出面からの深さは0.1～0.3mであった。

**重複関係**　古墳時代の竪穴建物跡ＳＩ-015Ｂと重複し、当然ながら当建物の方が新。しかし調査時には、遺構検出段階において新旧関係を誤認したため、深いＳＩ－015Ｂまで一気に掘り進めた。したがって遺構の形状が明瞭に把握されず、遺物の帰属に混乱が生じてしまった。今回報告するにあたって、遺物の出土レベルを考慮したうえで整理を行っている。

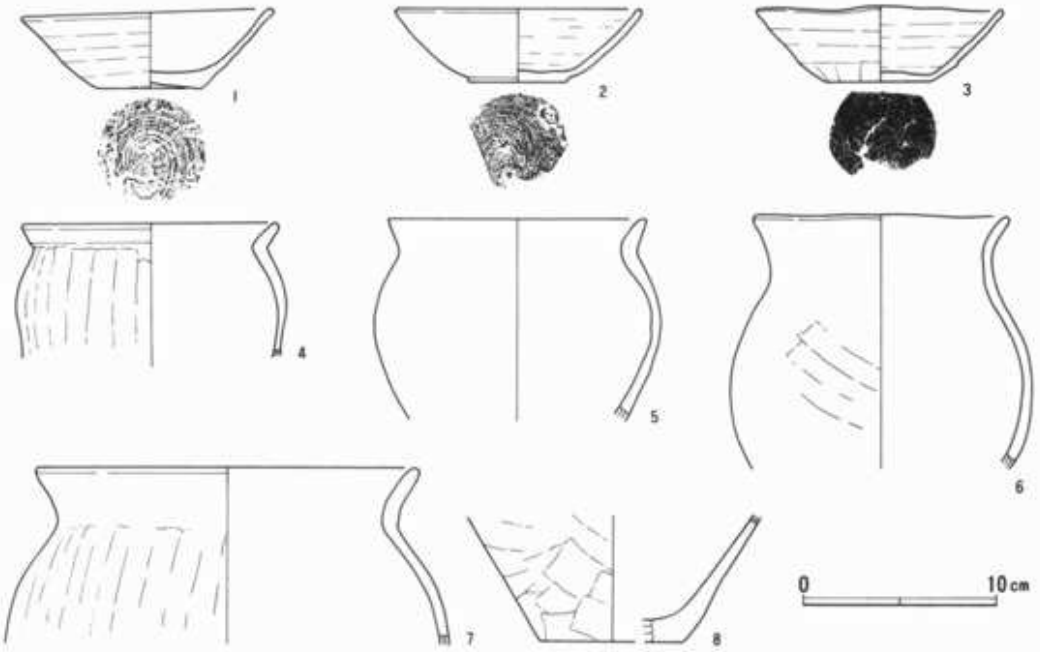
**付帯施設**　柱穴他のピットは全く検出されていない。カマドは北辺の、東に偏在した位置に設けられている。谷分類の$B_2$類に相当しようか。火床は平坦で灰の堆積が見られる。壁周溝は調査部分においては全周している。おそらく本来全体に巡っていたものであろう。

**遺物等出土状況**　全体として遺物量は少ない。分布は、カマド周辺から床面中央にかけて出土したものが多かったが、極端な偏在傾向は認められなかった。炭化材、焼土等は検出されていない。

**出土遺物**　１～３は坏である。いずれも調整にロクロを用いるもので、口径に対する底径が小さい。１は底部に回転糸切痕を残すもので、体部の開き方は直線的で、口端が肥厚する。この個体の内外面には炭素吸着が観察され、炭化物の付着も認められる。この土器の本来的な使用によるものか、二次的なものなのかは判断できない。２も底部に回転糸切痕を残すものであるが、底部が削り出しによって若干突出する。体部はわずかに湾曲しながら開く。３は底部に篦削り痕、また体部の下位も手持ち篦削り痕を残すもので、中位以上がロクロ調整を施されている。４～８は甕である。４は頸部に強いなでによる凹線状の窪みが認められる。体部の調整は縦位の篦削りによるが、６のみは斜位の篦削りを用いている。なお甕にはどの個体にも二次




第53図　SI－015A（1/80・カマド1/40）




第54図　ＳＩ－015Ａ出土遺物（1/4）

的な被熱痕が観察される。

## 3　ＳＸ－001（第55図・図版30－２）

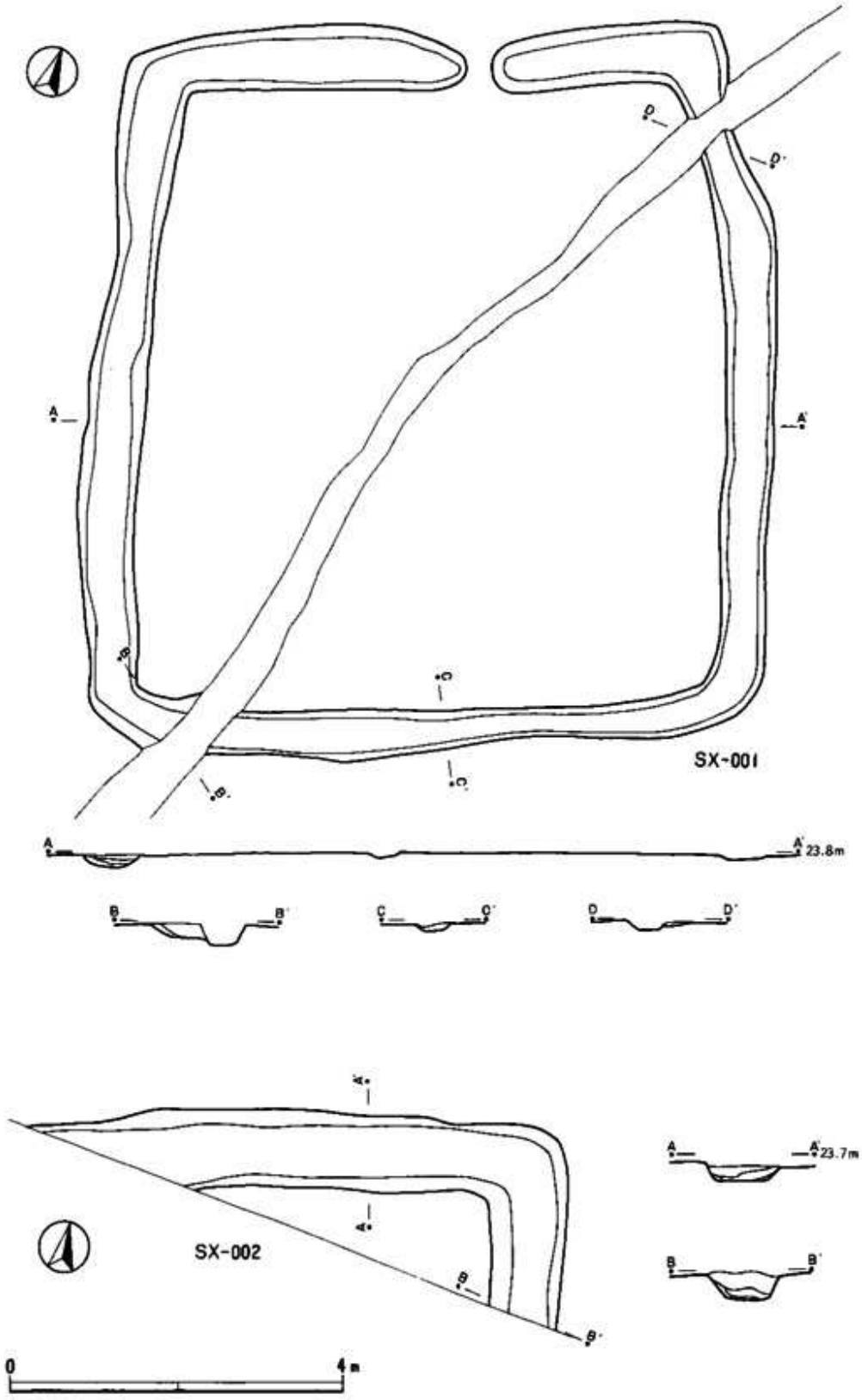
**位置・形状**　調査区の中央のやや東寄り、O22－12・16・17区に跨がって位置する方墳である。周溝のみしか遺存しない。各辺は東西南北を示さず、南北を基準にすれば、北々西－南々東方向を向いている。本来は正方形に規格されたものであろうが、若干南北に長く、また各辺とも歪みが大きい。また北辺中央で周溝が途切れる。周溝外縁で北辺7.7m、東辺8.4m、南辺8.1m、西辺8.5m、周溝内縁で北辺6.4m、東辺7.1m、南辺6.9m、西辺7.1mを測る。遺存度は非常に悪く、検出面からの周溝の深さは最大で12cmであった。北辺の途切れは遺存度の影響によるものであろう。

**重複関係**　遺構の中心をＳＤ-003が貫き、周溝も切られている。当墳の方が古。

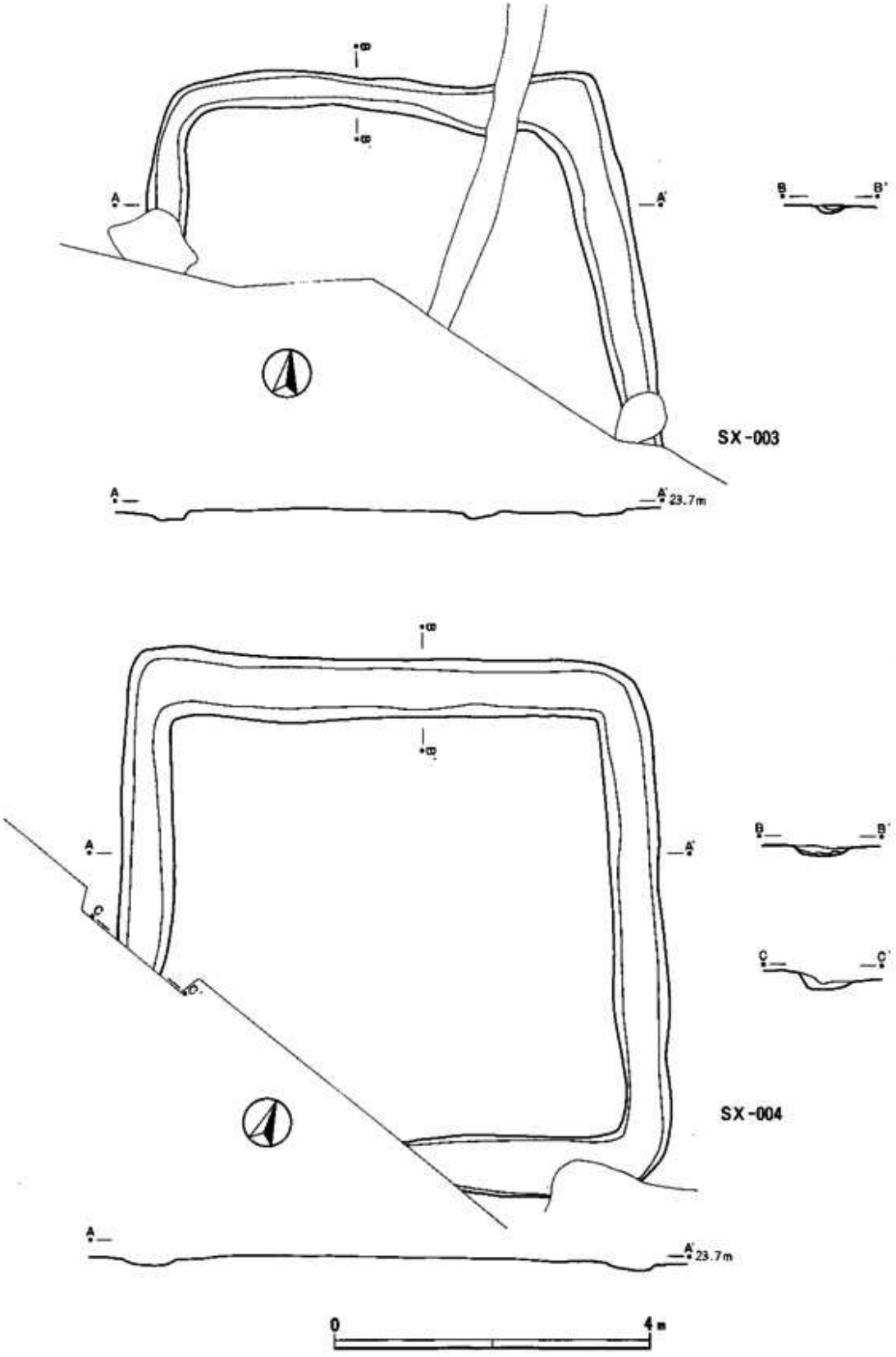
**遺物等出土状況**　周溝内から土器片が１点だけ出土したが、小片で、遺構の時期判定に資するものではなかった。

## 4　ＳＸ－002（第55図・図版30－３）

**位置・形状**　調査区の南縁、O23－07区に位置する方墳である。周溝のみしか遺存せず、しかも南側は主要地方道千葉・大網線によって削られているため、一部分の調査に終わった。遺構の方位はＳＸ-001とほぼ同様である。全体の形状、規模は北辺すら全体を把握していないた




第55図　ＳＸ－001・ＳＸ－002 (1/80)




第56図　ＳＸ－003・ＳＸ－004（1/80）

め不明である。遺存部分の周溝の幅は0.8～1.0m、検出面からの深さは0.2～0.3mを測る。

**遺物等出土状況**　周溝内より甕形土器と思われる土器小片が十数片出土しているが、器形が復元されるものはなく、時期判定に資するものではなかった。

### 5　ＳＸ－003（第56図・図版31－１）

**位置・形状**　調査区の南縁、前記ＳＸ-002に隣接するＯ23－06区に位置する方墳である。当墳もまた南側を道路によって削られているため、北半部の調査しかできなかった。各辺の方位はＳＸ-001、ＳＸ-002とほぼ同様である。全体の形状については南半部を調査していないため不詳であるが、調査部分ではかなり歪な方形を呈する。北辺の長さは周溝外縁で5.4mを測るが、東辺と西辺は南に向かって開いており、西辺南端から測った東西長は6.1mである。そこから推せば南辺長はかなり大きく、6.5m前後になると思われる。当墳も周溝の遺存度が悪く、検出面からの深さは最大でも11cmであった。

**重複関係**　溝状遺構ＳＤ-003と重複する。新旧関係は当墳のほうが古。

**遺物等出土状況**　甕形土器と思われる土器小片が僅か２点出土しているが、やはり時期判定に資するものではなかった。

### 6　ＳＸ－004（第56図・図版31－２）

**位置・形状**　調査区の南縁、ＳＸ-002、ＳＸ-003と並ぶように位置した方墳で、N23－04・05・09・10区に跨がる。各辺の方位は他の方墳とほぼ同様である。当墳でも南西コーナー付近が道路によって削られているため調査できなかった。地蔵山遺跡Ａ区中最も整った形状を持つ方墳でほぼ正方形に近いが、西辺の遺存部を見る限り、南側がやや広がる可能性がある。周溝外縁では北辺、東辺とも6.6m、周溝内縁で北辺5.4m、東辺5.2mを測る。周溝の遺存度は悪く、検出面からの深さは最大で12cmである。

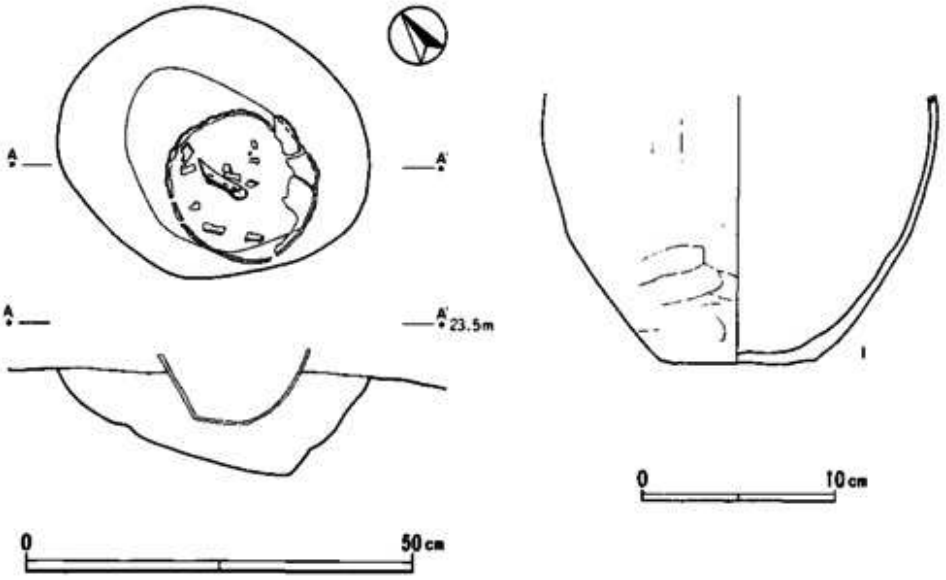
**重複関係**　南東コーナーで竪穴建物跡ＳＩ-003と重複する。当墳の方が新。

**遺物等出土状況**　遺物は全く出土しなかった。

### 7　ＳＫ－015（第57図・図版31－３）

**位置・形状**　調査区の北縁近く、Ｏ22－13区に位置する火葬墓である。方墳ＳＸ-001からは北西方約14mの距離になる。墓壙は楕円形を呈し、長径41cm、短径36cmを測る。壙底は平坦ではない。検出面からの最深は16cm。

**蔵骨器**　おそらく表土除去の段階で上半部を欠失したが、土師器甕である。遺存部の最大径20.4cm、底径8.0cmで、胴部中位は縦位の篦削り、下位は斜位から横位の篦削りで整形されたうえになでを施している。全体として薄くつくられており、器面には輪積の痕跡であるうねりを




第57図　ＳＫ－015（1/10）・出土遺物（1/4）

残す。器内には火葬骨片が遺存したが、骨片は小片で、部位も判断しがたいため、分析・鑑定等は実施していない。

## 8　小結

明確に古代の所産と考えられるは上記６遺構であるが、それらの中でさらに細かい時期比定が可能なのは竪穴建物跡ＳＩ-015Ａのみである。ここでは３点の坏がその指標となるが、それらの特徴から９世紀第３四半期の所産としておきたい。墳墓群については火葬墓から蔵骨器となった甕が出土しているが、上半を遺存しないため時期比定は困難である。おそらく８世紀の後葉から９世紀のものであろうとしか言及できない。方墳群からは遺物が殆ど出土せず、埋葬主体すら検出されていないため、現時点では全く分析の対象にならないが、火葬墓と一体の墓域を構成していたものと思われる。これらと連関する墳墓群は地蔵山遺跡Ｂ区でも検出されており、近い将来報告される予定であるので、それを待って分析を行うべきであろう。

# Ⅷ　時期・性格不明の遺構

## 1　概概

今回報告する地蔵山遺跡A区では、時期や性格が明確ではない土坑が10基、溝状遺構が５条検出されている。土坑については、遺跡内に縄文時代早期の炉穴群を伴う遺物包含層があり、ここで報告する遺構の一部に同時期のものが含まれている可能性は充分であるが、時期比定の材料が乏しいものはすべて一括することにする。

## 2　土坑

ＳＫ-001（第58図・図版32－１）　O22－08区に位置する、不整形、敢えて言えば涙滴状の形状を持つ土坑。長軸は北西－南東方向を指し、6.3m、最大幅2.8mを測る。北東に向かって強く傾斜する地点に営まれているため、計測地点によって深度に大きな差があるが、幅の広い部分の最深が1.55m。壁面の傾斜は強く、直線的で、断面は逆台形乃至「コ」字形を呈し、底面は概ね平坦である。南東側幅広部分の中央と北西寄りの２ケ所に焼土ブロックが検出された。南東側のものは約30cm、北西側のものは約５cm底面から浮いていた。底面は全く焼けておらず、また焼土ブロック下から少量の炭化物が検出された。遺物としては８点の土師器片が出土しているが、小片のため時期不詳。

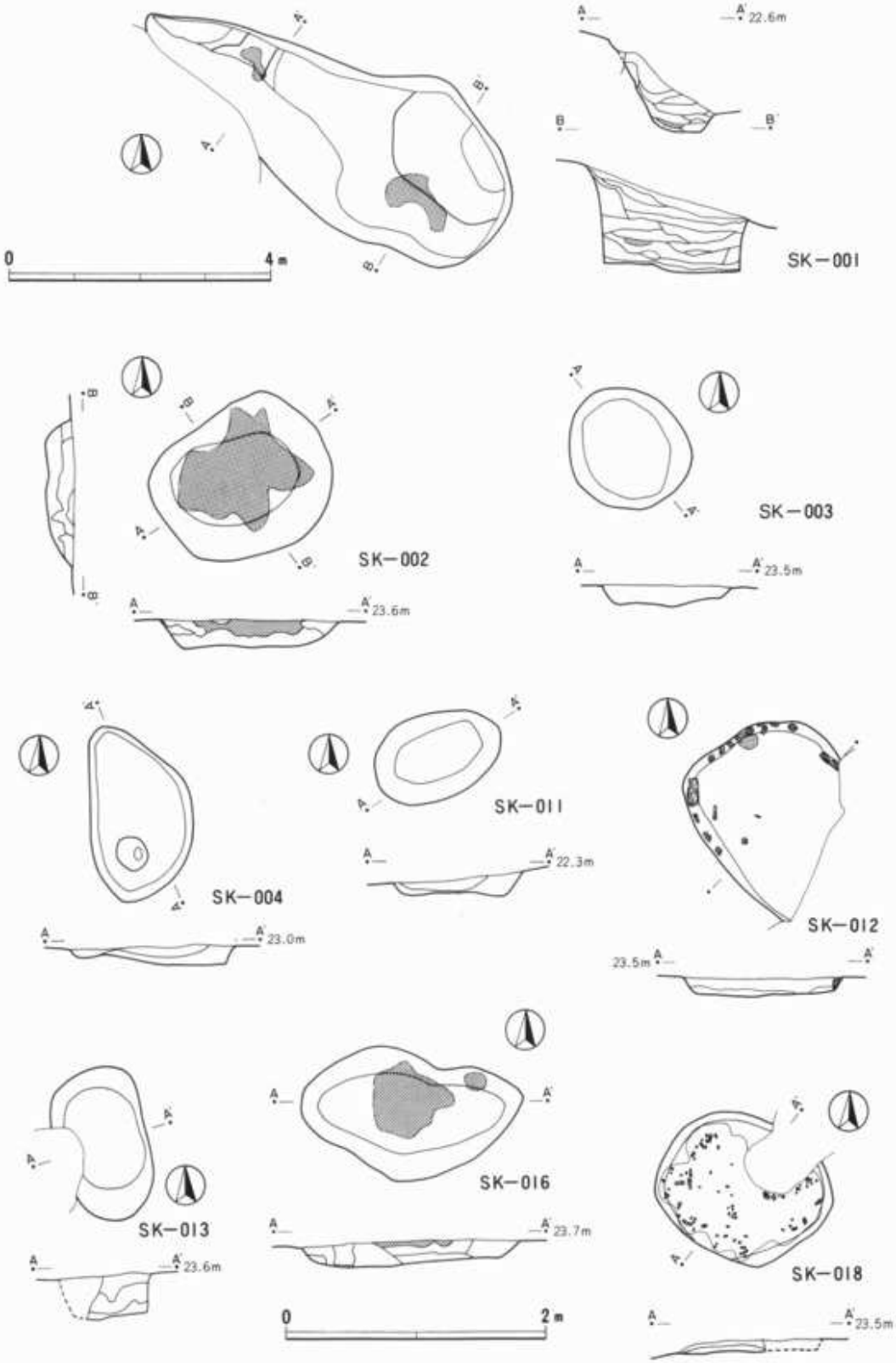
ＳＫ-002（第58図）　N22－13区から14区にかけて所在した不整楕円形の土坑。長軸長1.36m、短軸長1.16mを測る。掘り込みは浅い皿状で、底面は比較的平坦、検出面からの深さは21cmであった。底面から10cm前後浮いて広く焼土ブロックが検出されたが、底面が焼けた痕跡は認められなかった。出土遺物は土器小片２点のみ。

ＳＫ-003（第58図・図版32－２）　N22－08区に位置する楕円形の土坑である。長軸長0.95m、短軸長0.88mを測り、検出面からの深さは９～14cm。浅い皿状を呈する。遺物等は全く出土していない。

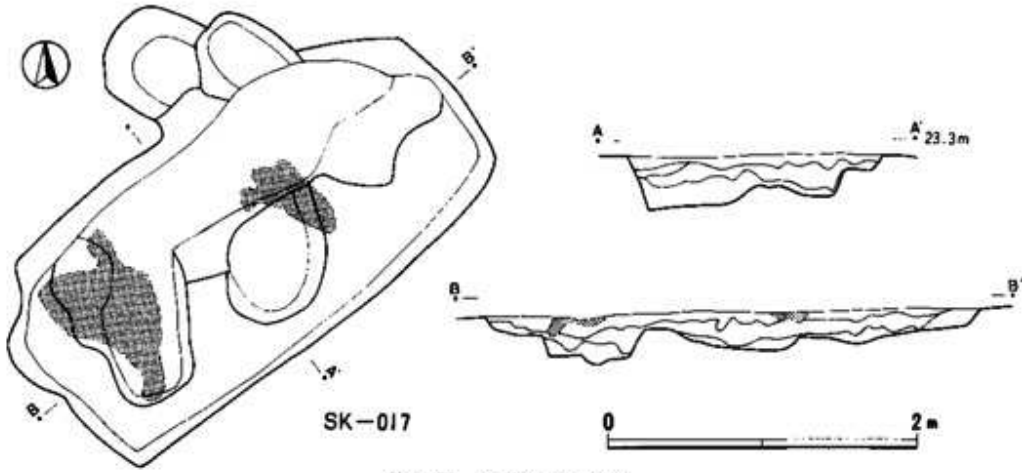
ＳＫ-004（第58図・図版32－３）　N22－01区に位置する不整楕円形の土坑。長軸長1.27m、短軸長0.78m、検出面からの深さは６～16cmを測る。やはり浅い皿状を呈するが、南寄りに性格不明の小ピットが穿たれ、その深さはおよそ15cm。遺物は小礫片が１点出土したのみである。

ＳＫ-011（第58図・図版32－４）　M22－01区に位置する楕円形の土坑である。長軸長1.01m、短軸長0.67mを測り、検出面からの深さは９～16cm。前三者と同様、浅い皿状を呈する。この遺構については、顕著な痕跡を残さないものの、覆土が質的にテフラに近く、焼土粒を多く含む点などから、縄文時代早期の炉穴であった可能性がある。遺物等は全く出土していない。

ＳＫ-012（第58図）　N22－19区から24区に位置する隅丸長方形の土坑と思われるが、南東




第58図　土坑１（1/50・ＳＫ−001のみ1/100）




第59図　土坑２（1/50）

側を近年の攪乱孔によって破壊されているため、全体の形状は不詳である。長軸方向の遺存長1.35m、短軸長1.20mを測る。やはり浅い皿状を呈し、底面は平坦で、検出面からの深さは13～16cmであった。周囲の壁際に密着して炭化材が検出され、また一部に焼土ブロックも伴っていた。底面には火熱を受けた痕跡は観察されない。出土遺物はない。

**ＳＫ-013**（第58図・図版32－５）　N23－10区に位置する楕円形の土坑である。西側の一部を近年の攪乱孔によって破壊されている。長軸長1.16m、短軸長0.70mを測る。壁面の傾斜は急で断面「コ」字形～逆台形を呈し、検出面からの深さは26～34cm。覆土には炭化粒が目立った。遺物等は全く出土していない。

**ＳＫ-014**　O22－07・08区に位置するもので土坑として記録されているが、形状、覆土等から明らかに倒木痕と判断されるため、ここでは省略する。

**ＳＫ-016**（第58図）　N22－09・10・14・15区に跨がって位置する不整楕円形の土坑である。長軸長1.70m、短軸長1.10mを測る。掘り込みは浅い皿状で、検出面からの深さは12～21cmであった。底面は比較的平坦で、底面から10～15cm浮いた状態で焼土ブロックが検出された。遺物等は全く出土しなかった。

**ＳＫ-017**（第59図・図版32－６）　N22－07区に位置するほぼ長方形の土坑である。長軸は北東－南西方向を指すが、北西辺側にあたかも２基の土坑が接するように掘り込みが延び、また底面の凹凸も複雑で、複数の土坑が重複したような形状をなしている。しかし覆土からは重複関係を示すような形跡は認められない。検出面からの深さは、最大で34cmを測る。この遺構においても、底面から10～25cm浮いて焼土ブロックが検出された。底面、壁面とも強い火熱を受けた痕跡は観察されない。遺物等は出土しなかった。

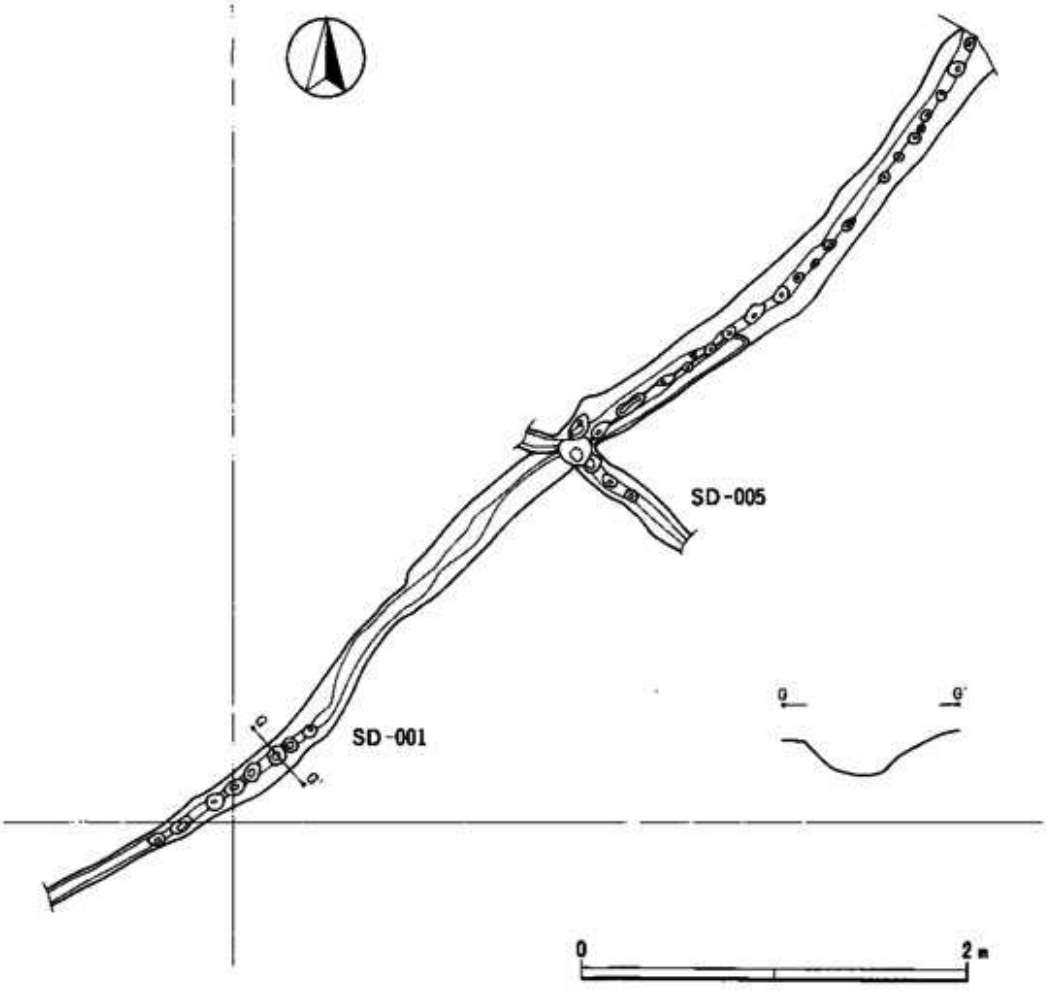
**ＳＫ-018**（第58図・図版32－７）　N22－22区・N23－02区に位置する楕円形の土坑である。北東側の一部を近年の攪乱孔によって破壊されている。長軸長1.37m、短軸長1.12mを測り、

第60図　SD－001・002・003・004 (1/400)・断面 (1/100)

検出面からの深さは最大で12cmであった。底面は概ね平坦で、底面直上に炭化材、炭化粒を層状に含んでいる。底面が火熱を受けた痕跡は認められなかった。遺物としては土器小片が2点出土したのみであった。

### 3　溝状遺構

**ＳＤ-001（第60図・第61図）**　今回報告する調査区全体を東西に走る溝状遺構であり、両端はさらに調査区外に延びている。竪穴建物跡などが多数検出された調査区と、その東側に間隔をおいて、溝状遺構のみを調査した調査区双方に検出されているが、ここで仮に前者を西区、後者を東区としておく。調査部分の総延長は西区135m、東区66mに及び、その幅はおよそ1.5m～2.4m。検出面からの深さは、地点によって遺存条件の差があるため、5cm～51cmと大きな幅がある。西区において数棟の竪穴建物跡と重複するが、そのすべてを切り、また西区東端近くでＳＤ-002と重複する。ＳＤ-002との新旧関係は当遺構が新。東区においてはＳＤ-005とほ




第61図　ＳＤ－001東区・ＳＤ－005（1/400），断面（1/100）

ぼ直角に交差するが、こちらでも新旧関係をはっきり把握していない。東区では部分的に杭列状の円孔を連続して穿つが、それらは径0.3～1.0m、深さは0.1～0.4mと浅い椀状のものである。なお西区ではかかる円孔は検出されていないが、ＳＤ-002との交差地点では土坑状の掘り込みが交錯している。覆土はとくに特徴的なものではなかったが、ごく一部、西区の西寄りで硬化面が観察されており、当遺構が道路として機能していた可能性は指摘できる。遺物としては縄文土器から近世陶器まで450点ほど出土しているが、勿論遺構の時期を判断する材料は皆無に近い。

**ＳＤ-002**（第60図）　Ｏ22－02区からＰ23－11区まで調査区を斜めに横断する溝状遺構である。両端はさらに調査区外に延びる。調査部分の総延長77m。途中でＳＤ-001と交差するが、その付近の状況は前記の通り。遺構の幅は北部で狭く、南部で広く、1.0～3.8mを測る。検出面からの深さも0.1～0.6mと地点によって大きな差がある。とくに付帯施設等は見られない。覆土についても特記すべき事項は観察されなかった。遺物としては土器片が少量出土したのみで、遺構の時期を示すようなものはなかった。

**ＳＤ-003**（第60図）　Ｏ22－08区でＳＤ-002と分岐して南々西に走る溝状遺構で、調査部分の総延長53m。途中ＳＸ-001、ＳＩ-004、ＳＸ-003と重複するが、それらのすべてを切る。また本来ＳＤ-001と交差するが、その地点の状況は把握されていない。この遺構の幅は狭く、0.2m～0.8mで、検出面からの深さも２cm～19cmと非常に浅いものであった。遺構自体についても覆土についても特記事項はない。出土遺物は土器片１点のみ。

**ＳＤ-004**（第60図）　調査区の西寄りをＮ22－09区からＮ22－18区まで検出された溝状遺構である。総延長36mで、両端はさらに延びていたものと思われるが、確認されなかった。ＳＩ-014、ＳＩ-016の２棟の竪穴建物跡を切る。幅は0.3m～0.6mと狭く、検出面からの深さも２cm～18cmと浅い。特記事項はない。遺物も皆無であった。

**ＳＤ-005**（第61図）　ＳＤ-001東区において、ＳＤ-001と直交して検出された溝状遺構である。調査部分の総延長は約10mで、両端はさらに調査区外に延びる。ＳＤ-001との新旧関係は前記の通り不詳。幅は1.0～1.5m、検出面からの深さは0.2～0.4mを測る。ＳＤ-001と同じように杭列状の円孔が３基連続している。出土遺物はない。

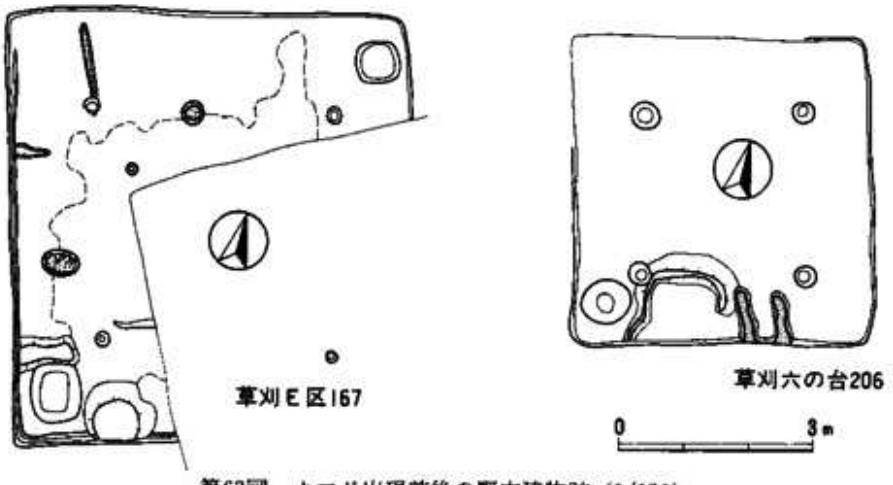
第62図　ＳＤ－001出土遺物（1/4）

# IX 補　　論

## 古墳時代における竪穴建物の構造的変遷再論

筆者はかつて集落研究の最もミクロな側面としての、竪穴建物内の空間分割を、市原市草刈遺跡の資料を用いて論じたことがある。[1]その後、石野博信や笹森健一が竪穴建物内の空間利用を論じた研究史と問題点をまとめている[2]が、笹森はさらに竪穴建物内の空間利用について興味深い論を展開している。そのうち論点の一つとなっているのがカマド出現期の竪穴建物の構造である。弥生時代～古墳時代を通して見ても、カマド出現期の前後は、竪穴建物の構造が最も変化を受ける時期と言えるであろう。本書で報告した地蔵山遺跡でも該期の竪穴建物が検出されており、その時期を中心に若干の考察を行ってみよう。

**炊事空間の分離という視点**　前稿で指摘したカマド出現前後の大きな変化は、カマド出現前夜～出現当初における炊事空間の分離である。カマド出現以前における竪穴建物内の火処は炉しかなく、しかも通常一ケ所にのみ設けられることが殆どであったため、多くの機能を兼ねなければならなかった。そのため炉の位置は建物の片隅に置かず、入口の対辺の柱間、入口と正対する位置にあった。ところがカマド出現前夜～出現当初には炉を残したまま、別処に炉あるいはカマドを設ける例が存在する。前稿で図を掲載できなかった草刈遺跡E区167号跡[3]を第63図に示すが、この例では入口の対辺側に炉を持ちながら、入口脇の貯蔵穴の北側にもう一つの炉を設け、そこにより強い火熱の痕跡を示した。この第二の炉の位置は出現期のカマドの位置と共通するものであるが、カマドを設置する該期の竪穴建物には炉を入口の対辺寄りに設けるもの、床面ほぼ中央に設けるものがある。これらの例は炊事機能を失った炉が、依然暫くの間その役割を果たし続けたことを示すものとして注目される。逆に言えば、貯蔵穴を傍らに置くと




第63図　カマド出現前後の竪穴建物跡（1/120）

いう意味の他に、炉がその機能を失っていなかったがためにカマドを入口脇の貯蔵穴に寄せて設けることになったと思われる。中には第　図の市原市草刈六ノ台遺跡206号跡[4]のように入口を挟んで貯蔵穴の反対側にカマドを設けるものもあるが、初期の入口、貯蔵穴、カマドの位置関係は笹森も指摘しているように広範囲で共通性が認められている。地蔵山遺跡でもカマドを持つ最初期のＳＩ-013がこの配置をとっている。しかしその後のカマド位置の移行は比較的速やかである。まず炉とカマドを併設する例は少なく、入口、貯蔵穴の脇にカマドを設ける竪穴建物でも炉が検出されないものが多い。したがってカマドの普及とともに、一時的に残存していた炉は急速にその役割を失ったと思われ、その後カマドが入口の対辺に移る。貯蔵穴については、暫くの間設置場所が不安定で、依然入口脇や入口下などに置かれるものが多いが、また暫くしてカマド側に移る。筆者は以上の事実を以て高橋一夫や柿沼幹夫の想定[5]を否定したのである。この変化は、草刈遺跡という一遺跡の豊富な資料を用いて検証したが、この点については資料的優位性を持つと同時に弱点でもあって、より広範な地域での検証が不十分であったとも言える。尤もとくに北関東地方の報告書では入口位置が特定されていない（施設を検出していない）ものが多く、問題がある。しかしこの間の諸施設の位置関係の変化について、笹森の論点と筆者の論点は基本的に異ならない。にも拘らず笹森が「決して渡辺のいうように一時的に入口の脇にカマドが設置されたものではないように思われる」と述べているのは不可解である。入口の貯蔵穴寄りへの偏在を認めていないということなのであろうか。

**貯蔵穴の問題**　筆者は何らかの貯蔵、収蔵施設であると考えている。しかしその機能については諸説があり、とりわけ胎盤収納施設であるとする考え方が有力である。実際にはいずれの考え方にしても直接的な根拠があるわけではないが、胎盤収納の考定にはそれなりの魅力はある。しかし筆者がそのように考えないのは次の理由による。

竪穴建物内に貯蔵穴が一般的に成立するのは、南関東においては弥生時代中期後半であるのは明らかである。弥生時代中期後半以降の竪穴建物で貯蔵穴を設けないものも勿論あるが、長軸方向北側に炉、南側に入口施設を設け、その右脇壁寄りに貯蔵穴を設置するのが基本的な構造であると言える。それ以前の竪穴建物では、建物群の１／２なり１／３に貯蔵穴が検出されたなどという例は皆無であろう。それ故縄文時代の埋甕に系譜、連続性を求めるのは不可能である。では貯蔵穴が一般的に消滅するのはいつであるか。これについては古くから和島誠一らが指摘している[6]ように、古墳時代末期から奈良時代であることは疑いえない。８世紀にはいると大型の竪穴建物であっても貯蔵穴はまず認められない。それではなぜ弥生時代の後半から古墳時代にのみ限って貯蔵穴が設けられるのであろうか。

須和田式期の新しい段階を含めて、弥生時代中期後半は環濠集落と方形周溝墓群の成立、大陸系磨製石器群が普及するなど現象的にみても大きな画期であるが、社会的には方形周溝墓に象徴されるように、最小再生産単位としての世帯の自立化の萌芽、それを単位とする宅地・耕

地占有意識の発生、世帯原理が優先することによる血縁紐帯の相対的脆弱化が想定され[7]、まさしく農耕共同体社会の成立段階と言える。生産用具や剰余生産物の管理が集団内のいかなるレベルで行われたかは議論の余地があるが、世帯単位での何らかの管理、収蔵が行われた可能性は充分である。そもそもある時点でほぼ一斉に建物内貯蔵穴が普及するという事実は、伝統的習俗での説明の余地が殆どないことを如実に示すと言えないだろうか。また古代国家の完成とともに建物内貯蔵穴が消滅するという事実もまたきわめて示唆的である。日本の古代専制国家における階級支配の構造は、基本的に共同体がそのままヒエラルヒーに組み込まれるという在り方である。その際共同体内にあった「もの」の管理は、中間的支配層となった郡司・里長層に集中したと考えられる。そこには収奪の強化という量的な変化ではなく、管理形態の質的な転換を認めるべきであろう。このように考えてこそ、多少の時間幅はあるであろうものの、特定の時点における建物内貯蔵穴の一般的消滅が説明されよう。

貯蔵穴そのもののについて見れば、とくに弥生時代のそれはきわめて小容量である。しかも弥生時代から古墳時代を通じて貯蔵穴に蓋が存在したことはほぼ間違いないであろうし、入口施設下に設けられる例も特殊ではなく、日常的かつ出し入れの頻繁な貯蔵には適さない。笹森健一はそういったことに加えて、貯蔵穴内に原位置を留めたと思われる遺物がないことを理由に、貯蔵、収蔵施設の考定を否定する。しかし竪穴建物内に原位置を留めた遺物が残る可能性は、突発的な火災(人為的なものは除かれねばならない)、天災を蒙ったもの以外は低いものとなるから、決して遍く存在するとは言えまい。確かに中筋遺跡では貯蔵穴内に何の痕跡もなかったという事実[8]も重要であるが、例えば前稿で用いた草刈遺跡E区では、火災を受けたと思われる竪穴建物の貯蔵穴に完形の土器が置かれた状態で出土している例を複数調査しており、その事実も重視しなければならない。それ故前稿では、被災建物の遺物出土状況の分析の必要性を指摘しておいた。結局貯蔵穴の機能については未解決とせざるを得ないのではあるが、ここまで述べきたったように、共同体的所有を離れ、世帯に帰属する「もの」の貯蔵あるいは収蔵施設である可能性は決して否定できないであろう。一般民衆の家屋であろうと、社会の経済構造の発展と遊離しては存在しえない。

**再び空間利用について**　笹森が述べている最も興味深い論点は、近世民家の土間空間と座敷空間の区分の淵源を古墳時代の竪穴建物に求め、女性空間と男性空間、そして両儀的空間としての内区の分割を想定していることである。さらに建物の主軸に対してカマドが右側に位置する右カマドの建物とその逆の左カマドの建物について、古墳時代を通じて右カマドが多いことから、右カマドを夫方居住、左カマドを妻方居住と推察する。この場合、貯蔵穴が胎盤収納施設であるという想定が前提の一つとなっているが、筆者のようにそれを肯定しない立場に立てば、笹森の論拠は弱くなる。また右カマドと左カマドの比率（笹森の論旨では右貯蔵穴と左貯蔵穴と置き換えても基本的に同義）が、古墳時代を通じて比較的安定しているか、漸移するの

であればよいが、もしそうでなければ問題は大きい。そして結論を先取して言えば、左右の比率の変動は小さくないのである。

ここでいくつかの遺跡を例示してみよう。まず3～4世紀の集落の例として市原市下鈴野遺跡[9]を挙げる。この遺跡では34棟の該期の竪穴建物跡が検出されているが、その多くで入口位置が確定されている。仮に入口と炉を結ぶ中軸線が建物のほぼ中央を通り、入口の脇に接して貯蔵穴を設けるものをA型、中軸線が左右どちらかに寄り、貯蔵穴を中軸線が寄った側の入口脇コーナーに設けるものをB型とすれば、A型が16棟、B型が3棟、他の15棟は貯蔵穴が検出されないなど不明確なものであった。弥生時代の終末期を含むA型では右側に貯蔵穴を設ける例が14棟、左側が1棟と右側が圧倒している。しかも左側の1棟は非常に小型の建物で、通常の建物は原則として右側に貯蔵穴を設けていると言える。ところが、B型の場合は貯蔵穴を右側に設ける例が1棟、左側に設ける例が2棟あり、例数が少ないながら左側のほうが多い。A型とB型では、明らかにB型のほうが新しく5世紀に継続するものであり、新しいタイプの建物で前代の原則が崩れることになる。次に4～5世紀の集落の例として千葉市蓁輪遺跡[10]を挙げよう。ここでは21棟の該期の竪穴建物跡が検出されている。建物のタイプとしては仮に呼んだところのB型で占められるが、そのうち右側に貯蔵穴を設けるものが3棟、左側に貯蔵穴を設けるものが7棟あり、他の11棟は貯蔵穴が検出されなかったり調査が一部に留まったりして不明なものであるが、炉の偏りを考慮すれば右側、左側それぞれに2棟ずつ追加される。それにしても右側と左側の比率は5：9となり、4世紀後半以降、むしろ左側に貯蔵穴を設けることが多くなるのが解る。なお蓁輪遺跡で確実に5世紀に編年される建物については、1：4で左側が圧倒する。5世紀前半の集落跡である船橋市の外原遺跡[11]を見ても11棟のうち右側に貯蔵穴を設けるのは1棟しかなく、左側に設ける例は、確実なものに限っても3棟、可能性として6棟の建物があり、4世紀後半から5世紀前半までは左側が右側を凌駕する。

ところが5世紀後半からまた情勢は変化する。奇しくも冒頭で例示した草刈遺跡E区167号跡と草刈六ノ台206号跡は貯蔵穴を左側に設置しているが、全体として右側が増える。当地蔵山遺跡では左側に貯蔵穴を持つ建物は皆無であった。5世紀の集落跡でその後半まで継続する千葉市大森第二遺跡[12]では、5世紀代の平面構造が明確な建物跡で左側に貯蔵穴を設けるものは8棟、右側に設けるものは13棟で右側が多い。そのうち出現期のカマドを持つ建物が3棟あったが、いずれも貯蔵穴、カマドの配置は右側であった。5世紀後半に限定される集落跡、千葉市大道遺跡[13]では、明確に該期に比定される竪穴建物跡は12棟あり、ごく小型の2棟を除いてカマドを設置していたが、入口から見て左側にカマドを設けるものは015住居跡1棟(貯蔵穴は入口施設下）のみであった。対して入口施設下に貯蔵穴を、右側にカマドを置く例が1棟、入口の右脇コーナーに貯蔵穴、その隣にカマドを置く例は6棟、他は小型建物か構造不明のもので、左右の比率は都合1：7となる。6世紀にはいるとこの傾向はもっと明確である。6世紀を中心に

5世紀後半から7世紀前半までの多数のカマドを持つ竪穴建物跡が検出されている市原市中永谷遺跡[14]では、128棟中左側に貯蔵穴、カマドを配した建物跡は2棟、入口の対辺にカマドを持ち、その左に貯蔵穴を設ける例は僅か1棟にすぎなかった。これらのデータを見ると、4世紀前半までは入口の右脇に貯蔵穴を設けるものが圧倒的であったのが、4世紀後半以降、竪穴プランが正方形となり、貯蔵穴がコーナーに配されるようになるとともに急激に左側への貯蔵穴配置が増え、右側を圧倒するようになる。しかしカマド出現前夜にはまた右側に貯蔵穴を配置するものが増え、カマド出現以降また圧倒的に右側配置となって、貯蔵穴消滅まで続いている。より多くの遺跡を集成してみれば、上記の傾向は幾分緩やかになる可能性はあるが、ここで引用した各遺跡が船橋市から市原市にかけての狭い地域であることから地域差がここに表出されていることは考えられず、少なくともこの地域においては4世紀後半～5世紀に大きな変動があることは明確である。もし笹森が言うように伝統習俗としての女性空間と男性空間の区分を想定するとすれば、この約1世紀間の急激な変化の説明は殆ど不可能となろう。また小地域毎、あるいは遺跡毎に傾向が大きく異なっていたと仮定した場合も、小地域毎、小集団毎に習俗の相違があったと言わなければならず、ますます笹森の想定は成立しない。

以上、主として笹森健一の学説に対する検討、批判を述べてきた。他人の論考の粗を探して批判することは比較的容易い。それに代わる有効な説明を筆者が有しているわけでもない。勿論笹森の論考から筆者はさまざまな示唆を得てもいる。しかし結論として笹森が述べていることは、想念が先行して事実の検討を些か軽んじた結果のような気がしてならない。

また建物構造に関する多くの研究は、当然のことではあるが、竪穴建物の内側のみにおいて行われてきた。しかし1軒の「家」の持つ空間は1棟の竪穴建物内に限られず、竪穴建物内に居間、寝間、厨房空間、物置などすべての居住機能を想定することは多少の再検討を迫られるかもしれない。筆者が前稿で示した論旨は、いまだにある程度の真理は含んでいると考えているが、事実はそれほど単純ではないと感じている側面もある。今後新しい成果が蓄積した段階で、さらに考察を試みてみたいと思う。

註1　渡辺修一「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌』11　(財)千葉県文化財センター　1985
2　石野博信「研究史　竪穴住居の屋内区分利用」『文化史論叢』　横田健一先生古稀記念会　1987
笹森健一「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究2　集落と豪族居館』　雄山閣　1990
3　前稿で触れたとおり、小高春雄氏と筆者が1984年度に調査を行ったもの。未報告。
4　未報告。前稿の資料収集中に山口典子氏からご教示、実測図の提供を受けた。
5　高橋一夫「集落分析の一視点－人口と集落の道－」『埼玉考古』21　1983
柿沼幹夫「住居跡について」『下田・諏訪』　埼玉県教育委員会　1979
高橋の論考については、南関東におけるカマド位置の変遷についての事実関係が基本的に異なることを指摘した。また柿沼の論考については、カマド出現期に上間空間の成立を想定した場合、床面の踏み締めによる硬化面の範囲、カマド出現後にまた南関東ではカマドの位置が変化することから矛盾が生じることを指摘した。以上の2点は事実によって明白である。笹森は註3文献で、柿沼の指摘が栃木県稲荷原遺跡でも確認

されたと述べているが、柿沼の指摘は笹森の論旨とも矛盾していると考える。いかがか。

6　和島誠一・金井塚良一「集落と共同体」『日本の考古学III』　河出書房　1966
7　渡辺修一「方形周溝墓群に見る房総弥生中期社会」『千葉文華』24　1989
8　大塚昌彦『中筋遺跡－第2次発掘調査報告書－』　浜川市教育委員会　1988
9　大村直『下鈴野遺跡』（財）市原市文化財センター　1987
10　加藤正信『千葉市蓮輪遺跡』（財）千葉県文化財センター　1985
11　八幡一郎・他『外原－古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査－』　船橋市教育委員会　1972
12　柿沼修平・他『京葉』（財）千葉県都市公社　1973
13　白石浩・他『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1983
14　白井久美子・他『千原台ニュータウンIV　中永谷遺跡』（財）千葉県文化財センター　1991

# X 跋　　語

以上で地蔵山遺跡A区の報告を終わる。報文中で再三述べてきたように、遺跡はこれで完結しているわけではなく、さらに豊富な調査成果を有する地蔵山遺跡B区の整理、報告が予定されているため、遺跡についてまとめることは控える。ここでは地蔵山遺跡の遺構、遺物が提起し、周辺遺跡の成果を含めて将来検討されるべき課題を列挙しておきたい。

第一に、多数の炉穴跡を残した縄文時代早期の集落跡の問題がある。土器群の分布、石器群の分布ー特にB区における、特定地点に集積した礫群ではなく広範囲に広がる焼礫の分布、そして黒曜石を素材とした剝片石器の製作跡ーと遺構群の関係、そこから抽出される遺跡の性格が検討されなければならない。

第二に、5世紀から6世紀にかけての集落跡の問題がある。この間は、おそらく竪穴建物跡が断絶なく営まれ続けているが、そこにはカマドの出現という画期が介在している。周辺遺跡の例も参照しながら、当地域におけるカマドの出現時期とカマド出現当初の在り方について検討されなければならない。

第三に、奈良時代から平安時代に営まれた墳墓群が提起する問題がある。周辺には、千葉寺地区の北側に所在した荒久遺跡で既に報告された同様の墳墓群があり、また地蔵山遺跡から僅か0.3kmしか離れていない著名な荒久古墳がある。それら周辺の墳墓群との関係、ひいては当地域における古代国家成立後の集団関係が検討されなければならない。

これらをはじめとする種々の問題点については、地蔵山遺跡B区、あるいは今後の千葉寺地区に所在した各遺跡を報告する際に考察を重ねていくことを約して擱筆の語としたい。

# 写 真 図 版

図版 1

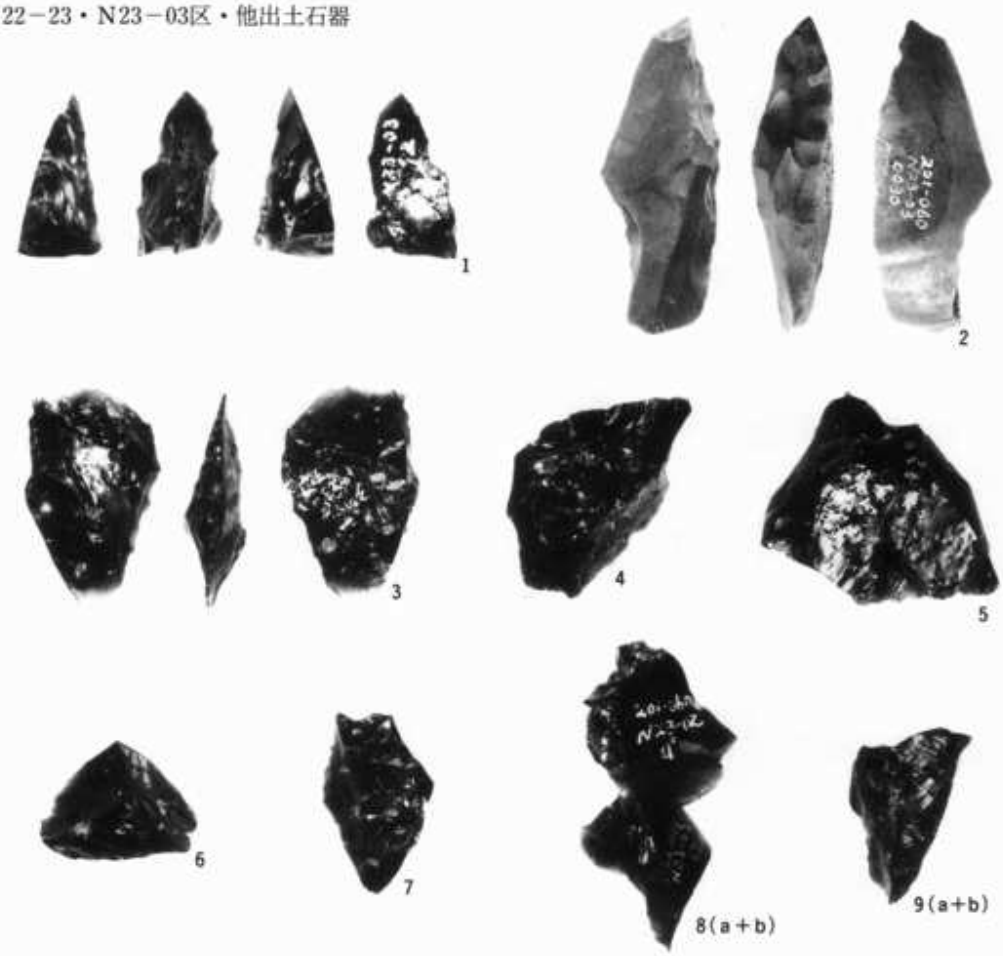
図版2

1．調査区全景
（上空より）

2．調査区全景
（北より）

1．先土器時代
遺物出土状況

N22－23・N23－03区・他出土石器




N22－03・08出土石器

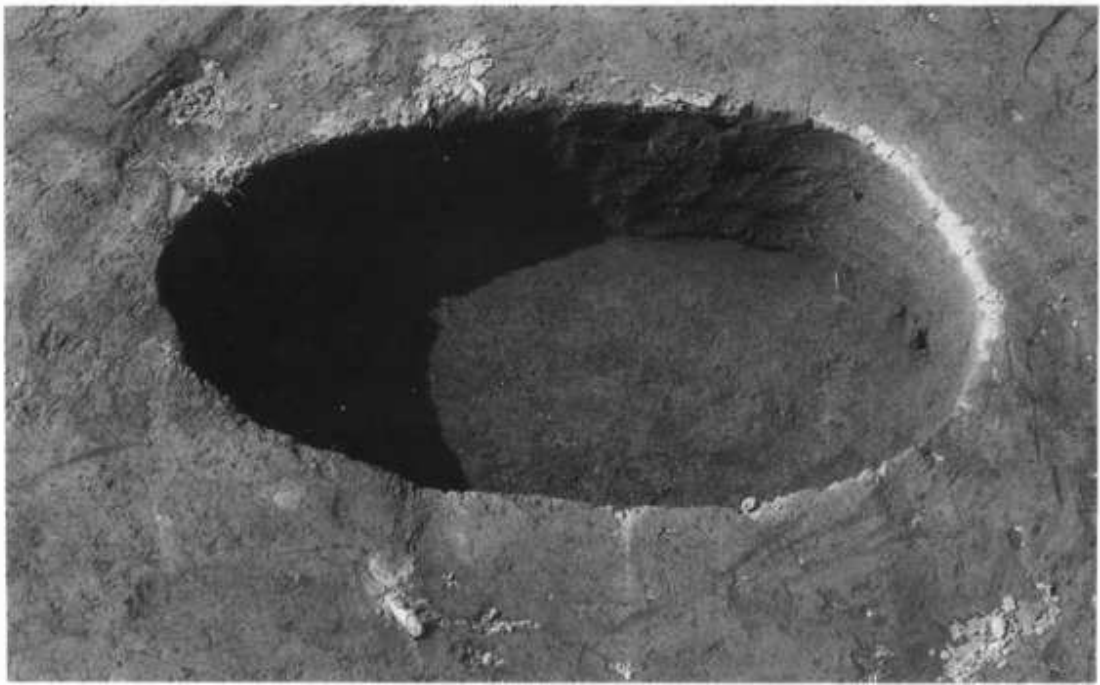
2．先土器時代石器
（1）

図版 4

先土器時代石器（2）

1．縄文時代
遺物出土状況（1）

2．縄文時代
遺物出土状況（2）

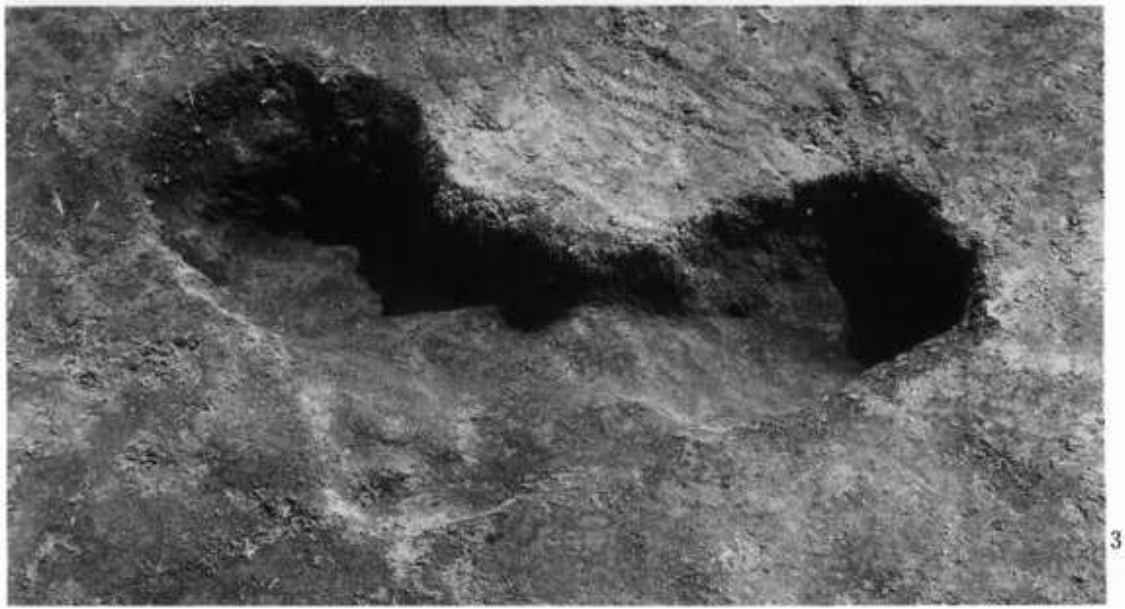


3．SK－005

図版 6

1．SK－006

2．SK－007



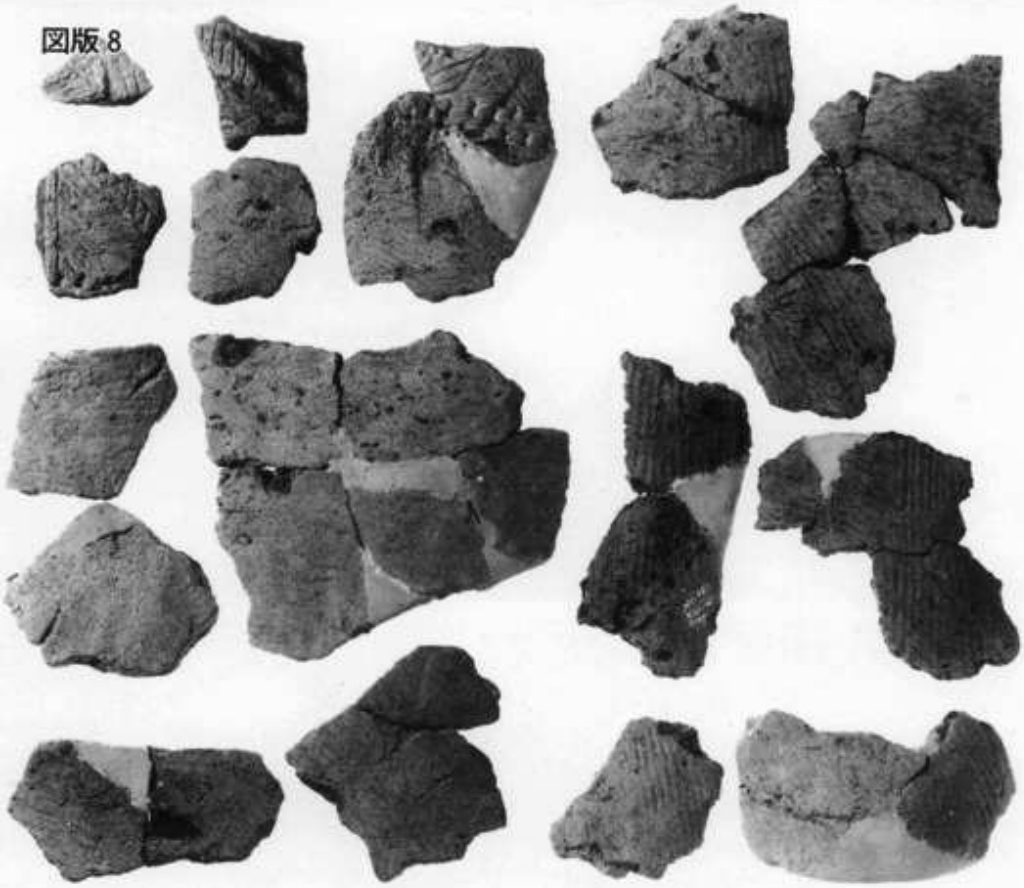
3．SK－008

1．SK－009

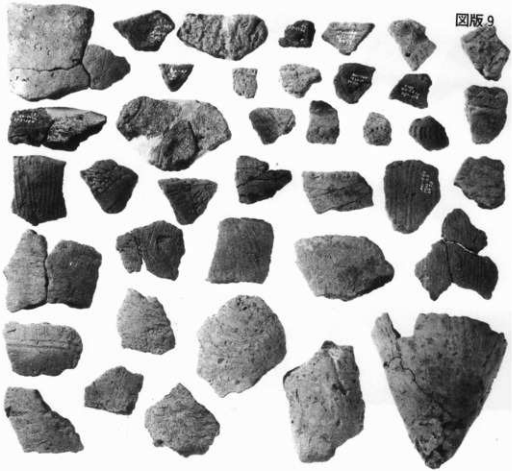
2．SK－010

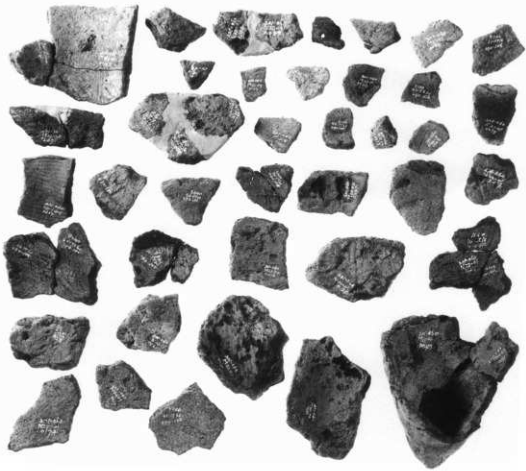
3．SK－019

図版 8



縄文土器（1）



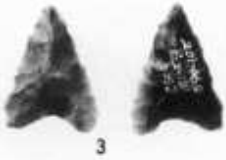


縄文土器（2）

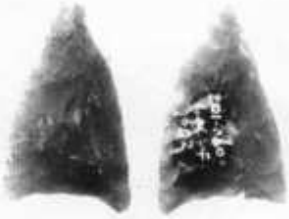
図版10

1

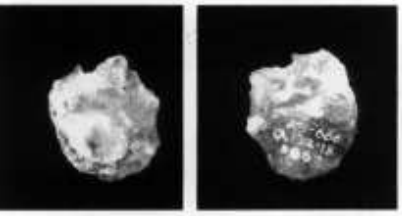
2


3

4


5

6


8

7

9

10

12

13

11

14

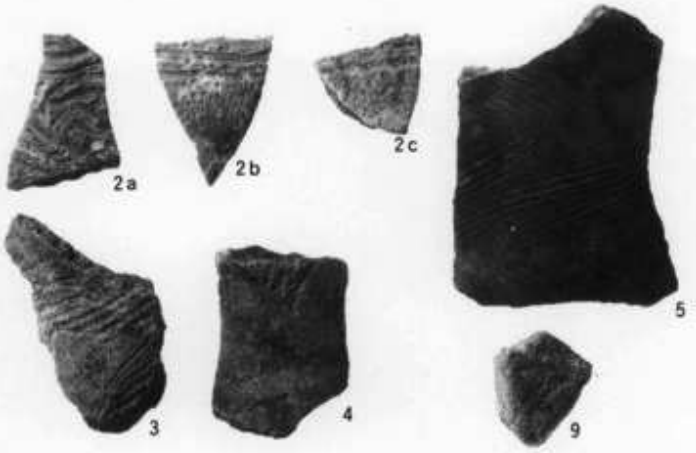
縄文時代石器

1．ＳＩ－001

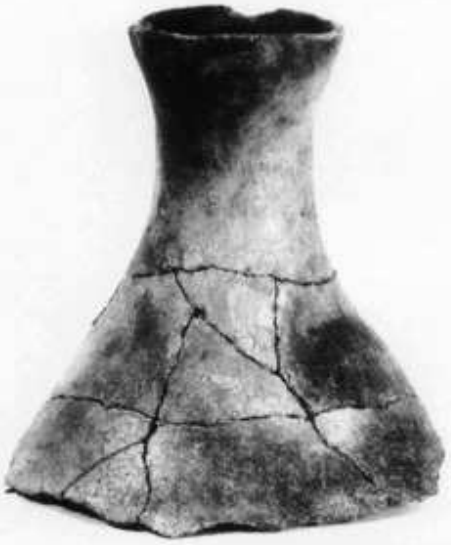
2．ＳＩ－005

3．ＳＩ－007

1．S I －010




2．弥生時代出土遺物（1）



S I －001

S I －005

S I －007

S I －010

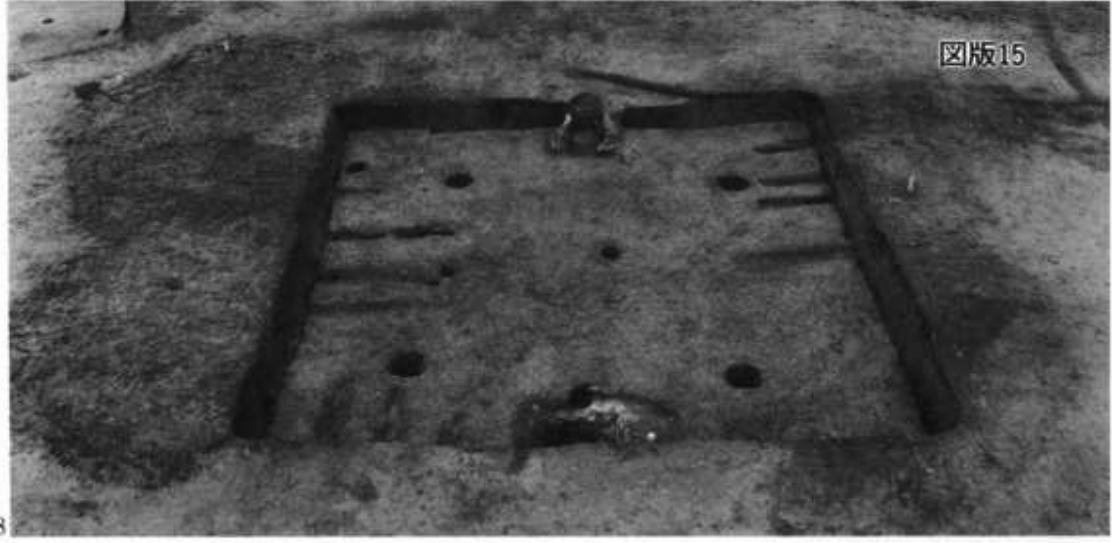
1．弥生時代
出土遺物（2）

2．S I －002

1．SI－003

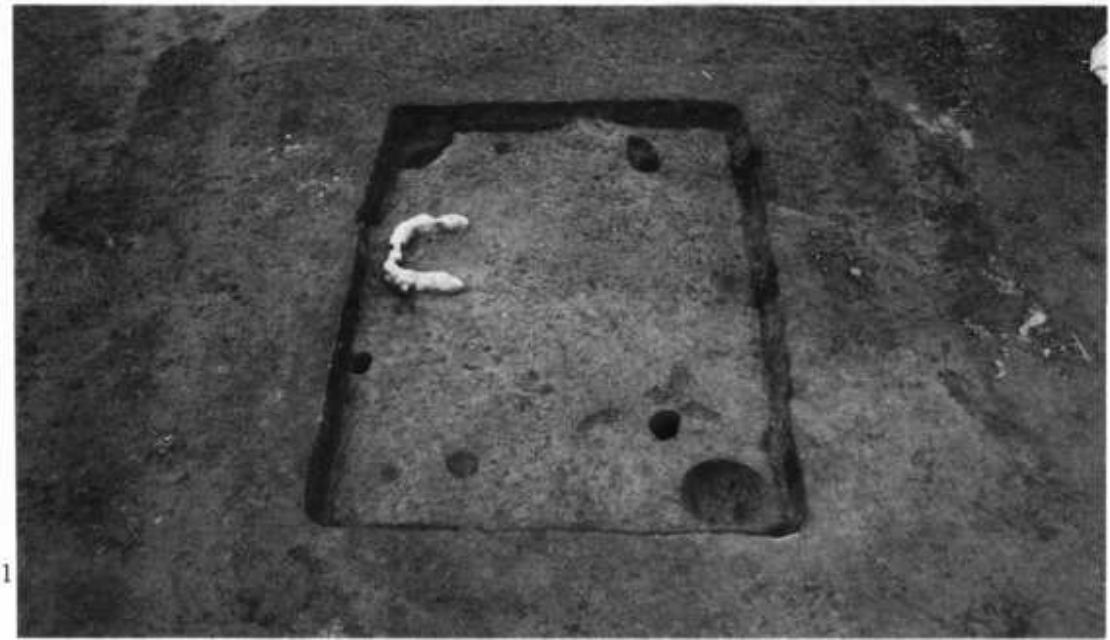
2．SI－004

3．SI－006



1．ＳＩ－008

2．ＳＩ－009



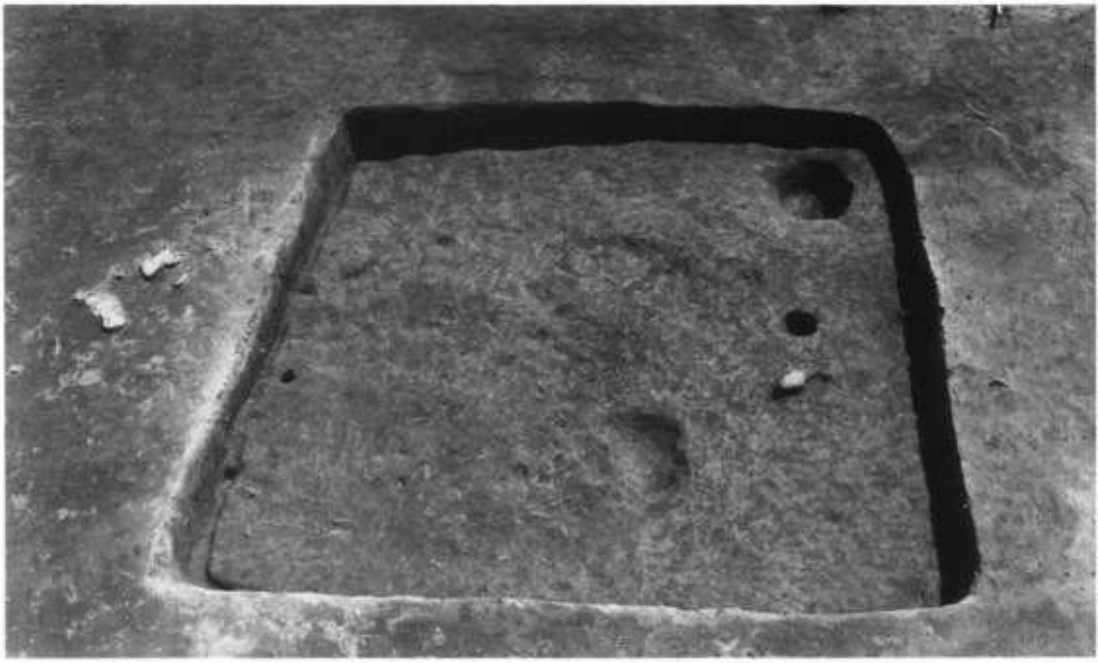
3．ＳＩ－011

1．SI－012

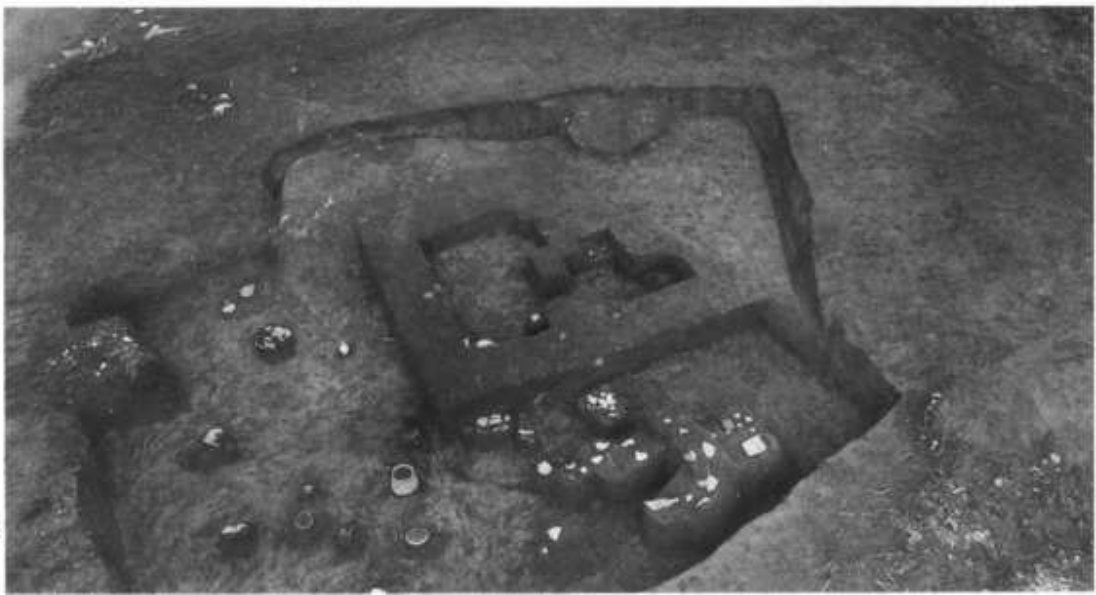
2．SI－013

3．SI－014

1．ＳＩ－015B



2．ＳＩ－016



3．ＳＩ－015A

図版18

1

2

3

4

5

6

古墳時代
出土遺物（1）

S I －002

7

8

11

10

9

S I −002

12

13

14

S I −003

1

2

3

古墳時代
出土遺物（2）

図版20

1

2

3

4

S I －006　5

1　2

S I －004

古墳時代
出土遺物（3）

S I −006

S I −008

古墳時代出土遺物（4）

7

8

1

1

2

3

S I −009

4

5

1

2

3

6

7

4

8

S I −011

5

9

古墳時代
出土遺物（5）

1

4

5

6

S I −012

3

10

S I −013

1

11

12

古墳時代
出土遺物（6）

2

5

3

13

14

S I −013

古墳時代出土遺物（7）

4

6

7

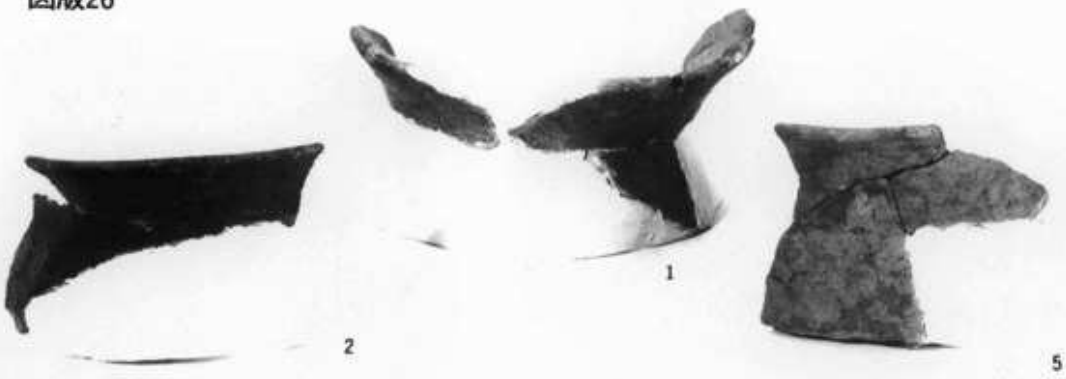
8

9

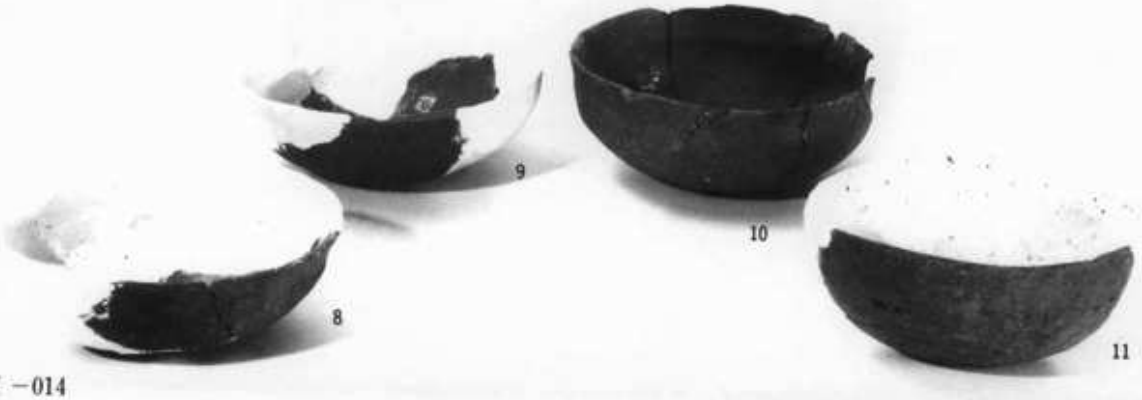
S I －013

古墳時代出土遺物（8）

図版26



古墳時代
出土遺物（9）




S I −014

1

2

4

5

3

6

9

11

10

14

18

古墳時代出土遺物（10）

S I −015B

図版28

15

20

16

17

21

22

23

古墳時代出土遺物（11）

S I －015B

29

33

31

30

2

4

3

32

1

S I −015B

古墳時代出土遺物（12）

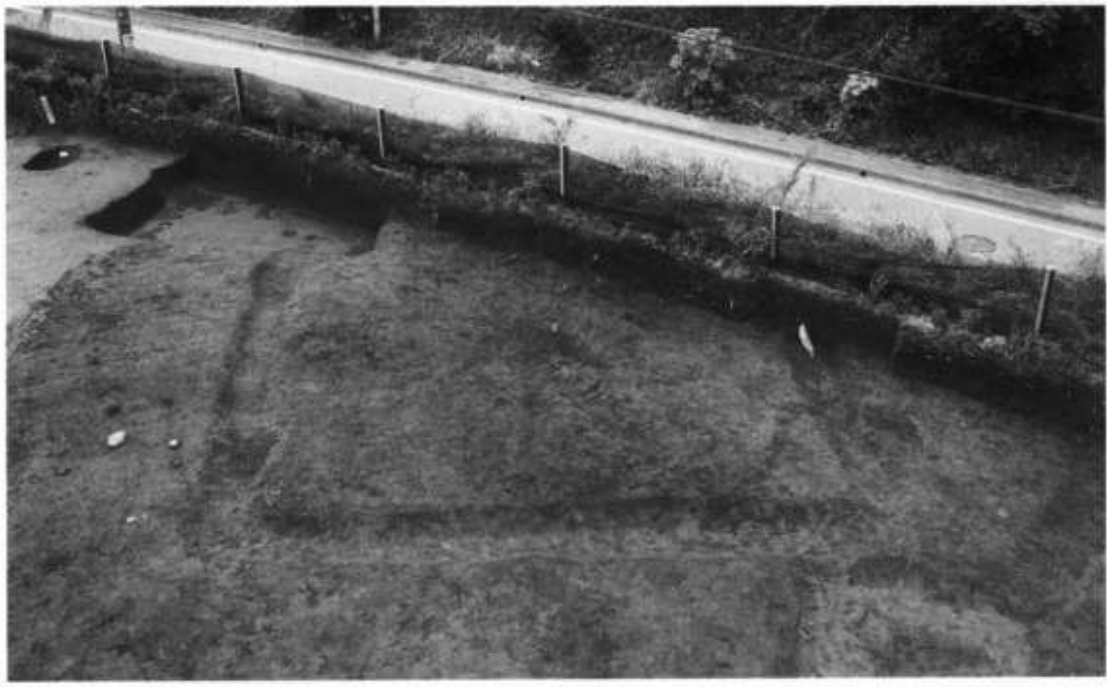
図版30

1．ＳＩ－015Ａ
出土遺物

2．ＳＸ－001

3．ＳＸ－002

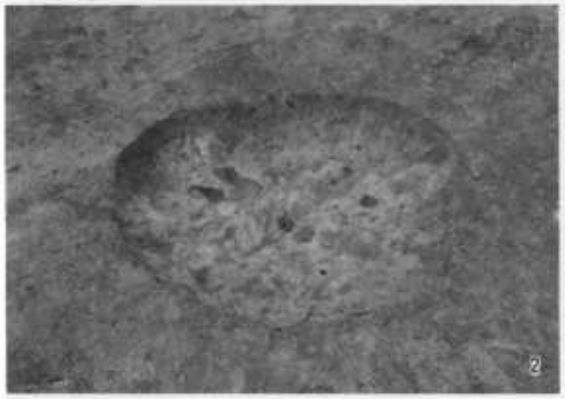
1．SX－003



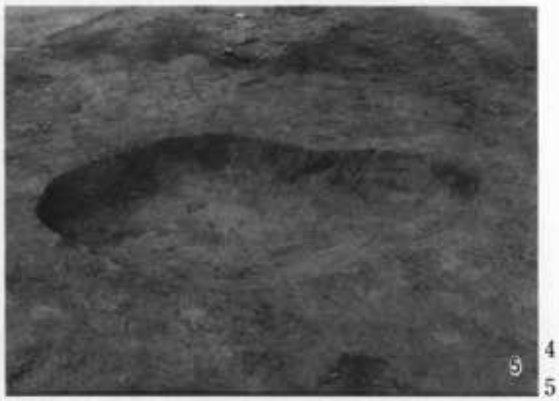
2．SX－004

3．SK－003

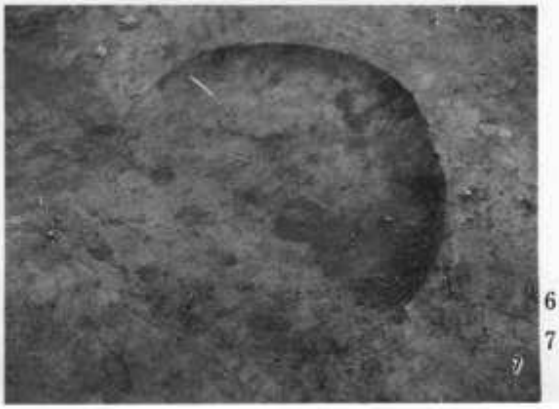
1．SK－001



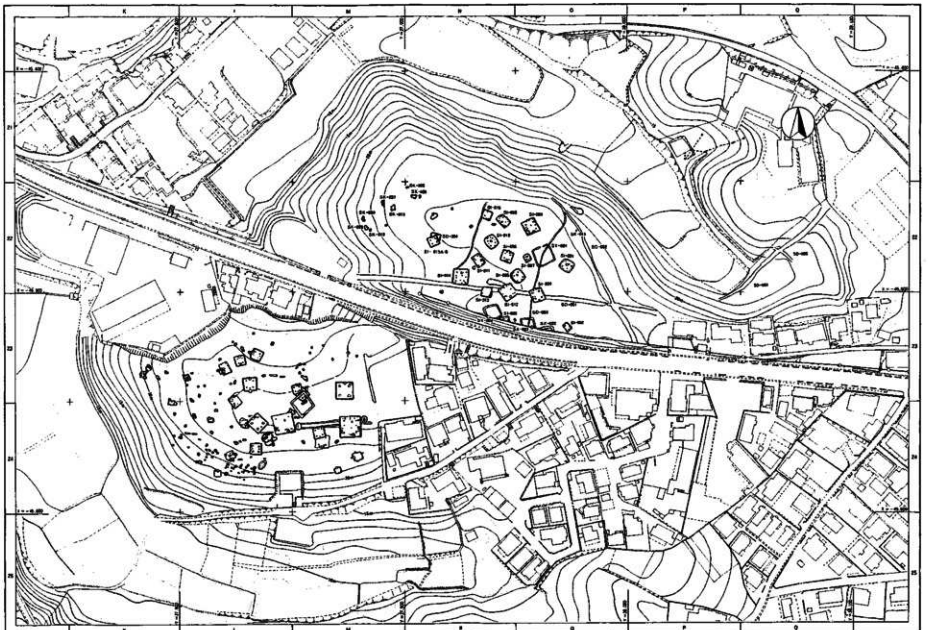
2．SK－003
3．SK－004



4．SK－011
5．SK－013



6．SK－017
7．SK－018



付図　地蔵山遺跡全体図　S＝1/1,000

千葉県文化財センター調査報告第206集

千葉市地蔵山遺跡（1）

平成4年3月24日　印刷
平成4年3月31日　発行

発　行　住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部
東京都新宿区新宿4丁目3番17号

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地

印　刷　株式会社　弘　文　社
市川市市川南2丁目7番2号